

第一部

三条西家本系統を中心とした室町時代諸本の様相

伝周桂筆『源氏物語』の様相

― 胡蝶巻を中心に ―

菅 原 郁 子

【要旨】

三条西実隆と交流のあった中世の連歌師の一人に「周桂^{しゅうけい}」がいる。周桂は宗祇の孫弟子で紹巴の師という。本論では、まず、現存する伝周桂本《天正四年本》《文禄二年本》の流れを確認する。次に、伝周桂本に関わると考えられる、紅梅文庫旧蔵『源氏物語』、天理大学附属天理図書館蔵伝周桂筆『源氏物語』、吉川史料館蔵大内家伝来『源氏物語』の胡蝶巻を比較検討し、三種の近似性や校異箇所について指摘する。最後に、三条西家本（文明本）（永正本）（大永本）（享禄本）との近似性について提示し、伝周桂本と三条西家本がどのような影響関係にあるかということを明らかにする。

一 はじめに

中世の戦乱の世において、日本中を飛び回り、縦横無尽に活躍していたのが連歌師という存在である。彼らは連歌の指導にとどまらず、武士同士、武士と公家を繋ぐ交渉役、仲介役のような役割をも担っていた。室町時代に活躍した連歌師の一人である宗祇から古今伝授を受け、多くの連歌師たちと深いつながりをもっていたのが三条西実隆である。その実隆と交流のあった連歌師の一人に〈周桂〉という人物がいる。周桂は宗祇の孫弟子にあたり、紹巴の師とされている。そこで本論では、紅梅文庫旧蔵『源氏物語』（以下、「紅梅本」とする）、天理大学附属天理図書館蔵伝周桂筆『源氏物語』（以下、「天理本」とする）、吉川史料館蔵大内家伝来『源氏物語』（以下、「吉川本」とする）の三つの本文の胡蝶巻を比較検証し、伝周桂本が三条西家本にどのように関わっているかについて考察する。

二 伝周桂本とは何か

周桂⁽¹⁾「文明二年（一四七〇）生―天文十三年（一五四四）没」は室町末期に連歌師として活躍した人物である。宗碩の門人で、直接は学ばなかったようであるが宗祇の孫弟子にあたり、最晩年の弟子に紹巴がいる。肥前有馬（長崎県）出身で号は桑宿齋といい、三条西実隆や兄弟子の肖柏にも古典や歌学を学び、師の宗碩とともに九州、中国、近畿地方をしばしば旅して連歌を指導した。師亡き後は谷宗牧と並び称された。天文十三年二月九日に七五歳で死去する。著作に「連歌新式和歌」、句

集に「周桂発句帖」などがある。実隆の雑務や庶務を行い、『源氏物語』の書写や校合を手伝い、菅公事などで朝倉氏などの地方の大名とのパイプ役をも務めた人物である。

まず、本論で対象とする三つの本文⁽²⁾（紅梅本・天理本・吉川本）について確認する前に、それに関連する三条西家本の流れを押さえておきたい。上野英子氏⁽³⁾によると、三条西家本の写本の流れは以下の通りとなる。

(1) 文明本↓(2) 永正本↓(3) 大永本↓(4) 享禄本

文明本(1)は、実隆が全冊を一人で書写し、文明十七年（一四八五）閏三月二十一日に完成、一条兼良の揮毫による銘が付けられ、実隆はこれを宗祇や肖柏の源氏講義を受けた際、自らのテキストとして使用したという。永正本(2)は、実隆が資金繰りのために文明本を売却した当日から作成され、底本や校合本などについて詳細な記述が残っておらず、疑問の多い本文であり、おそらく永正三年（一五〇六）閏十一月頃に完成したという。大永本(3)は、永正本よりも最初に作成された文明本に近い本文であり、桐壺・帚木巻にのみ実隆が関与し、残巻の書写は二人の息子たち（公順・公条）に任せていたようで、物語が完成したのは大永元年（一五二一）十月であるという。享禄本(4)は、大永本を売却した後、二人の息子たち（公順・公条）とともに実隆が書写したもので、読合・校合過程などを含めると、享禄四年（一五三二）二月に完成したという。

こうした実隆が作成した三条西家証本と関わる本文の一つに、周桂本がある。上野氏⁽⁴⁾によると、文明本の転写本系統が紅梅本にあたり、永正本は吉川本に影響を与えた本文である可能性が高く、大永本に影響

を与えたのが天理本であり、その天理本の影響を受けて作成されたのが享禄本で、その享禄本が日本大学蔵三条西家証本(以下、「日大本」とする)であると指摘する。

そこで、三条西家本と関わっているとされる伝周桂本の流れをふまえて、紅梅本・天理本・吉川本の三つの本文の伝本書誌を整理・明示したうえで、具体的な本文比較を行い、検証してみたい。

『実隆公記』⁽⁵⁾によれば、周桂本は大永年間に書写されたようである。

- (1) 源氏橋姫・椎木巻周桂借請之(大永五年七月十七日条)
- (2) 周桂宇治二帖返之、又二帖遣之(大永五年七月二十三日条)
- (3) 周桂源氏本借用、二帖^{松合・松風}遣之(大永六年三月二十三日条)
- (4) 周桂源氏本書寫功終云々、今日花散里巻持来之、一部全備神妙、(大永七年六月五日条)

- (5) 周桂来、源氏本持来令見之、外題所望也、色昏又源氏銘等所望(大永八年五月十四日条)

- (6) 周桂遺状、源氏本六冊返之、残三冊也、近日可返遣也(享禄四年五月二十二日条)

こうした『実隆公記』の記述をふまえると、周桂本の流れは以下の通りとなる。

- (1) 大永五年(一五二五)七月十七日より、周桂が〈周桂本〉の作成を開始し、実隆から〈大永本〉の橋姫・椎木巻を借りている。
- (2) 大永五年七月二十三日、宇治の二帖(橋姫・椎木巻)を返した上で、更に二帖(巻名は不明)を借りている。
- (3) 大永六年(一五二六)三月二十三日、二帖(絵合・松風巻)を実隆より借りている。

- (4) 大永七年(一五二七)六月五日、師の宗碩とともに来て、周桂筆源氏物語を書写し終え、花散里巻を持参している。

- (5) 大永八年(一五二八)五月十四日に、完成した周桂本を持参し、実隆に外題の揮毫を所望している。

* (5) と (6) の期間に、実隆は大永本を売却

- (6) 享禄四年(一五三二)五月二十二日に、実隆は新たな源氏本(「享禄本」)を作成するため、周桂から大永八年に完成したと思われる周桂本のうち、合計で九帖(周桂本作成時に周桂が実隆から元々借り受けた橋姫・椎本・絵合・松風・花散里巻の五帖か、他四帖は帖名不明)を借り受ける。

このように、周桂は実隆より数冊の〈大永本〉を借り受け、大永七年にとりあえず完成させ、大永八年に実隆に外題の揮毫を所望している(以下、「大永八年周桂本」とする)。さらに、大永八年周桂本は実隆が〈享禄本〉を作る際に借用されていることから、大永八年周桂本が〈享禄本〉の一部転写されている可能性も考えられる。つまり、大永八年周桂本は三条西家本の元々取り混ぜ本の可能性も高いといえよう。

上野氏⁽⁶⁾によれば、現存する周桂本には、大別すると《天正四年本》AとEと、《文禄二年本》Fの二つの流れが考えられるという。

『天正四年本』に関する書誌

A 東海大学桃園文庫蔵『源氏物語若菜上』(古写本一冊・函架番号、桃六一二〇)

「周桂以自筆本校合畢」「紹巴所持本也」(後遊紙二丁ウにある二つの識語)

B 東海大学桃園文庫蔵『源氏物語』(写本四十六冊、桐壺・帚木・

空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・少女巻欠。函架番号、桃六―三十四)

令校合之奥書 此源氏物語者桑宿周桂一筆也 但四冊不足予書統畢 校合及数度者也

天正四年孟秋中澣 臨江齋紹巴在判(夢浮橋卷末の識語)

C 東海大学桃園文庫藏『源氏物語』(写本七冊、存桐壺 籌木・空蟬・

夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀。函架番号、桃六―五二)

「一、此物語書ハシムルハ寛弘ノ始ル也 康和ニ流布殊五条三品

京極黃門ノ比賞翫云々 寛弘元年ヨリ寛永二十年迄千百八十一年

歟(桐壺卷 前遊紙の巻頭注の注記)

紹巴自判ノ本ニテ句ニ文ニ遂再校畢(籌木卷末の識語)

D 花園大学土岐武治文庫藏

此源氏物語者桑宿周桂一筆也 但四冊不足 予書統畢 校合及数度者也

天正四年孟秋中澣 臨江齋紹巴判

慶安元仲夏 周桂筆紹巴奥書之以本 校合点句切無相違書写畢

(桐壺奥)

E 天理図書館藏『源氏物語』(写本五十四冊、天理図書館目録番号七五九)

(墨筆)「天正七九四書 五日一校了 臨江本也」(以上、第十八冊目)

(墨筆)「右本者周桂筆臨江齋所持以本一校了」(墨筆)「天正十八月廿三日一校了」(朱筆)「朱点了」(以上、第二十三冊目)

(朱筆)「天正十一八廿六日朱了」(朱筆)「以臨江齋本校了」(以上、

第四十冊目

(墨書)「天正八十月廿日一校了」(夢浮橋奥)

『文禄二年本』に関する書誌

F 天理図書館藏伝周桂筆源氏物語(写五十四冊+目録・函架番号九一三・三六/イ八三・一〇五四)

「連歌師周桂筆 源氏物語全部/奥書者紹巴」(添付目録の極め)

「此源氏物語遂一覽了 文禄二年三月望 法橋紹巴(花押)」(夢浮橋卷末)

「三千二百五十七号 源氏周桂筆篋入/朱書奥書紹巴筆 五十四帖」(各冊表紙右肩に近年の付箋貼付)

このような書誌を明示したうえで、上野氏⁷⁾によれば、天正四年(一五七六)、紹巴五十二歳時に、亡師周桂の一筆本源氏物語(五十一帖)に不足分の四帖を自ら書写して揃い本とし、全冊を数度にわたって校合したという。この写本を〈天正四年紹巴補写周桂本〉と仮称するなら、Aはその端本または転写本、BCはツレで、〈天正四年紹巴補写周桂本〉を用いて寛永二十年(一六四三)頃に校合したもの、Dは慶安元年(一六四八)の校合本、Eは「周桂筆臨江齋所持」の表記のみであり、紹巴補写の記述が無いが、〈天正四年紹巴補写周桂本〉で校合した本文の可能性が高いという。そして、文禄二年(一五九三)三月に、紹巴はFの周桂筆源氏物語を一覽し、識語を揮毫したのではないかという。

これらの書誌、上野氏の見解をふまえると、現存する周桂本の流れは以下のようになる。

(1) 天正四年(一五七六) 七月、周桂自筆源氏物語五一帖に紹巴

が四帖追補したのか。〈天正四年本〉

(2) Aは〈天正四年本〉の端本または転写本か。

(3) BCはツレで、〈天正四年本〉を用いて寛永二十年(一六四三)に校合したもののか。

(4) Dは〈天正四年本〉を用いて慶安元年(一六四八)に校合したもののか。

(5) Eは〈天正四年本〉を用いて天正七年(一五七九)九月から十一年(一五八三)八月までに校合したもののか。

(6) Fは文禄二年(一五九三)三月、紹巴が周桂筆五四帖を一覧し、朱を入れたもののか。

つまり、現存する周桂本は《天正四年本》と《文禄二年本》という二つの流れに大別され、A・Eは《天正四年本》、Fは《文禄二年本》の流れに位置づけられる本文ということになる。『実隆公記』にみえる大永八年周桂本が、二つのどちらの流れかは不明である。しかし、Fの書誌に「文禄二年三月望法橋紹巴」とあることから、これが今回比較対象として掲げた天理本にあたると思われる。

天理本については、『天理図書館稀書目録』⁽⁸⁾に次のように書誌がある。

源氏物語 寫 五十四卷 五十四冊 二三〇七

紫式部著 傳周桂筆 綴葉装 栗皮色表紙 用紙鳥の子 一八種

一六・五種 九行 題簽中央金銀泥雲紙「(各卷名)」内題なし

識語(里村紹巴筆) 此源氏物語遂一／覽了／文禄二年三月望法橋紹巴(花押)(第一冊表紙附箋) 源氏五十四帖周桂筆／朱書入 奥書紹巴筆(青表紙本 室町時代末期寫 同時代筆朱書入あり 「連歌師周桂筆源氏物語全部奥書著紹巴」とある古筆極札を附す

九一三・三六一イ八三)

書誌を見る限りでは、前述Fの書誌と一致する箇所が見える。これについて、加藤昌嘉⁽⁹⁾氏は、

室町時代に書写された『源氏物語』の写本である。連歌師周桂(一四七〇～一五四四)が書写したという極め札が付されている。また、「夢浮橋」巻の裏見返しに「此源氏物語 遂一覽了 文禄二年三月望法橋紹巴「花押」と記されており、連歌師紹巴(一五二五～一六〇二)が文禄二年(一五九三)にこの本を通読し終えたことがわかる。

本文の行間に、朱筆で多くの書き込みがなされているが、これは、セリフの発話者が誰か、どういう含意の表現か、といった注釈を、紹巴が記し留めたもの。古注釈書類に見えないユニークな解説がままあり、注目に値する。本文の方も、(いわゆる青表紙本)諸本とは異なる部分を持ち、肖柏本や古活字本と重なる部分もある。室町時代後期～江戸時代初期の『源氏物語』享受を知るための重要資料である。

と述べており、周桂の兄弟子にあたる肖柏の肖柏本や、古活字本と重なる部分のある重要な本文資料であり、周桂の弟子紹巴による朱筆の独特の書き込みが数多くあることが指摘されている。

また吉川本⁽¹⁰⁾は、吉川史料館が所蔵する『源氏物語』であり、五十四帖揃、枳形本(縦十六・八×横十七・〇糎)、列帖装、各帖各筆の寄合書き、一面十行書で和歌は改行一／二字下げ、厚手の鳥の子料紙、中央に竜文様の統一題簽が貼られ、夢浮橋巻末には次のような識語がみえる。

此物語全部依多々良

持長勸発諸家勸筆功

須為将来之至宝而已

槐陰桑門堯空記（二八ウ）

識語によれば、吉川本は「多々良持長」の依頼により、「堯空（三条西実隆）」が制作したものであると考えられ、実隆出家後（永正十三年（二五二六）四月十三日）以降の奥書とされる。

奥書にみえる「多々良持長」とは、『大内氏実録』⁽¹¹⁾によれば、

陶持長、兵庫頭に任ず。（古文書）天文六年正月八日、従五位下に叙す。（歴名土代）○系図に見えず。按るに兵庫頭の名、また陶隆満この持長の子とおぼしくて安房守といひ、（中略）且風土注進所載保寧日記に、陶安房守妻卒、就豊田妙栄寺喪礼、とあるを以て見るに、持長は弘詮の子なるべくおもはる。

とあり、天文六年（一五三七）一月八日、多々良（陶）持長は従五位下に叙されている。『歴名土代』⁽¹²⁾によれば、「従五位下」の項に、「多々良持長 同六正八、四十一歳」と兵庫頭として持長の名がみえ、明応六年（一四九七）生まれの四十一歳であることがわかる。『保寧日記抄』⁽¹³⁾

の記述によれば、「同三年丁巳云々、八月十九日陶安房守妻卒、就豊田妙栄寺喪礼焼香規盛和尚」とあり、子と覚しき陶安房守（陶隆満）の妻が亡くなり、妙栄寺が喪に服したとある。妙栄寺とは陶弘詮の母の菩提寺であることから、『大内氏実録』は持長が陶弘詮の子ではないかという。さらに大内家の家来大庭賢兼によって書写されたとされる『源氏物語』⁽¹⁴⁾の奥書によれば、宗碩の源氏物語講釈が行われたのが弘詮宅であったという。持長が弘詮の子であるかは不明であるが、弘詮の子孫で

ある可能性は高いといえる。

こうした実隆の影響下のもとに作成されたと考えられる吉川本には、「逍遙院殿御奥書源氏之御本筆者目録」⁽¹⁵⁾（以下、「逍遙院筆者目録」とする）が添えられており、「逍遙院（三条西実隆）」をはじめ、約四十名による寄合書であることがわかる。その目録の書写者の中に周桂筆と明記されているものがある。

こてう 周桂法師 不得考

連歌師古_キ懷氏_ノ中_ニ有_之

「逍遙院筆者目録」によれば、胡蝶巻が周桂筆であるという。「逍遙院筆者目録」によって伝周桂筆とされるのは胡蝶巻の他、「総角」「東屋」のみであり、吉川本は実隆が〈永正本〉を所持していた時期に作成されたとと思われる本文である。

また、周桂は師の宗碩とともに、享祿四年（一五三一）七月から天文二年（一五三三）の三年間にかけて中国九州旅行に出かけている⁽¹⁶⁾。『実隆公記』によれば、

周防国便宜藤田下向云々、状共遣宗牧、長恨哥下之、周桂点共遣之（天文二年二月十七条）

とあり、周桂は天文二年頃には大内家のある周防国にいたことが推測できる。「逍遙院筆者目録」には周桂の他、実隆邸へよく出入りしていた連歌師「宗碩」「宗牧」「等運」の名もみえることから、おそらく大内義隆のもとで、多々良（陶）持長の発案により、実隆を中心とする公家と、義隆・持長が親しくしていた連歌師たちへの書写依頼によって、吉川本または陶家（持長）本とも言える『源氏物語』が成立したのではないかと考えられる。

以上、〈文明本〉と関連のある紅梅本、〈永正本〉と関連のある吉川本、〈大永本〉と関連のある天理本の書誌を確認した。これをふまえて、三種の本文を比較検討し、その近似性について検証する。

それでは 周桂本に関わるこうした書誌⁽¹⁷⁾をふまえて、実際に周桂本に関連すると思われる紅梅本・天理本・吉川本の胡蝶巻の本文を比較検討し、その近似性について解き明かしたい。三種の本文を比較検討した結果、胡蝶巻の三種の校異例は以下の通りである⁽¹⁸⁾。

(B) 吉川本と天理本との校異……六五例

(C) 紅梅本と吉川本との校異……三六例

(A) が一番校異数が多く、(C) が一番校異数が少ない結果となった。これをふまえて、(A) ～ (C) の校異例を具体的に挙げてみる。

〔紅〕かるゝかに
〔紅〕かちとりの

〔天〕かるらかに
〔天〕かちとり

〔紅〕つかひを
〔紅〕わか心々に

〔天〕つかひ
〔天〕心々に

紅
たちそひて

〔天〕 あそひて

紅
風

〔天〕風すこし

紅　ひとかさね

〔天〕ひとへかさね

〔紅〕君をなむ

〔天〕宮をなむ

〔紅〕 おほいてさらは世のたとひのちのをそれとおほいて
 〔天〕 おほひてさらは世の諭の後のおやをそれとおほひて

〔紅〕 うしろめたくこそと

《天》うしろめたくのみこそと

紅
みでこそ

〔天〕見てこそ

字母レベルの相違において、天理本は紅梅本に比べて圧倒的に漢字表記が多く、両者はあまり相関性がみられない。紅梅本と天理本の校異においては、「ら」「君」「宮」「た」「ち」などの一字程度の差異、「わか」

「の」「を」「侍り」「すこし」「日」「きこえ給」「おや」「のみ」「見てこそ」「かたよりに」の有無、「たち」「あそ」「ひと」「ひとへ」「のたまへ」「聞え給へ」の差異などが見られる。一字や二字程度の差異が多く、表記としては近似しているといえる。ただし、誤字脱字の域を超える表記の違いも見えることから、大元は同じ系統の本文であるといえるが、他本も校合したような傾向も見られる。他の諸写本との校異は後程改めて述べる。

(B) 吉川本〈吉〉と天理本〈天〉の校異例〈全六五例中十九例〉

〈吉〉 給へと	〈吉〉 こしまより
〈天〉 の給へと	〈天〉 岸より
〈吉〉 つかひを	〈吉〉 はかな
〈天〉 つかひ	〈天〉 はかなく
〈吉〉 とも	〈吉〉 たちそひて
〈天〉 樂とも	〈天〉 あそひて
〈吉〉 わたれる	〈吉〉 まへき
〈天〉 あたれる	〈天〉 さるへき
〈吉〉 きこえ給ふ	
〈天〉 《該当本文なし》	

〈吉〉 心くるしう
 〈天〉 心くるしうなむ女君はおほしける

〈吉〉 兵部卿の宮の
 〈天〉 兵部卿宮
 〈吉〉 君をなん
 〈天〉 宮をなむ

〈吉〉 心はえを
 〈天〉 心を
 〈吉〉 けたかう
 〈天〉 けちかう

〈吉〉 くちおしかへう
 〈天〉 くちおしかるへう

〈吉〉 おりはかりなむ
 〈天〉 はかりなむ
 〈吉〉 いとまめやかにて
 〈天〉 いとまめやかに

〈吉〉 すし
 〈天〉 うちすし
 〈吉〉 たまふへかめるかなと
 〈天〉 給めるかなと

天理本は先ほどと同じように、字母レベルにおいては吉川本に比べて漢字表記が圧倒的に多く、あまり相関性がみられない。吉川本と天理本の校異においては、「君」「宮」「た」「ち」などの一字程度の差異、「の」「を」「く」「楽」「日」「きこえ給」「なむ女君はおほしける」「はえ」「る」「おり」「て」「うち」「へか」の有無、「こしま」「岸」「たち」「あそ」「わた」「あた」「ま」「さる」の差異などが見られる。(A) 紅梅本と天理

本の比較と同様に、一字や二字程度の差異が多く、表記としては近似しているといえる。全体としては、(A) 紅梅本と天理本よりも、(B) 吉川本と天理本のほうがわずかに近似性が高い。吉川本は天理本の表記態と比較すると、誤字や脱字が多い傾向が見られる。大元は同じ系統の本文であるといえるが、他本を校合したとすれば、天理本は、〈文明本〉の流れをくむ紅梅本よりも、〈永正本〉の流れをくむ吉川本により近似している本文であるといえよう。

(C) 紅梅本〈紅〉と吉川本〈吉〉の校異例〈全三六例中十六例〉

〈紅〉のたまへと	〈紅〉かるゝかに
〈吉〉給へと	〈吉〉かるらかに
〈紅〉ゝしより(きしより)	〈紅〉わか心々に
〈吉〉こしまより	〈吉〉心くくに
〈紅〉かくとも	〈紅〉まかりにけなまし
〈吉〉とも	〈吉〉まかりにけ侍なまし
〈紅〉おれつゝ、	〈紅〉さるへき
〈吉〉おれて	〈吉〉まへき
〈紅〉心くるしうなむ女はおほしける	
〈吉〉心くるしう	

〈紅〉人しれす	〈紅〉おほえけれ
〈吉〉人しれぬ	〈吉〉おもほえけれ
〈紅〉まつ	〈紅〉わなゝかるゝ
〈吉〉まつこの	〈吉〉わなゝかる
〈紅〉うしろめたくこそと	
〈吉〉うしろめたくのみこそと	
〈紅〉みてこそ	〈紅〉かたよりに
〈吉〉みてこそ	〈吉〉かたよりに

紅梅本は吉川本と非常に近似性が高い。字母レベルにおいては、紅梅本と吉川本は漢字表記がともに少なく、共通した漢字表記が多い。紅梅本と吉川本の校異においては、「る」「ら」、「す」「ぬ」などの一字程度の差異、「の」「わか」「かく」「侍」「なむ女君はおほしける」「も」「この」「る」「のみ」の有無、「ゝし(きし)」「こしま」「つゝ」「て」「ま」「さる」の差異などが見られる。(A) 紅梅本と天理本、(B) 吉川本と天理本と同様に、一字や二字程度の差異が多く、表記としては近似しているといえる。全体としては、(A) (B) との比較よりも、圧倒的に(C) 紅梅本と吉川本の方が近似性が高い。大元は同じ系統の本文であり、紅梅本のもととされる〈文明本〉の流れをくむ〈永正本〉を参考として、吉川本が書写された可能性が考えられる。また、他の諸写本を参考にしたような箇所については(A) (B) と同じように次節で改めて述べる。

四 三種の胡蝶巻と諸写本との比較

それでは、三節の比較検討をふまえて、一番近似していた(C)紅梅本(紅)と吉川本(吉)の比較をもとに、紅梅本と大島本⁽¹⁹⁾(大)との比較検討を行った。参考として、紅梅本と大島本の校異例に吉川本の表記を添えた。

(D) 大島本(大)と紅梅本(紅)の校異例(全三四例中十六例)

〈大〉 かるらかに

〈大〉 はかな

〈紅〉 かるゝかに

〈紅〉 はかなき

〈吉〉 かるらかに

〈吉〉 はかな

〈大〉 心々に

〈大〉 まかりにけ侍なまし

〈紅〉 わか心々に

〈紅〉 まかりにけなまし

〈吉〉 心くゝに

〈吉〉 まかりにけ侍なまし

〈大〉 心くるしう／〈朱〉△△△削

〈紅〉 心くるしうなむ女はおほしける

〈吉〉 心くるしう

〈大〉 人しれぬ

〈大〉 はかゝしうも

〈紅〉 人しれす

〈紅〉 はかゝしう物も

〈吉〉 人しれぬ

〈吉〉 はかゝしうも

〈大〉 けちかう

〈大〉 みてこそるこそ(朱)

〈紅〉 けたかう

〈紅〉 みるこそ

〈吉〉 けたかう

〈吉〉 みるこそ

〈大〉 おほいてさらは世のたとひの、ちのおやをそれとおほいて

〈紅〉 おほいてさらは世のたとひのちのをそれとおほいて

〈吉〉 おほいてさらは世のたとひの、ちのをそれとおほいて

〈大〉 うちすし

〈大〉 まつこの

〈紅〉 すし

〈紅〉 まつ

〈吉〉 すし

〈吉〉 まつこの

〈大〉 わなゝかる

〈紅〉 わなゝかるゝ

〈吉〉 わなゝかる

〈大〉 うしろめたくのみこそと

〈紅〉 うしろめたくみこそと

〈吉〉 うしろめたくのみこそと

〈大〉 見てこそ

〈大〉 かたよりに

〈紅〉 みてこそ

〈紅〉 かたよりに

〈吉〉 みてこそ

〈吉〉 かたよりに

胡蝶巻において、(C)と同じくらいの校異数で、(D)大島本と紅梅本も非常に近似性が高い。さらに、大島本と紅梅本の校異箇所の大島本の表記は、吉川本と同じ場合が多くみられた。これらの本文は大元が同じであるか、あるいは校合された可能性が極めて高いといえる。

さらに、大島本〈大〉以外の諸写本と、三種(紅梅本・天理本・吉川本)の校異箇所との比較を行ってみる。

(E) 三種の校異箇所と他系統写本との比較

* 比較した諸写本²⁰⁾：大島本〈大〉

尾州家本(尾)／保坂本(保)／陽明家本(陽)／国冬本(国)
／麦生本(麦)／阿里莫本(阿)

〈大〉かちとりの(国)

〈紅〉かちとりの

〈吉〉かちとりの

〈天〉かちとり(尾)(保)(陽)(麦)(阿)

〈大〉きしより(尾)(麦)(国)

〈紅〉ゝしより(きしより)(保)(陽)

〈吉〉こしまより

〈天〉岸より(阿)

〈大〉つかひを(国)

〈紅〉つかひを

〈吉〉つかひを

〈天〉つかひ(尾)(保)(陽)(麦)(阿)

〈大〉はかな(国)

〈紅〉はかなき(尾)(保)(陽)(麦)(阿)

〈吉〉はかな

〈天〉はかなく

〈大〉心々に(保)(陽)(国)

〈紅〉わか心々に

〈吉〉心くくに

〈天〉心々に

〈尾〉こゝろくに

〈麦〉をいくに

〈阿〉をひくに

〈大〉たちそひて(尾)(保)(陽)(国)

〈紅〉たちそひて

〈吉〉たちそひて

〈天〉あそひて(麦)(阿)

〈大〉まかりにけ侍なまし(国)

〈紅〉まかりにけなまし(保)(陽)(麦)(阿)

〈吉〉まかりにけ侍なまし

〈天〉 まかりにけ侍りなまし
〈尾〉 まかりにけはへりなまし

〈大〉 のこるなく 〈尾〉 〈保〉 〈陽〉

〈紅〉 のこりなく 〈国〉 〈麦〉

〈吉〉 のこるなく

〈天〉 のこるなく

〈阿〉 残りなく

〈大〉 《該当本文なし》 〈尾〉 〈保〉 〈国〉

〈紅〉 《該当本文なし》

〈吉〉 《該当本文なし》

〈天〉 日 〈麦〉 〈阿〉

〈陽〉 ひ

〈大〉 ひとかさね 〈尾〉 〈国〉

〈紅〉 ひとかさね

〈吉〉 ひとかさね

〈天〉 ひとへかさね 〈保〉 〈陽〉 〈麦〉 〈阿〉

〈大〉 心くるしう 〈朱〉 △△△ 〈削〉

〈紅〉 心くるしうなむ女はおほしける

〈吉〉 心くるしう

〈天〉 心くるしうなむ女君はおほしける

〈陽〉 くるしくなん 〈麦〉

〈保〉 こゝろくるしくそなん

〈尾〉 こゝろくるしうなん

〈阿〉 心くるしくなん

〈国〉 こゝろくるしう

〈大〉 きみをなん

〈紅〉 君をなむ

〈吉〉 君をなん 〈国〉

〈天〉 宮をなむ

〈麦〉 〈阿〉 宮なむ

〈陽〉 君をなん

〈保〉 きみをなん

〈尾〉 みやをなん

〈大〉 けちかう

〈紅〉 けたかう 〈国〉

〈吉〉 けたかう

〈天〉 けちかう

〈陽〉 けちかく

〈保〉 けたかう^ち

〈尾〉 けたかく 〈麦〉 〈阿〉

〈大〉 みてこそ^{るこそぞ}を^朱

〈紅〉みるこそ (国) (尾) (阿)

〈吉〉みるこそ

〈天〉みるこそ

〈陽〉し、うを

〈保〉みしこそを

〈麦〉みこそ

三種の校異箇所と諸写本を比較すると、全体としては、河内本系統や麦生本・阿里莫本などと近似する表記が見える。紅梅本は大島本・吉川本に近似し、大島本との校異表記は国冬本と一致する箇所が多い。吉川本は紅梅本・大島本に近似し、この二種との校異表記は国冬本・陽明文庫本・麦生本・阿里莫本と一致する箇所がある。吉川本に関する独自異文については、誤字脱字と思える箇所も多いが、それ以外に複数の本文を参考にした可能性も否定できない。天理本は紅梅本・吉川本との校異表記は麦生本・阿里莫本と一致する箇所が多い。いずれにしても、諸写本を校合した可能性が考えられるといえよう。

五 おわりに

以上、伝周桂本の本文を中心として考察し、紅梅本・天理本・吉川本の胡蝶巻本文を比較検証した。

天理本は紅梅本に比べて漢字表記が圧倒的に多く、字母レベルにおいてあまり相関性がない。それに対して、吉川本は紅梅本と仮名表記や字母レベルでも共通表記が多く、大島本と同じくらいのレベルで紅梅本と

の近似性が確認できる。つまり、紅梅本と天理本よりも、紅梅本と吉川本のほうがより近い本文ということになる。

さらに三種の校異箇所は、河内本系統や麦生本・阿里莫本などと近似する表記が全体として散見される。紅梅本の校異表記は国冬本と一致し、吉川本の校異表記は国冬本・陽明文庫本・麦生本・阿里莫本と一致し、天理本の校異表記は麦生本・阿里莫本と一致する箇所が多く、現存する他の諸写本を参考にした可能性も否定できない。

また、三条西家本の〈文明本〉↓〈永正本〉↓〈大永本〉↓〈享禄本〉流れの中で考えると、

〈文明本〉↓転写本とされる紅梅本

〈永正本〉↓影響を受けたと思われる吉川(陶家)本

〈大永本〉↓実隆と周桂の間で影響を与え合ったとされる天理本

〈享禄本〉↓天理本を参考にしたと思われる本文Ⅱ日大本

という伝周桂本群と三条西家本の相関性が見えてくる。

こう考えると、三種の本文(紅梅本・天理本・吉川本)は三条西家本系統の本文から派生したものであり、その中をさらに細かく見ていくと、紅梅本と吉川本がより近く、吉川本と天理本がより近く、紅梅本と天理本が少し遠い本文であることが、胡蝶巻の本文の比較検討からも実証された。

今後はさらに、〈大永本〉を転写した可能性が高いと指摘されている天理本の「橋姫」「椎本」「絵合」「松風」「花散里」と紅梅本との関わり、吉川本の伝周桂筆とされる「総角」「東屋」と紅梅本との関わり、そして、天理本と日大本との関わりについても比較検討を試みたい。

注

- (1) 『日本古典文学大辞典』(岩波書店、一九八四年)、『日本国語大辞典(第二版)』(小学館 Japan Knowledge、二〇〇〇～二〇〇二年)、『日本人名大辞典』(講談社 Japan Knowledge、二〇〇一年)。廣木一人「連歌師の一面―荳公事と宗碩・宗坡・周桂・宗仲など―」(『文学』第一二巻第四号、二〇一一年七月)などを参照した。
- (2) 三種の本文は以下のものを参照し、自ら翻刻した。
紅梅本…紅梅文庫旧蔵『源氏物語』(個人蔵、画像)。
天理本…天理大学附属天理図書館蔵『源氏物語』伝周桂筆・胡蝶卷(請求記号…九一三・三六／イ八三、紙焼き)。
吉川本…吉川史料館蔵大内家伝来『源氏物語』胡蝶卷(画像)。
- (3) 上野英子「源氏物語三条西家本の世界―室町時代享受史の一樣相」(武蔵野書院、二〇一九年)。
- (4) 注(3)に同じ。
- (5) 『実隆公記』巻五上、巻六下、巻七、巻八(続群書類従完成会太洋社、一九五七～一九六三年)、以下引用はすべて同じ。
- (6) 上野英子「紹巴本源氏物語の本文史―野村精一先生と潮廼舎文庫の共同研究を発端として―」(『實踐國文學』九四号、二〇一八年十月)。
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 『天理図書館叢書第二十五輯 天理図書館稀書目録 和漢書之部 第三』(天理大学出版部、一九六〇年、三五七頁)。
- (9) 加藤昌嘉「周桂本『源氏物語』」人間文化研究機構国文学研究資料館編『立川移転記念特別展示図録 源氏物語 千年のかがやき』(思文閣出版、二〇〇八年十月、一三三頁)。
- (10) 吉川本については、すでに拙著『源氏物語の伝来と享受の研究』(武蔵野書院、二〇一六年)において言及している。
- (11) 近藤清石著・三坂圭治校訂『大内氏実録』列伝第四親族(マツノ書店復刻版、一九七四年、二三五頁)。
- (12) 『歴名土代』(『群書類従』第二十九、『山口県史』史料編中世1、一九九六年、六一六頁)。
- (13) 『防長風土注進案』第一三巻、山口宰判下「第廿六 上宇野令之七」(マツノ書店、一九八三年、一六七頁)。
- (14) 天理大学附属天理図書館蔵『源氏物語』(請求記号…九一三・三六／イ一四七／一)。
- (15) 吉川本の筆者目録は吉川史料館蔵に拠る。この「逍遙院殿御奥書源氏之御本筆者目録」はすでに、渡部榮「源氏物語従一位麗子之研究」(大道社、一九三六年、七～十頁)、遠藤和夫「大内家伝来『源氏物語』書写者の人々」(『源氏物語本文の再検討と新提言』第三号、二〇一〇年三月、一〇八～一〇九頁)において全文翻刻されている。
- (16) 木藤才蔵『連歌史論考』下(明治書院、一九七三年)。
- (17) 周桂本を筆跡の観点からも確認したが、伝周桂筆とされる古筆類、「五四 伊予千句 周桂」(『芸林拾葉』鶴見大学図書館新築記念貴重書図録、一九八六年)、「一六一 短冊 周桂」「一六二 書状 周桂」(『日本書蹟大鑑第八巻』講談社、一九八〇年)、「一五二 書状 周桂」(『古筆手鑑大成第一六巻 手鑑・古筆手鑑』金沢市立中村記念美術館蔵、角川書店、一九九五年)などと比較してみたが、吉川本胡蝶巻、天理本胡蝶巻の筆跡と同筆とは思われない。
- (18) 翻刻・校異における凡例は以下の通りである。

・送り仮名の「い・ひ・ぬ」「む・ん」「う・く」「ほ・お」「う・ふ」「へ・え」「お・を」「ひ・う」の区別はしない。

(例)「思い」「思ひ」「させん」「させむ」「めつらしう」「めつらしく」「ほえむ」「ほえむ」「思う・思ふ」「かえ」「かへ」「おおふ」「を」
おふ、「思ひ」「思う」など。

・朱墨の区別はしない。

・「玉」は「給」に統一。

・旧字体・異体字は、現行の漢字に改めた。

(例)「長恨哥」「萬」「泪」↓「長恨歌」「万」「涙」など。

・踊り字の記号は、仮名一字の繰り返し「ゝ」、漢字一字の繰り返し「々」、複数文字の繰り返し「く」の三種とした。「人」が漢字であっても、それに続く踊り字が二文字分の場合は、「々」ではなく、「く」とした。

(例)「ことゝ」「人々」「ひとく」。

(例)「事ゝ」↓「事」と読む。「事々」↓「ことごと」と読む。

(例)「人く」。

・語頭に踊り字がある場合は、そのすべてに対してカッコを付して読みを聞いた。(例)「ゝはには(きはには)」。

・漢字表記の漢字と仮名表記の字母とが一致する場合は原則漢字とした。(例)「見くるし」「氣しき」など。

・「无(む・も・ん)」↓基本的には「む」と表記したが、文脈上「も」と読むときは↓「も(判読)」とした。

・傍記の「イ」(異本)などの部分は本文表記では対象としない。

・ミセケチのある部分は訂正後の本文表記で対校した。

・補入の部分は補入後の本文表記で対校した。

(19) 大島本：『大島本 源氏物語』第一卷(角川書店、一九九六年)。

(20) 諸写本の出典は以下の通りである。

・尾州家本：『尾州家河内本 源氏物語』第一卷(八木書店、

二〇一〇年)。

・保坂本：『保坂本 源氏物語』第一卷(おうふう、一九九五年)。

・陽明文庫本：『陽明叢書国書篇 源氏物語』第一卷(思文閣出版、

一九七九年)。

・国冬本／麦生本／阿里莫本：『源氏物語別本集成』第六卷(桜楓社、一九九三年)、『源氏物語別本集成続』第六卷(おうふう、二〇〇九年)。

三条西家本系統諸本の「篝火」巻の字母の分析

沼尻利通

【要旨】

本稿は、三条西家本系統諸本九本の、「篝火」巻の字母を考察したものである。日大本を軸として、諸本の字母を比較していくと、日大本と宸翰本が一例を除いてすべて字母が一致する。字母の一致という点では、書陵部本、紅梅本、熊大本が、例えば「す」の字母「寿」が三本とも巻末に使用されている。同一の箇所⁶の字母が一致することから、三本は関係のある写本と判断できる。ただし、紅梅本と熊大本がより近似しており、例えば「り」の字母「李」の使用箇所が一致する。字母をN-gram⁷分析にかけ、複数字の組み合わせを考察しても、紅梅本と熊大本は近似しており、関係のある写本と判断できる。

はじめに

「篝火」巻の諸本の字母を調査したことがある。写本を一〇本、古活字本を四本、整版本を六本の合計二〇本の、「篝火」巻での平仮名の字母を調査した⁽¹⁾。この結果を「篝火」巻の表記と字母」としてまとめた⁽²⁾。ただ、目についた写本を、闇雲に考察の対象としたために、いささか乱暴な考察になったと反省している。できたら、写本の同じ系統（最近は群とする考えもある）の字母を分析する必要性があると考えようになった。

系統を考えるさいに、三条西家本は理想的なサンプルである。三条西家本は、日大本が一つの基準たりうるからである。日大本は影印が公刊されていることから、確認が容易である。理想的な「ものさし」になる条件が揃っている。例えば、定家本を基準にしたい、となると大変である。定家本の系統は、そもそも「定家本」とは何かという議論がつきまとう。定家本は基準となる五十四帖のワンセットがなく、また公刊されていたとしても、古書として流通しないものも多く、確認に手間取る。大島本が即ち定家本だとするのは、あまりにも楽観的である。ただし、大島本が公刊されていることから、確認が容易であり、池田亀鑑による大島本を底本とした『源氏物語大成』もあることから、大島本を一つの「ものさし」とすることが有効であることは否定しない。ただし、大島本は定家本とは即断できないのである。また、大島本はその由来が不明である。こう考えると、三条西家本は、それが三条西家本であるという由来から、「ものさし」にしやすいことがわかる。

本稿では、三条西家本の系統とされる写本を用いて、その字母につい

て考察していきたい。

一、使用した三条西家本系統の諸本と先行研究

本稿で使用した三条西家本系統の本について説明していきたい。「日大本」と呼ぶものは、『日本大学蔵源氏物語』（第五巻 八木書店一九九五年）に収載されているものを用いた。この本の書誌等は、この解説に詳しい（五五九～五六〇頁）。「宸翰本」は、宮内庁書陵部蔵の桂宮本で、請求番号が五五四・八である。この本は、宮内府図書寮編『図書寮典籍解題文学篇』（国立書院 一九四八年 一四一～一四二頁）に詳細が載せられている。これによると「本書は延宝六七年頃の書写と推定され、最後の夢浮橋の巻は靈元天皇の宸写である」とあり、大津有一の「諸本解題」（池田亀鑑『源氏物語事典』下巻 東京堂 一九六〇年一三五頁）では「書陵部蔵靈元院宸翰源氏物語」とある。結論を先取りすると、この宸翰本は日大本を忠実に書写したものである。なお、本稿ではとりあげてはいないが、宮内庁書陵部には、もうワンセットの宸翰本の三条西家本系統の本が蔵されている。請求番号が五五四・九のもので、大津有一「諸本解題」では「書陵部蔵後陽成院宸翰源氏物語」とされているものである。ただし、この後陽成院宸翰本は、「葵」巻、「篝火」巻、「紅梅」巻の三巻を欠いている。本稿では「篝火」巻を調査するため、残念ながらこの本は考察の対象とはしていない⁽³⁾。「京大本」は、京都大学中院文庫本のもので、インターネットから入手可能である。なお、「篝火」巻の奥書に、日大本、宸翰本と同じく「享禄三八廿八書了九月十四校了／五枚」の書き入れがある。「書陵部本」と呼ぶものは、宮内

序書陵部の三条西家本である。先に見た、靈元院宸翰本や後陽成院宸翰本とは違う本。新典社から複製本が出ていると言えはわかりやすい。この本は、山岸徳平校注の日本古典文学大系（岩波書店）の底本に採用されたことでも知られる。発見当時はこれこそ青表紙証本とされたが、研究がすすむにつれて諸家の本と取り集めた寄合書きの本と見られるようになっていた⁽⁴⁾。ただし、「篝火」巻だけは、三条西実隆の筆である⁽⁵⁾。「蓬左文庫本」は、蓬左文庫におさめられている本で、伝貞敦親王等寄合書である。「吉川本」は、現在、吉川史料館におさめられている⁽⁶⁾。「篝火」巻には極札が付され、そこに「逍遙院殿御息／西室殿公順」とある。筆者目録でも「篝火」巻は「逍遙院殿御息西室殿公順／天文ノ比前二記」とある。「紅梅本」は、個人蔵、「熊大本」は、熊本大学教育学部旧蔵、両本とも三条西家の「文明本」に近いのではないかと期待されている⁽⁷⁾。「早大本」は、早稲田大学所蔵で、インターネットから入手可能である。新美哲彦によると、嫁入本のように、表紙裏反故などから明暦二年以降元禄年間あたりの製作と考えられている⁽⁸⁾。以上の九本を使用した⁽⁹⁾。なお、これまで明らかになっている三条西家本系統の研究史を、上野英子『源氏物語三条西家本の世界』（武蔵野書院 二〇一九年）を参照しつつ、簡単にまとめておきたい。三条西家本系統の本と一口で言っても、そこには大まかに二種類あると考えてよい。一つは、三条西家本の家本。いま一つは、三条西家プロデュースの写本、という違いである。前者の三条西家本の「家本」を説明したい。三条西家の家本は、成立順で「文明本」「永正本」「大永本」「享禄本」があった。最後の享禄本が日大本である。これらは五十四帖ワンセットであり、しばしば売却された。これら家本とは別に、実隆は頻繁に源氏物語の写本の作成にかかわ

り、実隆の監修のもとで寄合書きの本などが作成された。この場合、実隆自身が書写に関わった巻は、自身の家本を底本としたはずであるが、実隆が書写していない巻は、書写者などの家にある本などを底本としたようで、必ずしも三条西家の家本と同じ系統の本を底本としたとは限らない。これらの三条西家本は、三条西家プロデュースの本であり、実隆などが書写に関与したことが明らかな場合は実隆協力本と言える。なお、書陵部本は寄合書きの本であり、三条西家本の家本としては扱えない。実隆協力本とも呼ぶべきである。ただし「篝火」巻は実隆自筆であることは疑いがない。書陵部本の「篝火」巻に限れば、これは三条西家の「家本」を底本としたもので、おそらくその家本は文明本で間違いない。なお、文明本は売却され、この文明本の系統と考えられるものが、紅梅本である。ただし、紅梅本は文明本そのものではない。文明本を転写した「竹園上臈局本」を写したとみられるものが紅梅本になる。蓬左文庫本は享禄本の作成のために集められた諸本をもとに作成されたもの。したがって、日大本に近似するとされる。吉川本は書陵部本と同じく寄合書きであり、取混ぜ本の可能性がある。これは実隆協力本と呼ぶべきものになる。ただ、もし実隆が書写に関与していたとしたら、「永正本」を底本としたと考えられている。

二、三条西家本諸本の本文異同

―日大本の異文注記を軸にして―

これらの三条西家諸本をもとに、具体的に「篝火」巻の本文を比較して検討していきたい⁽¹⁰⁾。「篝火」巻では傍記が一四箇所ある。A「と

も・かくも」(一八九頁)、B「あまりふかき」(一八九頁)、C「こそおや」(一九〇頁)、D「ましかははちかましき」(一九〇頁)、E「ひめ君おほし、る」(一九〇頁)、F「すこしくもかくる、」(一九一頁)、G「そひふし給へるか、る」(一九二頁)、H「おほせは・御まへの」(一九二頁)、I「けしき・ひろこり」(一九二頁)、J「したもえなりやと」(一九四頁)、K「いとかけす、しき」(一九五頁)、L「源中将ははんしきてう」(一九六頁)、M「頭中将は心つかひして」(一九六頁)、N「しのはぬ・もこそと」(一九七頁)、である。この傍記には大まかに二種類がある。「イ」と他本と校合した痕跡がわかるものと、「イ」を記さずミスを後から補填したようなもの、以上の二種類である。「イ」の付されたものはA、B、C、D、E、F、G、I、J、L、M。「イ」の付されていないものはH、K、Nになる。日大本はその作成で、様々な本を校合していたようで、そうした校合の結果が傍記として示されていることになる。

日大本の異文注記を、異文注記のまま、そっくり引き継いでいる本が、宸翰本である。すなわち、日大本のA「とも・かくも」の異文注記が、宸翰本においても「とも・かくも」(一丁表)と受け継がれている。異文注記をそのまま引き継いでいる。宸翰本では、A～N一四箇所がすべて受け継がれている。京大本はA～M一三箇所は受け継いでいるが、Nの一箇所、日大本「しのはぬ・もこそと」の異文注記が、京大本では本行本文化して「しのはぬこともこそ」(五丁表)となっている。いずれにせよ、宸翰本と京大本は日大本を親本とする本であることは明らかである。

日大本の見せ消ちは三例ある。このうち、見せ消ちを施してから異文注記する例はGの一例ある。ほか二例は、冒頭の「このころゆ世の人の」

(一八九頁)の「の」であり、これは宸翰本と京大本も受け継いでいる(ともに一丁表)。「ひや、かにせあてはかなる」(一九三頁)の「て」で、この見せ消ちを宸翰本は受け継いでおらず(三丁表)、京大本は受け継いでいる。

日大本、宸翰本、京大本の三本の本文を比較すると、ほぼ一致する。しかし、一箇所、京大本は、日大本の本行本文を、傍記にしているところがある。書写のミスを傍記で補ったものである。日大本で「秋になりにけり」(一九五頁)のところ、宸翰本は同じである(四丁表)が、京大本は「秋になり・けり」(四丁表)と「に」を傍記する。

宸翰本、京大本について、簡単に振りかえっておきたい。両本の関係は、日大本を親としていることは疑いがない。両本の関係性はいわば兄弟の関係にあたる。おそらく京大本が兄で宸翰本が弟である。京大本は、川島絹江によって「中院文庫本」として簡潔な報告がなされている。それによると「三条西家旧蔵証本(日本大学総合学術センター蔵)」と極めて近く、用字の多少の違いの他は、一面十行、字配り、合点、朱点、ミセケチまで一致」として、伝来は「三条西家旧蔵日大証本と同じ奥書がある他、江戸時代前期の年号も奥書にみられ、三条西家から借り出した証本を書写したものと推定できよう。書写者は通茂か」とされている(II)。

この「三条西家旧蔵日大証本と同じ奥書」とは、日大本「夢浮橋」巻末にある享祿四年の奥書であり、「江戸時代前期の年号も奥書にみられ」は、京大本「夢浮橋」巻末の「慶安第二仲夏末」の奥書である。宸翰本の詳細は、先に示した宮内府図書寮編『図書寮典籍解題文学篇』によると延宝六七年頃の書写とされる。宸翰本は、日大本が「夕霧」巻を欠くことから、その影印が出版されるにさいして、日大本の欠を補うため

に用いられた。その解説では、「靈元院本は他の巻で調べてみると行詰、漢字仮名はむろんのこと字母字形、ミセケチ、補入等にいたるまで全く原本の姿をそのまま再現している⁽¹²⁾」とされている。これらをまとめると、京大本は慶安二年（一六四九年）頃の成立で、宸翰本は延宝六年（七年（一六七八）一六七九年）頃の成立であるから、京大本の方が二〇年以上前に成立していたことになる。そして、宸翰本は原本の日本をそのまま丁寧に臨模していることになる。

書陵部本は寄合書きであるが、「篝火」巻は三条西実隆の手になる本である。三条西家の家本では文明本を底本としたと考えられている。また紅梅本はその文明本を写した本を転写したものを底本としたようである。ここでは日大本と書陵部本・紅梅本・熊大本の比較検討をしたい。書陵部本の異文注記は二箇所あるが、どれも日大本と関連するものである。書陵部本での「したもえなりやと」（六頁）は、日大本の異文注記の「したもえなりやと」と一致している。また、書陵部本「いとす、しき」（七頁）は、日大本ではK「いとかけす、しき」（一九五頁）となっている。日大本の傍記「本无」は「かけ」の箇所は校合した本には無い、という意味と考えられる。注目すべきは、紅梅本と熊大本である。紅梅本と熊大本は前者の日大本「したもえなりやと」のところは「したもえなりやと」（ともに三丁裏）とあり、異文注記はない。後者の日大本「いとす、しき」も紅梅本・熊大本は「いとす、しき」（ともに四丁表）であり「かけ」を本行本文文化することも、また異文注記にすることもない。紅梅本・熊大本には、日大本と書陵部本の異文注意記の影響は見られない。

日大本では異文注記となっているものが、書陵部本では本行本文と

なっている例が一例ある。日大本B「あまりふかき」が、書陵部本と紅梅本・熊大本ともに「あまりにふかき」（書陵部本、一頁・紅梅本、熊大本ともに一丁表）と本行本文になっている。また、日大本では異文注記となっているものが、書陵部本では見せ消ちになる例も一例ある。日大本C「こそおや」は、書陵部本では「こそおや」（二頁）で、紅梅本・熊大本は「こそおや」（ともに一丁裏）となっている。日大本と書陵部本は、その異文注記箇所のポイントが一致することから、関連のある本と考えるほかない。しかし、一方で、紅梅本と熊大本は日大本とはいささか距離を持つと考えられる。

吉川本、蓬左文庫本、早大本の三本と日大本の異文注記箇所の比較を考察したい。日大本の傍記の本文が、そのまま本行本文になっていることが、これら三本には多い。すなわち、これら三本は、日大本を作成するにさいして参考となった他本（もしくは、その他本の系統の本）である可能性が高いということになる。具体的には日大本A「ともかくも」が、吉川本、蓬左文庫本、早大本ともに「ともあれかくも」（三本とも一丁表）と本行本文になっているという例である。こうして日大本では異文注記となるところが本行本文になっている例は、吉川本は九例、蓬左文庫本、早大本ともに一〇例が確認できる⁽¹³⁾。

日大本の異文注記箇所を検討していくと、日大本の直接の関係にある本は、宸翰本と京大本と言える。そして日大本の異文注記箇所が、書陵部本ともいくつか一致することから、関係がありそうであるが、ただ書陵部本の底本とした文明本から派生したと考えられる紅梅本・熊大本は、日大本とは直接の関係にはなさそうである。

三、三条西家本諸本の字母から見た関係性

三条西家本の字母の用いられ方を、数字で考察していきたい。調査した三条西家本諸本の字母データは、本稿の末尾に一覧表で載せている。字母の用いられる数をまとめると、次のようになる。

日大本・九九 宸翰本・九九 京大本・八〇

書陵部本・九九 紅梅本・一〇〇 熊大本・九五

蓬左文庫本・九八 吉川本・九一 早大本・九〇

使われている字母の数の多い順からみると、紅梅本▽日大本≡宸翰本≡書陵部本▽蓬左文庫本▽熊大本▽吉川本▽早大本▽京大本となる。しばしば、使われている字母の数が多いほど古いなどと言われるが、それはあくまで傾向であり、絶対的な基準ではない。

また、各本の漢字含有率を調査すると、次のようになった¹⁴⁾。

日大本…合計一四六三、ひらがな二三四九、漢字一一三(七・七%)

宸翰本…合計一四六三、ひらがな二三四九、漢字一一三(七・七%)

京大本…合計一四六四、ひらがな二三五〇、漢字一一三(七・七%)

書陵部本…合計一四七三、ひらがな二三五一、漢字一二二(八・二%)

紅梅本…合計一四六三、ひらがな二三三八、漢字一二四(八・五%)

熊大本…合計一四五六、ひらがな二三二六、漢字一三〇(八・九%)

蓬左本…合計一四六四、ひらがな二三四六、漢字一一八(八・一%)

吉川本…合計一四九八、ひらがな一四〇五、漢字九三(六・二%)

早大本…合計一四九七、ひらがな二三九六、漢字一〇一(六・八%)

日大本・宸翰本・京大本はほぼ漢字含有率は近似し、書陵部本・紅梅本・熊大本もおおよそ近似するが、熊大本が漢字をいささか多く使う傾向にある。

吉川本と早大本はあまり漢字を使わない傾向が見えた。

三条西家本諸本の字母には注目すべきポイントがいくつかある。まずは、日大本と宸翰本の字母の一致である。諸本の冒頭部分のみを見比べてみたい。なお、字母を横にそろえて比較するために、異同箇所や漢字等で文字がずれるところには「・」を付してある。

【翻刻】 このころの世の人のことくさにうちのおほいと、いま

【日大】 古乃己路能世乃人乃己止久左仁字知乃大・以止能、以末

【宸翰】 古乃己路能世乃人乃己止久左仁字知乃大・以止能、以末

【京大】 己能己呂乃世乃人能己止久左爾字知能大・以止乃、以末

【書陵】 古乃己呂・世能人乃古止久佐爾字知能大・以止能、以万

【紅梅】 己乃己呂・世能人農己止久佐爾字地乃於本以止乃、以万

【熊大】 己乃己呂・世能人乃己止久佐爾字地乃於本以止乃、以万

【吉川】 己能古路・世乃人乃古登久佐爾内・能於保以止能、以満

【蓬左】 古乃己路・世乃人濃己止久左仁字知乃於本以止乃、以満

【早大】 古乃己呂・世乃人農己止久左仁字知能於保以止乃、以末

日大本と宸翰本は字母がすべて一致している。京大本は日大本を写してはいるが字母レベルまでは一致していない。日大本と宸翰本を見比べると、一丁の字配り・改行箇所などが一致し、それは字母レベルにおいてもなされている。あたかも宸翰本は日大本をコピーしたかの如くである。ただし、宸翰本には一箇所のみ字母を変えている。日大本「あたり」と「(一九三頁)の字母は「阿多利奈止」であるが、宸翰本は「阿多里奈止」(三丁表)と「里」になっている。京大本は「安多利奈止」(三丁表)で「り」は日大本と同じ「利」である。この一箇所は、ケアレスミスと考えるほかない。このミス以外は、宸翰本の字母は日大本の字母

とすべて一致する。宸翰本は字母レベルにおいても日大本の忠実な臨模本と評価できる。それに対して京大本はそこまでの配慮はしておらず、書写者の書きやすい字母に変更することが多い。京大本は親本の字母にまでは配慮した書写ではない。

また、冒頭部分の比較で注目すべきは、紅梅本と熊大本の「ち」の「地」である。「うちのおほいと」の「ち」を、紅梅本と熊大本は「地」にしているところが特徴である。ここは、日大本、宸翰本、京大本、書陵部本、蓬左文庫本、早大本がすべて「知」を用い、吉川本は「内」と漢字にする。「ち」の字母は「知」と「地」があるが、日大本・宸翰本は「知」を多く使い、「地」は一例のみ。京大本は「知」だけを使う。書陵部本は「地」が二例、「知」が一例で、「地」を多く使う。紅梅本は「知」が三例、「地」は一〇例で、熊大本は「地」一四例、「知」九例である。こうして見ると、書陵部本は「地」を多く使い、その影響を受けてか紅梅本、熊大本ともに「地」をそれなりに使う傾向がでてきている。

「す」の字母には、「春」「須」「寸」「寿」がある。このうち「寿」を用いる三条西家本は書陵部本、紅梅本、熊大本の三本しかない。「寿」を用いる頻度は、書陵部本は一例、紅梅本は三例、熊大本は二例である。この三本とも同じ箇所「寿」を用いるところがある。「篝火」巻の末尾「かきわたさす」の「す」である。書陵部本「加幾和多佐寿」(九頁)、紅梅本「加幾和多佐寿」(五丁裏)、熊大本「加幾和多佐寿」(五丁裏)と、三本そろって「寿」にする。日大本は「閑幾和多左須」(一九八頁)である。この「寿」の三本そろい踏みは、単なる偶然ではなく、この三本が何らかの関係にあることを類推させる。書陵部本の底本となった文明本も「寿」であり、それが受け継がれていった痕跡とも考えられる。

書陵部本、紅梅本、熊大本には、使用頻度の少ない字母の一致が一例ある。「ゑ」の「衛」である。和歌の「ゆくゑなき」の「ゑ」で、書陵部本、紅梅本ともに「由久衛」(六頁・三丁裏)で、熊大本は「行衛」(三丁裏)である。他本では蓬左文庫本が書陵部本と同じく「由久衛」(三丁裏)で、早大本は熊大本と同じく「行衛」(四丁表)とする。もともと、「ゑ」はそもそも使用頻度は低く、「篝火」巻では三例しか出ていないのであり、これらは偶然の一致と見ることもできる。ただ日大本ではここは「遊久恵」(二九四頁)で「ゑ」は「恵」の字母を用いることが他本では多い。このこの字母の用いられ方の一致は偶然ではないとも考えられる。

紅梅本と熊大本が一致して、書陵部本とは異なるという例もある。先に検討した字母「寿」で、紅梅本と熊大本が「寿」で、書陵部本が「寸」にする箇所がある。「おほす」のところが書陵部本「於保寸耳」(六頁)で、紅梅本、熊大本ともに「於本寿仁」(ともに三丁裏)と一致する。ほか、使用頻度の少ない字母で「り」の「李」でもその傾向がある。「さり」と「のり」のところ、書陵部本「佐利止天」(二頁)で「利」である。紅梅本と熊大本は「佐李止天」(ともに二丁表)で「李」である。字母の「李」は書陵部本では用いられていない。紅梅本と熊大本は「李」を一例用いている。こうして見てみると、書陵部本と紅梅本、熊大本は使用頻度の少ない字母を同一箇所を用いる傾向があり、特に紅梅本と熊大本の近似性は注目できる。

字母のみを見比べていくと、日大本と宸翰本は字母レベルでも一例の例外はあるが、ほかはすべて同一と言ってよく、どうやら日大本・宸翰本・京大本はひとまとまりにグループピングできそうである。また書陵部本、紅梅本、熊大本もひとまとまりにグループピングできそうだが、紅梅

本と熊大本はより近似していることから、かなり関係の深い写本だと判断できそうである⁽¹⁵⁾。

四、三条西家本諸本の字母のN-gram分析

三条西家本諸本の字母データを、N-gram分析にかけてみた。N-gram分析は、テキストをn字の文字で分割・検索をするテキスト分析の手法である。

【参考】にその分析方法を示した。例えば、「みとりときみとり」という文を、n＝二字の文字で分析をかけると、「みと」「とり」「りと」「とき」「きみ」「みと」「とり」の二文字に分割して、一文字ぶんをずらして検索される。その結果として、この文には、「みと」と「とり」が二例あることがわかる。この文をn＝三字の文字で分析すると「みとり」「とりと」「りとき」「ときみ」「きみと」「みとり」の三文字に分割して、一文字ぶんをずらして検索される。これによりこの文に、「みとり」が

【参考】 N-gram のテキスト分析

(文) みとりときみとり

n
||
二字の場合

みと

とり

とり

とき

きみ

みと

とり

(文) みとりときみとり

n
||
三字の場合

みとり

とりと

とりと

ときき

きみと

きみと

みとり

二例あることがわかる。文中よりn字の同一の文字列を検出するのである。N-gram分析は、もとは言語モデルの分野で開発されたもので、文章や話し言葉の、特定の単語列が

出現する確率分析などをおこなうために考案された。この手法を古典文学のテキストに応用することは、近藤みゆきなどによりおこなわれている⁽¹⁶⁾。また、近年注目できるのは、齊藤鉄也による研究である。この研究では源氏物語の写本の系統分類をおこなうために、N-gram分析が活用されている⁽¹⁷⁾。齊藤鉄也によるN-gram分析は、諸本のN-gramによるテキスト分析をおこない、その結果の差異を数値化し、諸本分類に生かしたものである。本稿では、数値化よりも特定の字母の組み合わせを明らかにしていきたい。

なお、本稿でのN-gram分析の方法は、本行本文のみを対象として、異文注記は無視した。改行、和歌の空白なども考察の対象外として、「篝火」巻の全体の文を一行にして、それにN-gram分析をかけた。そのさいには、漢字、踊り字は原文のままとした。なお、分析をかけたものは、n＝二字、三字である。

仮名による三条西家本諸本の文のn＝二字の検索結果は次のようになる。用例は一〇例以上のものをあげている。

日大本…たま・一五例、いと・一四例、しき・一四例、した・一二例、
 とも・一一例、なる・一〇例。
 宸翰本…たま・一五例、いと・一四例、しき・一四例、した・一二例、
 とも・一一例、なる・一〇例。
 京大本…たま・一五例、いと・一四例、しき・一四例、した・一二例、
 とも・一二例、なる・一〇例。
 書陵本…いと・一四例、しき・一四例、した・一三例、たま・一三例、
 とも・一一例、なる・一〇例。
 紅梅本…いと・一四例、しき・一四例、とも・一一例、こと・一〇例、

なる・一〇例。

熊大本…いと・一四例、しき・一四例、とも・一一例、こと・一〇例、なる・一〇例。

蓬左本…いと・一四例、しき・一四例、こと・一三例、きこ・一二例、とも・一二例、なる・一一例。

吉川本…たま・二〇例、いと・一四例、しき・一四例、きこ・一二例、とも・一一例、した・一一例、まふ・一一例、こと・一〇例、なる・一〇例。

早大本…たま・一九例、こと・一四例、いと・一四例、こ・一四例、しき・一四例、きこ・一三例、とも・一二例、した・一二例、ろ・一一例、なる・一一例、まふ・一〇例。

仮名による三条西家諸本の文のn||三字の検索結果は次のようになる。用例は五例以上のものをあげている。

日大本…たまふ・七例、きこえ・七例、いて、・五例、たまへ・五例。

宸翰本…たまふ・七例、きこえ・七例、いて、・五例、たまへ・五例。

京大本…たまふ・七例、きこえ・七例、いて、・五例、たまへ・五例。

書陵本…きこえ・七例、たまふ・六例、いて、・五例、したま・五例、たまへ・五例。

紅梅本…きこえ・七例、いて、・五例。

熊大本…きこえ・七例、いて、・五例。

蓬左本…きこえ・七例、こ、ろ・六例、いて、・五例、たまふ・五例。

吉川本…たまふ・一一例、きこえ・七例、いて、・五例、りたま・五例、たまへ・五例。

早大本…こ、ろ・一一例、たまふ・一〇例、きこえ・七例、たまへ・七例、

いて、・五例、しきこ・五例、す、し・五例。

この結果を見ると、日大本・宸翰本・京大本、書陵部本・紅梅本・熊大本という二つのグループピングができそうである。「たま」が一五例のものが日大本・宸翰本・京大本で、「いと」が一四例のものが書陵部本・紅梅本・熊大本である。ただ、書陵部本・紅梅本・熊大本は、n||二字の場合は三本とも近接するように見えるが、書陵部本が「した」一三例であるが、その結果を紅梅本・熊大本ともに受け継がない。n||三字の場合、紅梅本と熊大本が近く、書陵部本とは一致しない。書陵部本と紅梅本・熊大本は、若干の違いを見せている。蓬左文庫本は「いと」「しき」ともに一四例という点では書陵部本のグループと近いが、ただ「こと」一三例というところが、書陵部本のグループとは距離がある。書陵部本吉川本も日大本のグループと近そうだがあ、ただ「きこ」の一二例が多く、これが日大本とは異なっている。早大本も「こ、」が一四例など、他とは異なる。

仮名ではなく、字母によるn||二字の検索結果は次のようになる。用例は一〇例以上のものをあげた。

日大本…以止・一四例、之幾・一三例、止毛・一一例。

宸翰本…以止・一四例、之幾・一三例、止毛・一一例。

京大本…以止・一四例、之幾・一四例、止毛・一二例、多末・一一例、

奈留・一〇例。

書陵本…以止・一三例、止毛・一一例、之幾・一一例、太末・一〇例。

紅梅本…以止・一四例、之幾・一四例、己止・一〇例、止毛・一〇例。

熊大本…以止・一四例、之幾・一四例、止毛・一一例、己止・一〇例。

蓬左本…以止・一四例、之幾・一二例、己止・一一例、奈留・一一例。

吉川本…多末・一四例、止毛・一一例。

早大本…多末・一六例、己・一四例、之幾・一四例、己止・一三例、

幾己・一三例、止毛・一二例、以止・一一例。

字母によるn||三字の検索結果は次のようになった。用例は五例以上のもの。

日大本…以天、・五例。

宸翰本…以天、・五例。

京大本…多末不・六例、以天、・五例、幾己衣・五例。

書陵本…太末不・六例、幾古衣・六例、以天、・五例。

紅梅本…幾己衣・六例。

熊大本…幾己衣・七例、以天、・五例。

蓬左本…幾古衣・六例、古、呂・五例。

吉川本…以天、・五例、多末部・五例。

早大本…己、呂・八例、多末不・七例、幾己衣・七例、以天、・五例、

之幾己・五例、多末部・五例、寸、之・五例。

字母の結果と仮名の結果を見比べると、興味深いものがある。日大本の「しき」は、仮名では一四例だが、字母「之幾」は一三例である。一例のずれがある。このほかの「しき」一例は、「之支」(一九三頁)であり、翻刻すると「す、しくをかしきほと」の箇所である。三文字の日大本の三文字の字母は「以天、」が五例であり、これは仮名の「いて、」と同等である。そのため、日大本での「いて、」はすべて「以天、」の字母で書かれていることになる。

字母の「以止」を考えていきたい。仮名では「いと」は一四例あり、諸本皆一致する。字母で見えていくと、日大本・宸翰本・京大本・紅梅本・

熊大本・蓬左文庫本が「以止」が一四例である。これらの本は「いと」の文字列は必ず「以止」の字母を用いる。書陵部本は一三例「以止」で、残り一例が「以登」。吉川本は「以登」が八例で「以止」は六例。早大本は「以止」が一一例で、「以登」が三例。

仮名の「たま」は漢字「給」などを当てる場合もあり、数は一定しない。ただ仮名の場合、日大本・宸翰本・京大本は一五例、書陵部本は一三例、紅梅本は九例、熊大本は五例、蓬左文庫本は七例、吉川本は二〇例、早大本は一九例。「たま」の字母では、日大本は「太末」九例、「太万」二例、「多末」二例、「堂末」二例で、宸翰本もこれに同じ。京大本は「多末」一一例、「堂末」二、「堂万」二例。書陵部本は「太末」一〇例、「多末」二例、「太万」一例。紅梅本は「多末」九例。熊大本は「多末」五例。蓬左文庫本は「太末」六例、「堂末」一例。吉川本は「多末」一四例、「太末」五例、「堂末」一例。早大本は「多末」一六例、「太末」二例、「多満」一例。この「たま」の字母の用いられ方は示唆的である。実隆筆の日大本と書陵部本が近接するからである。日大本では「たま」の字母は「太末」を多く用いる。この傾向と同じ本は、宸翰本を除くと、書陵部本と蓬左文庫本である。このうち、書陵部本は実隆筆であるため、やはり日大本と似た傾向にある。なお、注目すべき字母に「太万」がある。これは日大本・宸翰本と書陵部本に特徴的に用いられる字母の組み合わせである。書陵部本に一例のみ用いられる「太万」と、日大本を見比べると、まったく同じ箇所を用いられている。日大本「もてなした^まはす」(一九〇頁)の「たま」は「太万」で、これと同じ箇所の書陵部本は「太万」(二二頁)で、同じ字母の組み合わせである。ちょうどここは両本とも一丁裏の最終行の末尾にあたるところになる。ただ、実隆は日大本の作成にさいし

て、書陵部本を見ることもなく、また書陵部本の底本となった文明本も見ることにはなかったろうから、こうした一致は偶然と考えるべきかもしれないが、文明本の影響が、日大本に反映していると考ええることもできる。また、「たま」の字母に、紅梅本と熊大本が「多末」しか用いていないことも特徴である。紅梅本が九例、熊大本が五例と、四例のずれがあるが、これは熊大本が「給」と漢字をあてる例が多いため、紅梅本の九例の「多末」の箇所は、熊大本もすべて「多末」にしている。紅梅本と熊大本は近い関係の本と考えてよい。

「しき」の字母は、諸本すべて一四例。みなほとんど「之幾」の字母をあてている。仮名の「しき」一四例のうち、すべて「之幾」の字母を用いる本は、京大本、紅梅本、熊大本、早大本がある。日大本・宸翰本は「之幾」は一三例で、「之希」が一例。書陵部本は「之幾」は一一例で、「之起」が三例。蓬左文庫本は「之幾」一二例、「志幾」一例、「之氣」一例。吉川本は「之起」「之幾」がそれぞれ七例。蓬左文庫本はどちらかというと「之幾」を用いる傾向が高い。また、吉川本は諸本と隔たりがある。吉川本は字母の用いられ方の傾向は、諸本とは少し距離がありそうである。

n 三字の字母はヒット数が少ない。「篝火」巻は短い巻で、字数が少ないことから、三字の字母が一致する数も少なくなる。「いて、」の「以天、」は、日大本・宸翰本・京大本・書陵部本・熊大本・吉川本・早大本は五例である。この「以天、」は、紅梅本、蓬左文庫本ともに四例である。残りの一例は、紅梅本は「伊天、」、蓬左文庫本は「以帝、」である。ほかに対立がありそうなものは「きこえ」である。字母は用例数が少ないためにあげられなかったが、日大本・宸翰本は「幾古衣」が四例、「幾

己衣」が三例。京大本は「幾己衣」は五例、「幾古盈」が二例。書陵部本は「幾古衣」が六例、「幾己衣」が一例。紅梅本は「幾己衣」が六例、「幾古衣」が一例。蓬左文庫本は「幾古衣」は六例、「幾己衣」は一例。吉川本は「幾己衣」が四例、「幾古衣」が三例。熊大本と早大本は「幾己衣」で七例になる。「きこえ」の「え」は諸本「衣」が多いが、京大本は「盈」が二例ある。京大本は「え」に「盈」の字母を用いる例が六例で多く、日大本、宸翰本、蓬左文庫本ではおのおの一例のみ。ほかは「きこえ」の「こ」を「己」とするか「古」とするかの違いがある。「こ」の字母は、全体から見れば、日大本・宸翰本はどちらかといえば「己」を多用する傾向があるが、「きこえ」の「こ」については、日大本・宸翰本は「己」も「古」もそれなりにバランスをとっている。二字「きこ」では、日大本・宸翰本は「幾己」「幾古」ともにそれぞれ四例ずつ、計八例である。ところが、京大本は二字「きこ」は、「幾己」が六例、「幾古」は二例。京大本は「己」を多用している。京大本は日大本を底本としたはずだが、字母レベルまでは、実隆の筆を伝える書写ではない（臨模ではない）ことがわかる。これに対して、書陵部本は二字「きこ」は、「幾古」が七例、「幾己」が一例、「起古」が一例、合計九例あり、「古」を多用している。書陵部本は実隆がまだ若い時分での書写であったため、「きこえ」などでの「きこ」の「こ」は「古」を多いにするのが実隆の字母の用い方の傾向だったが、後年、年を重ねてその字母の用い方の傾向が変わり、日大本を書写する時点では「きこ」の「こ」はあ「己」と「古」をバランスよく用いるように変化したのではないかと考えられる。こう考えると、同一人物の書写であっても、年齢によって字母の用いられ方は微妙な変化が確認できる場合がありそうだ。

以上、Ngram 分析によって析出した、頻出する二字と三字の字母の組み合わせを、諸本の使用字母とあわせて考察した。日大本と書陵部本は、同じ実隆による筆であるが、同じ組み合わせの字母を使う傾向があるように見えるが、ただズレも見られ、あるいは同一人物の手であっても、年齢により組み合わせる字母は異なってくるものかもしれない。他本でのデータも多く蓄積して、より詳しい分析をする必要がある。

おわりに

三条西家本諸本の、写本の字母の特徴と、それをNgram 分析にかけて、複数字の組み合わせの特徴を考察することにより、それぞれの写本の特徴や関係性を考察してきた。

注目すべきは、日大本を親本とした宸翰本の存在である。宸翰本の字母は、一字だけ字母の相違が確認できたが、ほかはすべて日大本の字母と一致する。ほぼ完璧なコピーと言えるが、こうしたコピーの作成が、天皇を中心とした貴紳のグループによってなされたことの意味は重い。日大本は、江戸時代の禁裏において源氏物語の正典^{カン}であったことは疑いがない。江戸時代には出版文化が花開き、源氏物語は山本春正の絵入源氏や北村季吟の湖月抄として庶民も手に取ることができた。しかし、そうした地下の源氏物語の本文環境とは違ったものが、堂上にあり、そこには日大本を中心とした三条西家本の世界があったことになる。

紅梅本は、書陵部本が底本とした文明本の系統と考えられる。文明本は書陵部本の底本となり、その後文明本は売却された。その文明本を転写した竹園上臈局本があり、それを転写したものが紅梅本とされる。

字母という視点から見ると、「寿」や「李」の字母の用いられ方が、紅梅本と熊大本は近似している。この近似性は、Ngram 分析での、字母の複数字の組み合わせでも、明らかとなった。両本ともに、「たま」の字母で「多末」のみを用いている。ただし、熊大本の方が「給」の漢字をあてることが多く、数にずれはあるものの、紅梅本が「多末」とする箇所は、熊大本も「多末」としている。

本稿では、三条西家諸本の字母の特徴を考えてきたが、「篝火」巻という短い巻であったことから、まだまだデータは足りないと感じている。今後は、より長い巻での分析を試みていきたい。

注

(1) 写本は、保坂本、東山御文庫本、陽明文庫本、尾州家河内本、飯島本、大島本、高松宮本、大正大学本、国文研正徹本、東久邇旧蔵本。古活字本は、慶長初年刊本、伝嵯峨本、東洋文庫古活字本、九大古活字本。整版本は、無跋無刊記整版本、絵入源氏物語の三本（慶安本・万治本・小本）、首書源氏物語、湖月抄。

(2) 今西祐一郎編『日本古典籍における【表記情報学】の基盤構築に関する研究』（第四号 科学研究費補助金基盤研究（A）二〇一四年度研究成果報告書 二〇一五年三月）。

(3) この霊元院宸翰本・後陽成院宸翰本は加藤洋介『源氏物語大成』の三条西家本（『詞林』第四二号 二〇〇七年一〇月）においても言及がある。

(4) 岡野道夫「証本源氏物語の本文について―日本大学図書館蔵本と宮内

庁書陵部蔵本の性格——〔語文〕（日本大学）第二輯 一九六五年六月）。中城さと子「三条西家の家本『源氏物語』と書陵部本」（『京大文学会論叢』第一巻第一号 二〇一五年三月）。

(5) 「〇か、り火 逍遙院殿」（『源氏物語筆者之数』『宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語 源氏物語解題』新典社 一九六八年 一二四頁）。

(6) 岡野道夫「吉川本源氏物語帯木巻の本文について」（『研究紀要』（日本大学）第一六号 一九七四年三月）でも、「吉川本」と呼ばれる。

(7) 上野英子「新出資料、紅梅文庫本から見えてきたこと」（『源氏物語三条西家本の世界——室町時代享受史の一樣相——』武蔵野書院 二〇一九年）。

(8) 「近世前期の写本製作——伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故から——」、「伝三条西実枝筆『源氏物語』の表紙裏反故——翻刻と紹介・文学資料編——」（『源氏物語の受容と生成』武蔵野書院 二〇〇八年）。

(9) なお、略号については、日大本、宸翰本、京大本、書陵部本、紅梅本、熊大本、蓬左文庫本、吉川本、早大本と用いていくが、レイアウトの都合により、二字に約めて、日大、宸翰、京大、書陵、紅梅、熊大、吉川、蓬左、早大、などと用いることがある。またこれら二字に「本」を付けることもある。

(10) 各本の引用にさいしては、影印が出版されている日大本、書陵部本は頁数、影印が出版されていないものは丁数表裏を示した。

(11) 川島絹江「中院文庫本『源氏物語』について」（石埜敬子編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識』浮舟 国文学「解釈と鑑賞」別冊 至文堂 二〇〇二年十一月）。

(12) 『日本大学蔵源氏物語』第七巻 八木書店 一九九五年 四六三～

四六四頁。

(13) 吉川本は、A、B、D、G、H、I、J、M、N。蓬左文庫本は、A、C、D、E、G、H、I、J、M、N。早大本は、A、B、D、F、G、H、I、J、M、N。日大本で傍記になっているところが、それぞれ本行本文になっている。

(14) 漢字含有率の調査にあたっては、傍記などは除いた。また、「ゝ」「ゃ」の字点などの踊り字はカウントしなかった。

(15) 表を見比べて気付いたことを記しておきたい。「わ」の字母「和」「王」は、多くの写本は「王」を多く用いるが、「和」を多く用いるものは、蓬左文庫本と早大本である。「け」の字母「个」を多く用いるものは、日大本、宸翰本、紅梅本、蓬左文庫本である。「計」が多いのは京大本で「遣」が多いのは書陵部本、早大本、「氣」が多いのは吉川本である。ただ「个」が多い本は「遣」もそれなりに多く用いている。「つ」の字母は、「川」を用いるものが多いが、「徒」を多く用いて「川」とほぼ同数のものが吉川本である。「め」の字母で「免」を用いて「女」を用いない本は紅梅本である。他の本は「女」を多く用いるものが多い。「れ」の字母は、「連」を多く用いるものは、紅梅本、蓬左文庫本、早大本である。他本は「礼」を多く用いる。ただし、書陵部本は「連」と「礼」が同数である。

(16) 近藤みゆき「『惠慶百首』論——N-gram分析によって見た「返し」の特徴と成立時期の確定——」（N-gram統計による語形の抽出と複合語——平安時代語の分析から——）「N-gram分析による古典研究のこれまで」とこれから——付『古今和歌集男性特有表現一覧（改訂版）——』『王朝和歌研究の方法』笠間書院 二〇一五年。

字母	合計	熊本大本・字母						合計	吉川本・字母						合計	蓬左文庫本・字母						合計	早大本・字母						合計	仮名
		20	安16	阿3				19	安21						21	安14	阿5					19	安19						19	あ
		34	以34					34	以33						33	以31						31	以32						32	い
		20	字20					20	字21						21	字22						22	字24						24	う
		16	衣16					16	衣16						16	衣16	盈1					17	衣16						16	え
		19	於19					19	於24						24	於21						21	於24						24	お
加3		60	可50	加6	閑4			60	可33	加31					64	可62	加1					63	可46	加10	閑5				61	か
起2		48	幾36	支12				48	幾30	起22					52	幾36	起11	支2				49	幾45	起1					46	き
		28	久27					27	久27						27	久25	具1					26	久20	具6					26	く
希4	遣4	計3	24	个7	希7	気5	遣4	計1	24	気17	个7	遣2			26	个12	気8	計6	希1			27	遣9	計7	気7	个2			25	け
		42	己41	古1				42	己25	古21					46	己29	古21					50	己56	古3					59	こ
		20	左13	佐7				20	左15	佐6					21	左11	佐10					21	左17	佐5					22	さ
		84	之74	志10				84	之72	志13					85	之72	志13					85	之77	志8					85	し
須4	寿3		25	春22	寿2	寸1		25	春18	寸5	須2			25	春21	須3	寸1				25	寸14	春8	須3					25	す
		11	世11					11	世8	勢5					13	世9	勢2					11	勢7	世5					12	せ
		16	曾15					15	曾15						15	曾12	楚4					16	曾14	楚3					17	そ
太1		56	多48	堂4				52	多45	堂15	太7				67	多29	太16	堂9				54	多55	堂8	太2				65	た
		23	地14	知9				23	地16	知6					22	知22	地1					23	知23						23	ち
津1		30	川22	徒8				30	徒12	川11	津8				31	川17	徒7	津5				29	川22	徒5					27	つ
		50	天49	帝1				50	天51						51	天43	帝8					51	天46	帝3					49	て
		83	止80	登4				84	止62	登20					82	止85	登4					89	止78	登13					91	と
		52	奈51	那1				52	奈48	那5					53	奈44	那6					50	奈49	那3					52	な
丹4	耳4	61	爾40	仁13	丹6	耳2		61	爾31	仁13	丹9	耳6			59	爾33	仁23	耳3				59	耳27	爾16	仁16				59	に
		8	奴8					8	奴8						8	奴8						8	奴8						8	ぬ
		7	祢4	年3				7	祢6	年1					7	年4	祢3					7	祢5						5	ね
農2		58	乃54	能4				58	能33	乃26	農4				63	乃54	能1	濃1				56	乃37	能24	農1				62	の
波9		43	者21	八14	波8			43	者17	八15	波8	盤3			43	八22	者13	波5				40	者27	波14	八2	盤1			44	は
飛5	悲1	30	比24	日5	飛1			30	比29	日5					34	比24	飛4	日1				29	飛19	比12					31	ひ
婦2		32	不18	布11	婦3			32	不13	布13	婦12				38	不16	布14	婦1				31	不28	布5	婦1				34	ふ
		12	部11	遍1				12	部13						13	部10	遍2					12	部11	辺2					13	へ
		13	本9	保5				14	保14	本1					15	本10	保5					15	本9	保5					14	ほ
満5		36	末22	満6	万4			32	末37	満9	万2				48	末24	満8	万3				35	末43	満2					45	ま
		7	美4	三3				7	三6	美3					9	美5	三2	見1				8	三6						6	み
		3	武2	無1				3	武5	無5					10	武5	無2					7	武2						2	む
		11	女11					11	女9	免2					11	女9						9	免6	女4					10	め
		40	毛40					40	毛47						47	毛41						41	毛46						46	も
		19	也18	屋1				19	也13	屋5					18	也18						18	也14	屋4					18	や
		4	由3					3	由3						3	由3						3	由2						2	ゆ
		10	与10					10	与10						10	与10						10	与9						9	よ
		28	良26	羅1				27	良24	羅3					27	良23	羅4					27	良28						28	ら
李1		52	利49	里1	李1			51	利45	里7					52	利45	里3					48	利28	里22					50	り
類1	流1	26	流10	留9	累6	類1		26	留18	流7	累1				26	留24	類2					26	留22	類4					26	る
		22	連16	礼6				22	礼13	連8					21	連16	礼6					22	連17	礼6					23	れ
		12	呂12					12	路11	呂3					14	呂15	路2					17	呂17	路5					22	ろ
		6	王5	和1				6	王6						6	和5	王1					6	和4	王2					6	わ
		1	為1					1	為1						1	為3						3	井2						2	ゐ
		3	恵2	衛1				3	恵3						3	恵1	衛1					2	恵2	衛1					3	ゑ
		24	遠22	越2				24	遠16	越5					21	遠19	越3					22	遠14	越4					18	を
		9	无9					9	无3						3	无6						6	无10						10	ん

1338

1326

1405

1346

1396

三条西家本系統の字母表

仮名	日大本・字母					合計	宸翰本・字母					合計	京大本・字母					合計	書陵部本・字母					合計	紅梅本・	
あ	安 16	阿 4				20	安 16	阿 4				20	安 20				20	安 18	阿 2				20	安 17	阿 3	
い	以 34					34	以 34					34	以 34				34	以 33					33	以 33	伊 1	
う	宇 19					19	宇 19					19	宇 19				19	宇 20					20	宇 20		
え	衣 15	盈 1				16	衣 15	盈 1				16	衣 10	盈 6			16	衣 16					16	衣 16		
お	於 17					17	於 17					17	於 17				17	於 19					19	於 19		
か	可 49	加 10	閑 3			62	可 49	加 10	閑 3			62	可 52	加 10			62	可 41	加 18	閑 1			60	可 48	閑 9	
き	幾 41	起 5	支 4			50	幾 41	起 5	支 4			50	幾 50				50	幾 33	起 16				49	幾 43	支 3	
く	久 26	具 2	俱 1			29	久 26	具 2	俱 1			29	久 28	具 1			29	久 28	俱 1				29	久 28		
け	个 9	遣 7	計 5	希 2	気 2	25	个 9	遣 7	計 5	希 2	気 2	25	計 14	个 7	遣 3	気 1	25	遣 11	个 6	気 4	計 2	希 1	24	个 7	気 6	
こ	己 31	古 10				41	己 31	古 10				41	己 35	古 7			42	古 23	己 19				42	己 40	古 2	
さ	左 13	佐 6				19	左 13	佐 6				19	左 12	佐 7			19	佐 17	左 3				20	佐 12	左 8	
し	之 80	志 6				86	之 80	志 6				86	之 81	志 5			86	之 73	志 12				85	之 74	志 10	
す	春 17	須 6	寸 2			25	春 17	須 6	寸 2			25	春 18	須 5	寸 2		25	春 18	寸 3	須 3	寿 1		25	春 13	寸 5	
せ	世 10	勢 1				11	世 10	勢 1				11	世 11				11	世 10	勢 1				11	世 11		
そ	曾 15	所 1				16	曾 15	所 1				16	曾 14	所 2			16	曾 17					17	曾 15	所 1	
た	多 30	堂 17	太 14			61	多 30	堂 17	太 14			61	多 50	堂 11			61	多 37	太 13	堂 10			60	多 53	堂 2	
ち	知 22	地 1				23	知 22	地 1				23	知 23				23	地 12	知 11				23	知 13	地 10	
つ	川 25	徒 5				30	川 25	徒 5				30	川 20	徒 10			30	川 20	徒 7	津 3			30	川 16	徒 13	
て	天 50					50	天 50					50	天 48	帝 2			50	天 48	帝 2				50	天 50		
と	止 81					81	止 81					81	止 82				82	止 80	登 4				84	止 77	登 6	
な	奈 45	那 6				51	奈 45	那 6				51	奈 51				51	奈 43	那 9				52	奈 51	那 1	
に	爾 35	仁 20	耳 2	丹 1		58	爾 35	仁 20	耳 2	丹 1		58	爾 55	丹 1	耳 1		57	爾 41	仁 10	耳 5	丹 4		60	爾 30	仁 23	
ぬ	奴 8					8	奴 8					8	奴 8				8	奴 8					8	奴 8		
ね	年 4	祢 3				7	年 4	祢 3				7	祢 7				7	祢 6	年 1				7	祢 7		
の	乃 35	能 24				59	乃 35	能 24				59	能 32	乃 27			59	乃 35	能 22	農 1			58	乃 46	能 10	
は	者 23	八 16	波 5	盤 2		46	者 23	八 16	波 5	盤 2		46	者 28	八 16	盤 2		46	八 26	者 8	波 8			42	者 18	八 16	
ひ	比 18	日 9	飛 1	悲 1		29	比 18	日 9	飛 1	悲 1		29	比 27	日 2			29	比 21	飛 4	日 4			29	比 19	日 5	
ふ	不 18	布 11	婦 3			32	不 18	布 11	婦 3			32	不 28	婦 2	布 2		32	不 20	布 12	婦 2			34	不 19	布 11	
へ	部 12					12	部 12					12	部 12				12	部 12					12	部 12		
ほ	本 11	保 2				13	本 11	保 2				13	本 7	保 6			13	本 9	保 4				13	本 8	保 5	
ま	末 32	万 6	満 4			42	末 32	万 6	満 4			42	末 36	万 5	満 1		42	末 26	万 8	満 6			40	末 24	万 7	
み	美 4	三 3	見 1			8	美 4	三 3	見 1			8	美 5	三 3			8	美 5	三 3				8	美 4	三 3	
む	武 4					4	武 4					4	武 5				5	武 2	無 1				3	武 2	無 1	
め	女 9	免 2				11	女 9	免 2				11	女 9	免 2			11	女 11					11	免 11		
も	毛 42					42	毛 42					42	毛 42				42	毛 42					42	毛 40		
や	也 19					19	也 19					19	也 19				19	也 11	屋 8				19	也 18	屋 1	
ゆ	由 3	遊 1				4	由 3	遊 1				4	由 3	遊 1			4	由 4					4	由 4		
よ	与 10					10	与 10					10	与 10				10	与 10					10	与 10		
ら	良 24	羅 3				27	良 24	羅 3				27	良 27				27	良 27	羅 1				28	良 27	羅 1	
り	利 38	里 12				50	利 37	里 13				50	利 47	里 3			50	利 42	里 9				51	利 50	里 1	
る	留 22	累 4	類 1			27	留 22	累 4	類 1			27	留 27				27	留 20	流 5	累 1			26	留 18	累 6	
れ	礼 14	連 7				21	礼 14	連 7				21	礼 21				21	礼 11	連 11				22	連 16	礼 6	
ろ	呂 10	路 2				12	呂 10	路 2				12	呂 12				12	呂 10	路 2				12	呂 12		
わ	王 4	和 1				5	王 4	和 1				5	王 4	和 1			5	王 5	和 1				6	王 5	和 1	
ゐ	井 1					1	井 1					1	為 1				1	為 1					1	為 1		
ゑ	恵 3					3	恵 3					3	恵 3				3	恵 2	衛 1				3	恵 2	衛 1	
を	遠 22	越 4				26	遠 22	越 4				26	遠 25	越 1			26	遠 15	越 9				24	遠 21	越 3	
ん	无 7					7	无 7					7	无 6				6	无 9					9	无 9		

1349

1349

1350

1351

- (17) 齊藤鉄也「仮名のNgramを用いた源氏物語写本の系統分類の試み」
〔人文科学とコンピュータシンポジウム〕二〇一七年十二月、「仮名のNgramを用いた源氏物語「空蟬」写本の分類」〔淑徳大学教育学部・経営学部研究年報〕第二号 二〇一九年三月)、「Ngramを用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(一)——書陵部蔵三条西家本、保坂本、大正大学本、日大本、池田本、大島本との比較を通して——」〔実践女子大学文芸資料研究所年報〕第三九号 二〇二〇年)。

仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付けの調査

― 書陵部蔵三条西家本、保坂本、大正大学本を中心とした写本との比較を通して ―

齊 藤 鉄 也

【要旨】

本稿では、写本文に出現する仮名字母の出現傾向の点から、紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』を、その奥書に記載されている明応四年に近い時期に書写されたと考えられる源氏物語を中心とした写本と比較し、奥書の記述を裏付ける根拠を探索した。その結果、明応四年と近い時期の実隆筆かと考えられる写本と距離が近い写本を紅梅本の中に発見することはできず、仮名字母の出現傾向の点からは、その時期の実隆筆との関連性を示すことはできなかった。

一 はじめに

紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』⁽¹⁾は、その「夢浮橋」の奥書により、三条西実隆によつて書写された源氏物語写本を、明応四(1495)年とそれ以降の、少なくとも二度転写したと考えられている写本である。本稿では、写本文文に出現する仮名字母の出現傾向の点から、この紅梅文庫旧蔵本源氏物語を、明応四年に近い時期に書写されたと考えられる源氏物語を中心とした写本と比較し、この奥書の記述を裏付ける根拠を探索した結果を報告する。

以下、本稿では、源氏物語写本の名称を通称に従い、その他については、紅梅文庫旧蔵本は紅梅本、書陵部蔵三条西家本は書陵部本、大正大学蔵本は大正大本、日本大学蔵三条西家本は日大本、吉川史料館蔵青表紙本は吉川本、蓬左文庫蔵三条西家本は蓬左文庫本、熊本大学教育学部旧蔵本を熊大本と略す。

調査対象の中心となる源氏物語写本には、書陵部本、保坂本、大正大本に加え、伝称筆者として三条西実隆が挙げられている吉川本「筥木」と蓬左文庫本「空蟬」「関屋」、実隆の奥書がある榊原家本「桐壺」を選択した。調査結果からは、紅梅本の中に、明応四年に近い時期に書写された実隆筆の可能性がある写本と、仮名字母の出現傾向が近い写本が存在する可能性は低いことが明らかになった。その一方で、紅梅本「横笛」だけは、吉川本「筥木」と榊原家本「桐壺」、蓬左文庫本「空蟬」といった写本と、仮名字母の出現傾向が似ている可能性があることが明らかになった。残念なことに、本方法では、仮名字母の出現傾向の類似性によつて写本間に関係がある可能性を指摘できるが、この調査結果が意味する

ことやその原因を明らかにすることはできない。この点に関しては、関連する分野からの異なる対象や手法に基づいた調査報告が必要である。

二 本調査の目的と関連研究

本調査の目的は、紅梅本の中に、実隆筆写本と似た仮名字母の出現傾向を持つ写本の存在の有無を確認することである。文明年間(1469-1495)に近い時期に書写された実隆筆写本と仮名字母の出現傾向が似た写本が紅梅本の中に存在すれば、奥書の記述とは別に、紅梅本が文明年間に書写された実隆筆の源氏物語写本との関係がある可能性を指摘でき、紅梅本の位置付けの議論に貢献できる可能性がある。

本文の変体仮名の字母は、本文の意味に影響を与えないこと、また、仮名字母の出現傾向の集計や処理方法が不明であることから、その出現傾向と書誌情報の関係の調査結果の報告が少なく、知見も得られていなかった。そのため、これまで調査対象として取り上げて論じることが困難な存在であった、と言える。古典籍に特徴的に出現する変体仮名の出現傾向は、書写年代や書写者といった要因によつて影響を受けると考えられるが、その詳細は不明である。この課題に対して、稿者は、文章の特徴を数値化したデータに対して統計手法を用いて分析する、文献学の分野である計量文献学の方法論を古典籍に適用して調査することを試みている。その結果、変体仮名の字母の出現傾向を統計分析すること、写本の書写者の推定や、同一書写者による写本の年代推定ができる可能性を指摘してきた⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾。具体的には、これまでの調査結果からは、仮名字母の出現傾向の似た写本は、同筆の可能性があること、

筆跡が異なり他筆であったとしても、書写者間や写本間に何らかの関係がある写本の可能性があることが明らかになってきた。

変体仮名は、写本文に大量に存在し、調査し易く、平安時代から江戸時代まで長期間に渡って存在する。変体仮名を比較分析することで、書写者や書写年代に関する知見が得られるのであれば、これまで得られている書誌情報とは異なる根拠に基づいて、書誌学や文献学の知見の蓋然性の向上や、写本に関する新たな仮説の提案が可能であろう。加えて、本方法の利点として、仮名字母の出現傾向に対する統計手法の適用により、書写時期に近い写本や書誌情報から関係が指摘されている大量の写本を一括して「自動的」に分類できる。もちろん、仮名字母の出現傾向という一視点から写本間に関係がある可能性を指摘できたとしても、その意味することやその原因は明らかではなく、関連する分野の専門家による検証が必要である。しかし、大量の写本の中から関係する写本を発見することや専門家を必要とする調査を実施することは容易ではない。本調査方法は、その前段階として、調査対象である大量の写本を、専門家の調査することが可能な妥当な数に絞り込み、関係が存在する可能性がある写本を探索する方法として利用できる。

そこで、本調査でもこれまでの調査と同様に、本文の仮名字母の出現傾向を用いて、(1)書陵部本の推定書写年代に近い時期の実隆筆写本と写本間距離の近い写本の探索と、(2)この時期の実隆筆写本と距離の近い紅梅本の写本の存在の有無の確認、加えて、(3)新たに追加した実隆筆写本と距離の近い写本の探索をする。これにより、紅梅本の中に、明応四年に近い時期の実隆筆写本と距離が近い写本が存在すれば、奥書の記述とは異なる根拠によって、その記述の蓋然性を高めることができる可能性

がある。

三 調査対象とした写本と本文データ

調査対象の中心となる写本は、「蓬生」「若菜上」を欠き、江戸時代の補写である「総角」を除く紅梅本五十一写本と、明応四(1495)年に書写年代が近い写本である、書陵部本と大正大本のそれぞれ五十四写本と、保坂本のうち、永正年間(1504 - 1521)頃の書写かとされる室町時代に補写された「桐壺」から「総合」までの十七写本、享禄三(1530)年から四年にかけて書写された日大本の五十三写本である。これらに加えて、長享二(1488)年の実隆筆との奥書がある高松宮家本「松風」、明応六(1497)年書写の天理図書館蔵の実隆筆「新撰菟玖波集」、伝実隆筆である書陵部蔵三条西家本「和泉式部日記」と吉川本「帚木」、実隆による享禄四(1531)年書写の奥書を持つ榊原家本「桐壺」と、伝実隆筆である天文二(1533)年書写の蓬左文庫本「空蟬」「関屋」、伝公順筆の吉川本「明石」「若菜上」とした。加えて、紅梅本と同一の奥書を「夢浮橋」に持つ熊大本のうち二十五写本も調査した。

調査対象に用いた、稿者が作成した本文データは、写本文と同一の仮名字母、行数、改行位置を持つ。これまでの調査⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾から、仮名字母の出現傾向を調査するために必要な文字数は、少なくとも二千五百字以上、多くともおおそ五千字以上あれば十分であることが明らかになっているので、五千字を目安として調査している。

本調査で用いた計二百七十一写本の本文データの集計結果を本稿末に表一としてまとめた。表一では、写本名または源氏物語であれば巻名、

調査対象文字数を文字数、調査対象文字数中に出現した仮名字母数を字母数として表している。それぞれの写本の出典は、本稿末にまとめた。

四 調査手法

本調査では、異なる巻や異なる作品を比較することを想定し、特定の仮名字母ではなく本文に出現する全仮名字母を対象としている。そのため、仮名字母を統一した方針で収集し、統計手法を用いて分類する。調査対象としては本行本文を選択した。その際には、傍記を除き、一音の漢字は仮名と見做して文字を収集している。本調査で用いている「仮名字母の出現傾向」とは、本行本文に出現する仮名字母を集計し、同音の仮名字母ごとに相対頻度を求めた全ての字母の集合である。この出現傾向に対して、統計手法を用いて分類する。

ここで写本の分類に用いた統計的手法は、奥書に基づく書写者や書写年代といった「正しい」（とされる）書誌情報（外的徴証）が知られていない写本の本文データに対して、本文データの仮名字母の出現傾向（内的徴証）だけに基づいてグループに分類する「教師なし分類」と呼ばれる手法の一つである。このため、「教師なし分類」手法による分類結果は、仮説の提案であり、当該分野の専門家による検証が必要である。本調査では、写本間の関係を分析するために、写本間の仮名字母の出現傾向の相違が写本間距離として計算され、分類結果の詳細が樹形図として可視化される階層的クラスター分析を用いた。階層的クラスター分析の方法については本稿末の注にまとめた。

分類結果である樹形図は、同筆の可能性があると考えられる一定の写

本間距離で切断し考察する。これまでの調査により、同筆の可能性がある写本は、写本間距離が10以下でグループを構成すると考えられている。また、仮名字母の出現傾向の点から同一と見做せる写本間距離は0.6と考えられている⁽⁶⁾。

五 階層的クラスター分析に基づく写本の分類結果と考察

計二百七十一写本の分類結果は巨大な樹形図として表されるため、論文や書籍といった印刷物に掲載する一つの図として可視化し理解することとは困難である。そのため、調査目的に合わせた複数写本からなる一部分の樹形図を対象に考察する。

写本間関係を検討するために階層的クラスター分析の結果を示す。図では、巻名を示す文字列に、写本名に加えて、実隆に関係した写本の場合は伝承筆者、書写年代、所蔵者を加えた。図を用いて分類するために、写本をグループに分類する距離を1.61として点線を引き、この点線より距離が近いグループを同筆の可能性があると写本として検討する。加えて、写本間距離が0.6より近い場合は、写本間の仮名字母の出現傾向が同一と見做せるため、同様に点線を引いて検討する。

考察では、最初に、実隆筆写本の分類を試みる。これは、(1)明応四年に近い時期の実隆筆写本と距離の近い紅梅本を探索するために、明応四年に近い時期に書写された実隆筆写本が分類されるグループの存在を確認することが目的である。この明応四年に近い時期に書写された実隆筆写本が分類されることを確認した後、紅梅本と比較し、(2)この時期の実隆筆写本と距離の近い紅梅本の存在の有無を確認する。次に、(3)明

応四年に近い時期に書写された複数の源氏物語写本を比較対象として、紅梅本と写本間距離が近い写本の探索をする。最後に、紅梅本と熊大本との比較に関して述べる。

五・一 日大本を中心とした実隆筆写本の分類

伝称筆者を含む三条西家の人物による写本である、日大本と蓬左文庫本「空蟬」「関屋」「絵合」「松風」「初音」「胡蝶」「螢」「紅梅」「橋姫」「夢浮橋」、吉川本「箒木」「明石」「若菜上」、榊原家本「桐壺」、高松宮家本「松風」、新撰菟玖波集、和泉式部日記を対象に分類した。図一では、同筆の可能性がある距離でグループを構成している写本を灰色で強調して可視化している。

階層的クラスター分析の結果からは、全ての写本を書誌に指摘されている書写者によって分類できるとは限らないが、多くの場合、書写者によって分類できることが明らかになっている⁽³⁾。図一では、上から順に、公条筆からなるグループ、日大本からなる二つの実隆筆のグループ、公順筆を中心としたグループ、上記以外の実隆筆を中心としたグループに分類できることを示している。

それぞれのグループに分類された写本は、仮名字母の出現傾向の類似性を示しているので、必ずしも筆跡の類似性を示してはいない。例えば、図一下部の実隆筆のグループに分類されている、日大本「胡蝶」は公順筆とされる。その奥書には、親本に実隆筆写本を用いたとの記述がある。このことから、公順が親本である実隆筆写本を仮名字母まで一致する書写をしたことにより、実隆筆写本のグループに分類されている可能性を指摘できる。また、公順筆のグループに分類されている、蓬左文庫本「松

風」と「初音」は実枝筆とされる。このことから、親本である公順筆写本を実枝が仮名字母まで一致する書写をしたことにより、公順筆写本のグループに分類されている可能性を指摘できる。

また、これまでの調査から、調査した文字数が少ない写本は、写本間距離が遠くなる傾向がある。この理由は、文字数が少ないためか、または、仮名字母の出現傾向が他写本と異なり偏在しているためか、どちらかの理由で仮名字母の出現傾向が安定せず、写本間距離が遠くなる傾向があると考えられる。このため、同筆との指摘がある写本であっても、「花散里」「関屋」「篝火」は、同筆の可能性がある距離以下でグループを構成することは少ない。

次に分類された各グループに関して考察する。以下、図一の上から、公条筆のグループ、実隆筆のグループ、公順筆を含むグループの順で述べる。

公条筆は、日大本と蓬左文庫本共に同一グループに分類されている。特に、公条筆は、大永五（1525）年に書写された写本と、それ以外の写本に分類できる可能性がある⁽³⁾。奥書より大永五年に書写されたことが明らかな「桐壺」「箒木」「空蟬」と書写年代が不明な「夕顔」が同一グループ内の小グループとして分類されている。実隆筆は、日大本が二つのグループに分類され、それ以外の写本が異なる一つのグループに分類される。日大本以外の写本からなる実隆筆を中心とした図一下部のグループは、異なる書写年代を持つ写本からなる。公順筆は、吉川本と日大本、蓬左文庫本が同一グループを構成している。

この分類結果からは、文明年間に近い時期に書写された実隆筆写本が存在するとすれば、異なる書写年代の写本からなる実隆筆のグループに

分類されると考えられる。この実隆筆写本と同一のグループに分類される紅梅本の写本が存在するとすれば、その写本は実隆筆写本を仮名字母まで忠実に転写したと考えられる。これは、奥書とは異なる理由で、紅梅本が実隆筆を転写した可能性を指摘できる。そこで、紅梅本とこの伝承筆者を含む実隆筆写本と比較する。

五・二 紅梅本と実隆筆写本との比較

同様の方法を用いて、紅梅本と実隆筆写本を対象に分類した。その結果を図二に示した。分類結果は、紅梅本の写本と比較対象とした実隆筆の写本は同一のグループに分類されないことを示している⁽⁸⁾。また、多くの紅梅本の写本がグループを構成することから、同筆の可能性を指摘できる。この結果からは、紅梅本の少なくとも二度の転写によって、その仮名字母の出現傾向に、明応四年に近い時期に書写された実隆筆の影響が残っている可能性は低い、と言える。

但し、紅梅本うち「横笛」は、この他の紅梅本と距離が相対的に遠く、実隆筆写本のグループと距離が近い、隣接した位置に分類されている結果となった。つまり、この「横笛」は、他の紅梅本の写本とは異なり、仮名字母の出現傾向が相対的には実隆筆写本と似ている、と言える。紅梅本の書写年代は足利末期⁽¹⁾とされていることから、実隆筆写本とは書写年代が異なる。また、これら実隆筆写本と近い時期に書写されている日大本「横笛」は公条筆⁽³⁾であり、日大本「横笛」を転写した写本の存在を仮定すると、その写本が実隆の仮名字母の出現傾向を持つ可能性は低いと考えられる。一つの可能性として、実隆筆「横笛」が存在し、紅梅本を書写した人物がそれを転写したことが考えられる。この他にも

様々な可能性が考えられるが、これまでのところ、これらの可能性を支持する根拠は仮名字母の出現傾向の類似性以外に存在しない。

この様に本方法を用いた調査では、仮名字母の出現傾向の類似性から写本間に何らかの関係がある可能性を指摘することができるが、残念ながら紅梅本「横笛」だけが異なる理由や、写本の書写年代の前後関係といったことは明らかにできない。また、調査済み写本と何らかの関係が存在することを想定できる未調査の写本によって、例えば、未調査の実隆筆写本との比較により、分類結果が変化する可能性もある。本調査結果だけに依拠した議論は、今後の調査結果によって覆る可能性があるため、資料の探索や調査、複数の方法の適用や開発によって、その蓋然性を高める必要がある。

五・三 紅梅本と文明年間に近い時期の写本との比較

紅梅本「夢浮橋」の奥書の記述に基づく明応四年に書写年代が近い、書陵部本、大正大本、保坂本を対象に、紅梅本と比較した。その分類結果を図三に示す。この図では、調査対象とした百七十六写本の結果ではなく、同筆の可能性がある距離でグループを構成した写本だけを選択して可視化している。この結果からは、紅梅本と同筆の可能性がある距離でグループを構成する、明応四年に書写年代が近い写本は存在しなかった⁽⁷⁾⁽⁹⁾。

調査対象とした写本の中には、同筆の可能性があるグループを構成する写本が存在する。これらのグループには伝来を同じくする写本からなることが多い。また、異なる伝来を持つ写本であっても、同筆の可能性があることを指摘できる。

この結果からは、同筆の可能性がある距離でグループを構成する仮名字母の出現傾向が似た写本は、同時代に書写されたかと考えられる写本であっても多くはないことと、グループを構成する場合は、同じ一揃えの写本内でグループを構成することが多いことが明らかになった。また、日大本を中心とした調査から、仮名字母の出現傾向が似た写本は、何らかの写本間関係があり、同一人物が複数の写本の書写を担当している可能性や、異なる筆跡であるにも関わらずグループを構成する場合は、同筆の親本を仮名字母まで忠実に書写した可能性が指摘できる。

五・四 紅梅本と熊本大学本との比較

前稿⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾の報告後に、中城さと子氏より、熊大本「夢浮橋」の奥書が、紅梅本「夢浮橋」と一致するとの知見をご教示していただいた。そのため、熊大本のうち、二十五写本の仮名字母の出現傾向を調査し、紅梅本との比較を試みた。

その分類結果を図四に示す。その結果、調査した熊大本の写本に関しては、多くの熊大本の写本が同筆の可能性がある距離でグループ構成した。このため、熊大本は同一人物によって書写されている可能性が指摘できる。一方で、多くの紅梅本と熊大本は、同筆の可能性がある距離で同一のグループを構成することはなかった。このため、仮名字母の出現傾向からは、紅梅本と熊大本が同筆の可能性があるとは指摘できない。

加えて、紅梅本「横笛」は、実隆筆写本と仮名字母の出現傾向が類似すると前述した。しかし、熊大本「横笛」は、他の熊大本と同一のグループに分類されていることから、これら二つの「横笛」の仮名字母の出現傾向は異なっていることが明らかである。前述した様に、「横笛」を除

く他の紅梅本が同筆の可能性があることから、仮に、熊大本の書写者が紅梅本の書写者と同一人物であるとすれば、紅梅本「横笛」の仮名字母の出現傾向だけが異なる理由を知っていると推定できる。その理由が、実隆筆写本を尊重して仮名字母まで転写したとするならば、熊大本「横笛」も同様に仮名字母の出現傾向が異なるように書写するのではない。しかし、調査結果は、熊大本の書写者は、紅梅本「横笛」の仮名字母の出現傾向が他の紅梅本と異なる理由を知らないために、自分の仮名字母を用いて書写したのではないかと考えると説明がし易いことを示している。これは、仮定に仮定を重ねている議論ではあるが、紅梅本と熊大本の書写者を考察する際には、それぞれの「横笛」の仮名字母の出現傾向の相違を考慮に入れる必要がある。

一方で、「篝火」に関しては紅梅本と熊大本で同筆の可能性がある距離でグループを構成した。この結果は、同筆である可能性の他に、紅梅本と熊大本のどちらか一方を親本として他方を仮名字母まで転写した可能性が指摘できる。図四からは、「篝火」の本文文字数が少ないため、紅梅本と熊大本の仮名字母の出現傾向が、どちらにより近いかわからない。そこで、仮名字母の出現傾向に対して、主成分分析を用い、二次分析として非階層的クラスター分析を用いて分類を試みた。その結果、熊大本「篝火」は紅梅本の一部が分類されたグループに分類された。このため、熊大本「篝火」は紅梅本の仮名字母の出現傾向に近い可能性がある。この結果の意味することとして、紅梅本から熊大本が転写された可能性を指摘できる。

これらの調査結果からは、紅梅本と熊大本は異なる人物によって書写された可能性を示しながらも、「夢浮橋」の奥書の他に、「篝火」の写本

本文の仮名字母の出現傾向に両写本の密接な関係があることを示し、詳細な調査の必要がある、と言える。

六 まとめと今後の課題

奥書とは異なる根拠に基づいて紅梅本を位置付けるために、同時期に書写されたと考えられる複数の源氏物語写本の本文の仮名字母の出現傾向に着目して、写本の比較を行った。その結果、明応四年と近い時期の実隆筆かと考えられる写本と距離が近い写本を紅梅本の中に発見することとはできず、仮名字母の出現傾向の点からは、その時期の実隆筆であることを示すことはできなかった。但し、伝称筆者を含み、異なる書写年代からなる実隆筆かと考えられる写本グループは、紅梅本「横笛」と写本間距離が近いことが明らかになった。また、熊大本を調査し紅梅本との関係を考察した。残念なことに、本手法では、このような写本の関連性の指摘は可能であるが、その理由を明らかにすることはできないことから、関連する分野の複数の調査が必要であることを指摘した。

謝辞

上野英子先生をはじめとした本文研究会の参加者の諸先生のご教示に、末筆ながら厚く御礼申し上げます。また、本研究はJSPS科研費JP19K00349の支援により実施されました。

注

階層的クラスター分析では、次の手順で写本を分類していく。最初に、全ての写本の組合せに対して、仮名字母の出現傾向の相違を表す写本間距離を求める。次に、その距離が最も近い二つの写本からなる写本グループ（クラスター）を構成する。以降、構成されたグループやグループを構成していない写本を対象に距離を求め、その距離が最も近い関係にあるグループや写本からなる新しいグループを構成する。グループ間またはグループと写本との距離は、グループを構成する可能性がある全写本の組合せの距離を求め、その距離の平均をグループの写本間距離とする。最終的には、仮名字母の出現傾向の類似した写本がグループを構成する、全ての写本からなる樹形図が構成される。

参考文献

- (1) 上野英子「源氏物語三条西家本の世界——室町時代享受史の一樣相」武蔵野書院 2019
- (2) 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた藤原定家書写資料の調査」情報処理学会論文誌 Vol.59 No.2 315-322 (Feb. 2018)
- (3) 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた日本大学蔵三条西家本源氏物語の調査」人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 Vol.2018 No.1 59-66 (Dec. 2018)
- (4) 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた大島本源氏物語の調査」人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 Vol.2019 No.1 157-164 (Dec. 2019)
- (5) 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた尾州家河内本源氏物語関連写

本の調査」情報処理学会論文誌 Vol.61 No.2 144-151 (Feb. 2020)

- (6) 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた池田本源氏物語の調査」人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 Vol.2020 No.1 121-128 (Dec. 2020)

- (7) 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(1)」実践女子大学文芸資料研究所年報第39号 (2020年3月)

- (8) 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向を用いた紅梅文庫旧蔵本源氏物語の調査」淑徳大学経営学部・教育学部研究年報 2019 (2020年3月)

- (9) 齊藤鉄也「仮名字母の出現傾向から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付け(2)」実践女子大学文芸資料研究所年報第40号 (2021年3月)
- (10) 金明哲「テキストデータの統計科学入門」岩波書店 2011

出典

調査対象写本は、出版または画像公開された写本を対象としている。特に書名のない写本は源氏物語を表している。

- ・紅梅本 (紅梅文庫旧蔵本) 実践女子大学文芸資料研究所上野英子教授より画像を閲覧させていただいた

- ・書陵部本 (書陵部蔵三条西家本) 宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム

<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000629260000>

- ・保坂本 保坂本源氏物語第一巻～第四巻 おうふう 1995, 1996
 - ・大正大本 大正大学図書館・研究所 源氏物語写本
- https://tais.ac.jp/library_labo/library/genji/

(2021/09/30 現在リンク切れ)

- ・日本本 (日本大学蔵三条西家本) 日本大学蔵源氏物語第五巻三条西家証本 八木書店 1995

- ・高松宮家本 高松宮御蔵河内本源氏物語第4巻 臨川書店 1973

- ・榊原家本 国文学研究資料館新日本古典籍総合データベース
- <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200016474/>

- ・蓬左文庫本 (蓬左文庫蔵三条西家本) 源氏物語青表紙本 54巻・目録2巻・極1巻56冊・1冊 請求番号1-1644

- ・吉川本 (吉川史料館蔵青表紙本) 整理番号555

- ・熊大本 (熊本大学教育学部所蔵本)
- <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100137183/>

- ・和泉式部日記 (書陵部蔵三条西家本) 宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム

<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000613360000?searchIndex=7>

- ・新撰菟玖波集 (天理図書館蔵) 天理図書館 善本叢書 和書之部 第二十巻 新撰菟玖波集 實隆本 八木書店 1975

表一 調査対象とした写本と文字数

卷	紅梅本		書陵部本		大正大学本	
	文字数	字母数	文字数	字母数	文字数	字母数
01-桐壺	5688	114	5828	103	5695	109
02-箒木	5814	116	5876	116	5764	112
03-空蟬	4582	109	4601	116	4566	109
04-夕顔	5341	108	5746	113	5624	104
05-若紫	5456	112	5414	112	5297	117
06-未摘花	5564	103	5615	113	5623	114
07-紅葉賀	5835	109	5617	116	5683	107
08-花宴	5828	107	4046	117	4261	117
09-葵	5150	103	5991	113	5805	123
10-賢木	5710	106	5436	114	5291	125
11-花散里	1602	103	1542	102	1681	112
12-須磨	3414	100	5527	106	5072	104
13-明石	5939	103	5531	116	5473	118
14-濡標	5698	111	5826	111	5702	108
15-蓬生			5852	117	5978	113
16-閑屋	1964	102	1943	96	1967	102
17-絵合	5578	106	5587	103	5535	111
18-松風	5488	101	5413	115	5442	113
19-薄雲	5187	103	5574	118	5337	114
20-朝顔	5431	104	5201	104	5506	107
21-少女	5582	99	5589	112	5605	111
22-玉鬘	5278	101	5173	100	4996	102
23-初音	6077	104	6241	111	6113	119
24-胡蝶	5729	112	5571	98	5822	117
25-蛩	6394	102	6172	109	5792	125
26-常夏	6018	105	5999	97	5637	115
27-篝火	1343	105	1360	103	1370	102
28-野分	6678	107	6725	114	6538	116
29-行幸	11517	112	10961	118	11568	117
30-藤袴	5707	103	5775	113	5620	113
31-真木柱	6330	102	6144	116	6111	102
32-梅枝	5374	107	5379	110	5390	108
33-藤裏葉	5369	101	5530	113	5246	112
34-若菜上			5709	111	5695	98
35-若菜下	5457	105	5423	117	5513	92
36-柏木	5238	107	5063	118	3259	96
37-横笛	5424	117	5498	97	4767	113
38-鈴虫	5803	113	5690	116	5811	113
39-夕霧	5551	107	5485	106	5382	93
40-御法	5846	115	5677	111	5674	97
41-幻	6569	118	6423	113	6359	95
42-勾兵部卿	5720	116	5286	107	5204	121
43-紅梅	5309	105	5047	115	5177	112
44-竹河	5488	105	5394	98	5018	99
45-橋姫	15678	117	5068	104	5172	104
46-椎本	5375	100	5439	113	5472	101
47-総角	3253	99	5330	101	5634	103
48-早蕨	7338	110	7070	105	6619	123
49-宿木	5570	105	5672	104	5720	100
50-東屋	5662	100	5695	111	5587	102
51-浮舟	5310	103	5323	112	5236	101
52-蜻蛉	5473	104	5498	110	5161	103
53-手習	5361	102	5312	110	5200	121
54-夢浮橋	5486	104	5492	110	5371	118

表一 調査対象とした写本と文字数（続き）

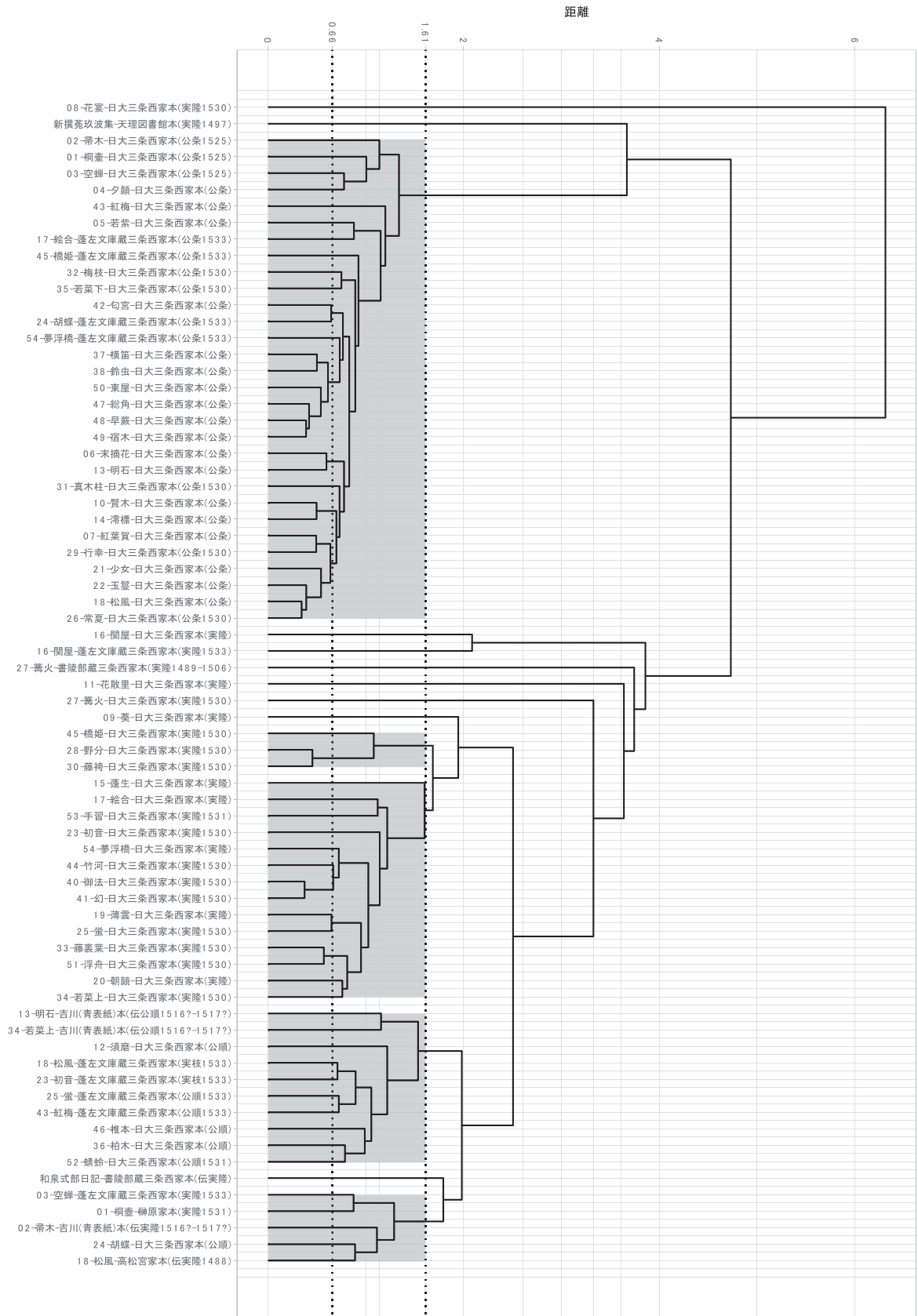
巻	保坂本		日大本		熊本大学本	
	文字数	字母数	文字数	文字数	字母数	文字数
01-桐壺	5857	116	5670	108	4534	101
02-箒木	5565	105	5804	107	5857	99
03-空蟬	4464	117	4582	105	4556	103
04-夕顔	5568	104	5325	107		
05-若紫	5370	114	5480	101	5412	107
06-末摘花	5546	112	5585	100		
07-紅葉賀	5762	122	5777	105		
08-花宴	4272	109	4319	108	4125	100
09-葵	5790	113	6148	100		
10-賢木	5563	119	6282	109		
11-花散里	1585	105	1591	89	1594	94
12-須磨	5485	114	5492	107		
13-明石	5738	117	5938	102		
14-濡標	5661	117	6333	101		
15-蓬生	6012	105	6240	100	6070	98
16-閑屋	1917	100	1989	98	1970	88
17-絵合	5449	116	5756	111		
18-松風			5600	101		
19-薄雲			5740	106		
20-朝顔			5353	112		
21-少女			5988	101		
22-玉鬘			18053	106		
23-初音			6145	109	5997	93
24-胡蝶			5878	116		
25-蛩			6423	106	6270	101
26-常夏			5981	104		
27-篝火			1356	106	1331	99
28-野分			6682	113		
29-行幸			11923	103	11317	109
30-藤袴			5726	107	5684	99
31-真木柱			6658	99		
32-梅枝			5570	102		
33-藤裏葉			5355	115		
34-若菜上			5847	109	5701	100
35-若菜下			5585	98	5424	98
36-柏木			5323	107	5195	97
37-横笛			5630	100	5358	103
38-鈴虫			6054	99	5748	102
39-夕霧						
40-御法			6239	113		
41-幻			6945	109		
42-匂兵部卿			5810	101	5679	99
43-紅梅			5560	98	5280	98
44-竹河			5659	110		
45-橋姫			5292	109	4982	97
46-椎本			5472	105		
47-総角			5621	98	5399	94
48-早蕨			7712	102	7263	97
49-宿木			5858	98		
50-東屋			5849	94		
51-浮舟			29369	126	5282	89
52-蜻蛉			5693	99		
53-手習			5534	109		
54-夢浮橋			5593	106	5456	98

表一 調査対象とした写本と文字数（続き）

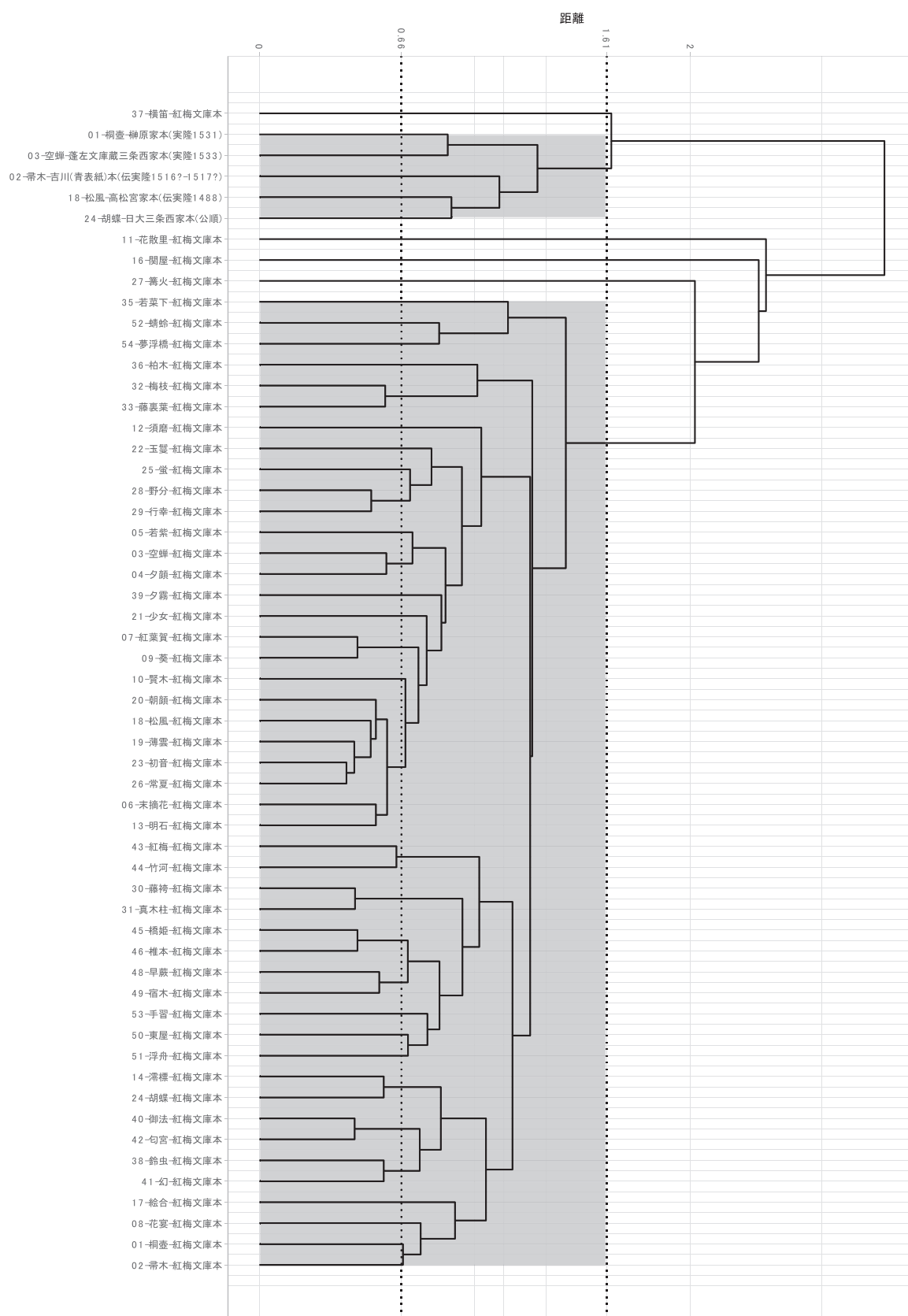
	文字数	字母数
和泉式部日記	6330	110
新撰菟玖波集	6981	139
高松宮家本「松風」	5282	122
榊原家本「桐壺」	5679	120
蓬左本「空蟬」	4573	111
蓬左本「関屋」	1970	99
蓬左本「絵合」	5374	108
蓬左本「松風」	5567	103
蓬左本「初音」	6135	109
蓬左本「胡蝶」	5880	102
蓬左本「蛩」	6419	106
蓬左本「紅梅」	5323	105
蓬左本「橋姫」	4978	98
蓬左本「夢浮橋」	5595	99
吉川本「箒木」	5867	120
吉川本「明石」	5573	110
吉川本「若菜上」	5898	105

図一

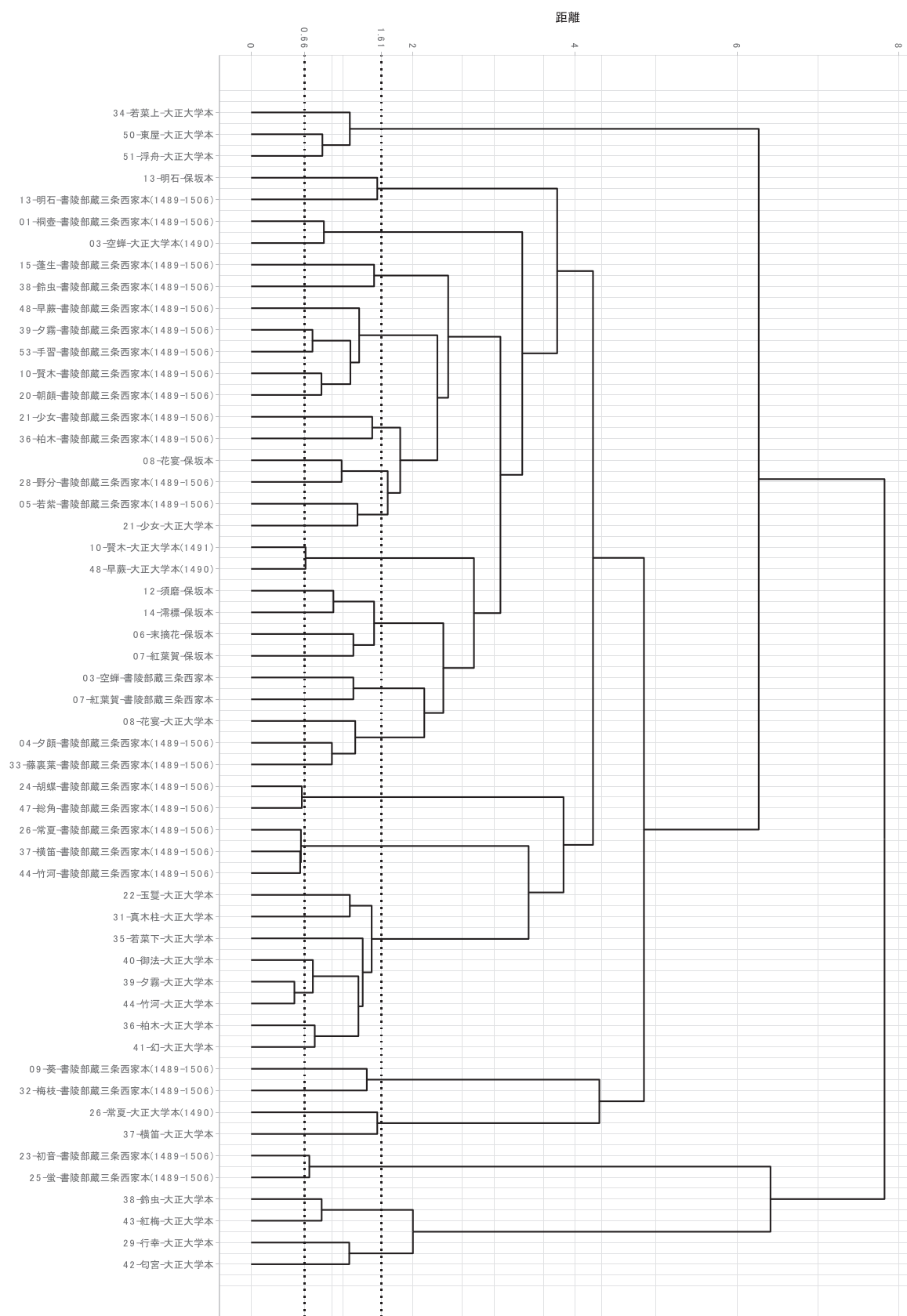
日大本を中心とした実隆筆写本の分類



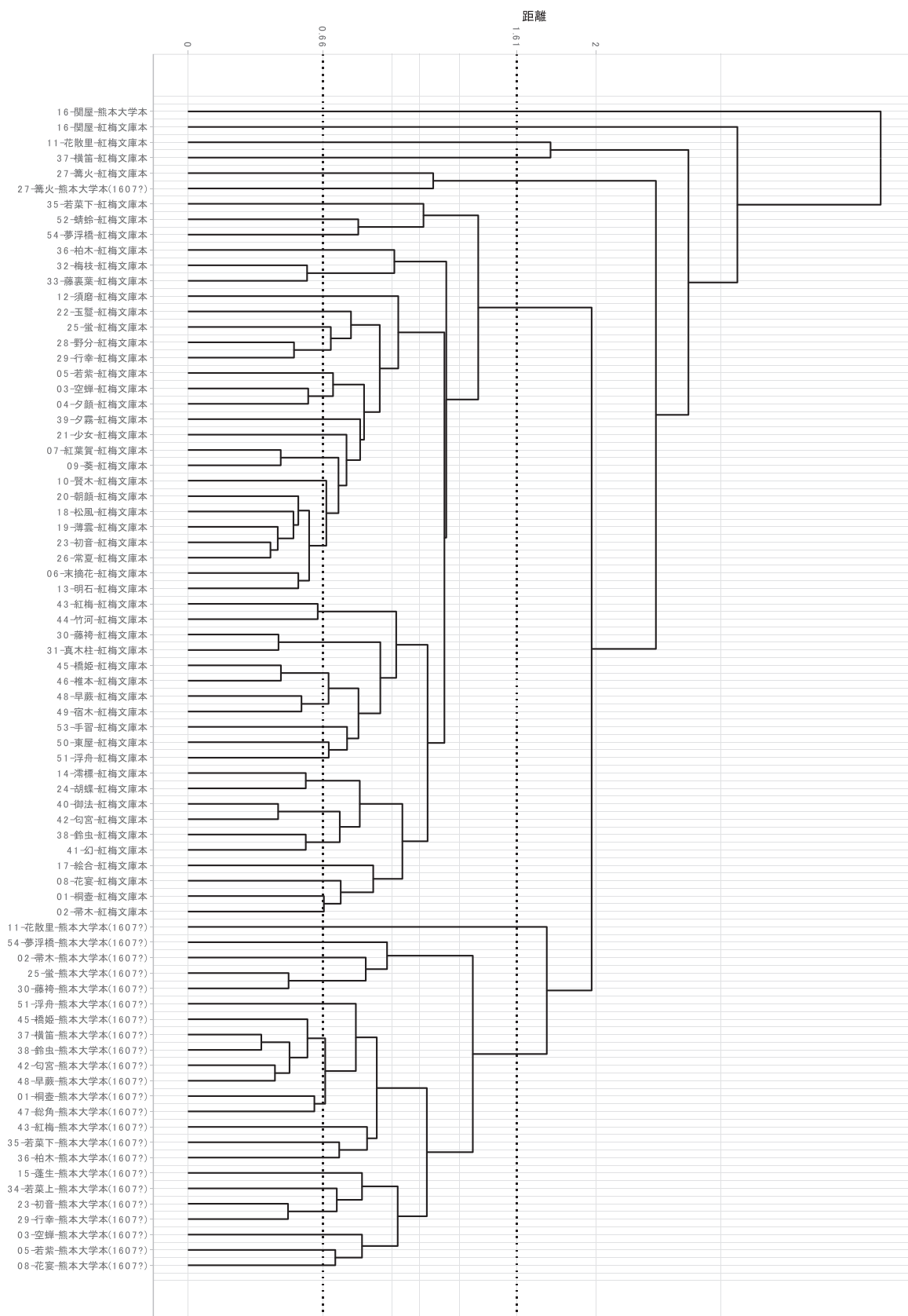
図二 紅梅本を中心とした分類



図三 同筆の可能性がある同時代写本の分類



図四 紅梅本と熊大本の分類



Ngram を用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』の位置付けの調査

―書陵部蔵三条西家本、保坂本、大正大学本、日大本、池田本、大島本を中心とした写本との比較を通して―

齊 藤 鉄 也

【要旨】

本調査の目的は、計量文献学の手法を用いて、他の源氏物語写本と比較し、紅梅文庫旧蔵本の本文を位置付けることである。本調査では、稿者が作成した写本本文のデータから生成した文字列の頻度に基づき、紅梅文庫旧蔵本や日本大学蔵三条西家本、書陵部蔵三条西家本といった源氏物語の各巻ごとに写本本文を分類した。表記の調査結果からは、紅梅文庫旧蔵本は日大本と本文が類似すると考えられる写本が計十七存在し、その中でも大永五(1525)年に書写されたかと考えられる四写本は共通の親本を持つと考えられる程度に本文が類似していることが明らかとなった。

一 はじめに

本研究の目的は、漢字と仮名の使い分けや送り仮名、仮名遣い、音便といった表記の相違を反映した本文データを用いて、計量的な処理のみで写本を分類することと、その結果を文学や文献学の研究成果と比較し、本方法の有効性と限界を明らかにすることである。その一例として、本稿では、紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』⁽¹⁾の本文を中心に、統計学の手法を用いて、他の源氏物語写本と比較し、相対的な位置付けを試みた調査結果を報告する。

本調査では、稿者が作成した写本文のデータから生成した文字列の頻度に基づき、源氏物語の各巻ごとに写本文を分類した。調査対象とした写本は、紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』五十一帖（以下、紅梅本とする）、日本大学蔵三条西家本五十三帖（以下、日大本）、書陵部蔵三条西家本五十四帖（以下、書陵部本）、室町時代補写の保坂本十七帖、大正大学本五十四帖（以下、大正大本）、池田本五十二帖、大島本五十三帖、熊本大学教育学部本の一部である二十五帖（以下、熊大本）の源氏物語を中心とした計三百五十九写本である。

表記の調査結果からは、紅梅本は日大本と本文が類似すると考えられる写本が計十七存在し、その中でも大永五（1525）年に書写されたかと考えられる四写本は共通の親本を持つと考えられる程度に本文が類似していることが明らかとなった。

二 本調査の目的と関連研究

本調査の目的は、計量文献学の手法を用いて、他の源氏物語写本と比較し、紅梅本の本文を位置付けることである。計量文献学は、本文が持つ何らかの特徴や関係を数値を用いて表し、それに対して統計学の手法を適用する文献学の一領域である。本調査では、稿者が作成した写本文のデータから生成した文字列の頻度に基づき、紅梅本と、紅梅本の奥書に記されている三条西実隆が関わった日大本といった室町時代に書写されたと考えられている複数の源氏物語を中心とした本文と比較して、紅梅本の本文の相対的な位置付けを明らかにすることを試みた。

同様の手法を用いた本文分類の例としては稿者による⁽²⁾がある。その調査では、源氏物語の六帖「空蟬」「花宴」「花散里」「閑屋」「篝火」「鈴虫」の全文と、「柏木」の一部を調査対象の写本として選択した。各帖ごとに、本文から五文字の文字列（*5gram*）を生成し、その頻度データを用いて統計分析を行い、写本の分類を試みた。その結果、これまでの定家（青表紙）本系統、河内本系統、別本群といった二系統一群に近い分類結果が得られたが、それらの結果は、書写年代といった書誌情報に関連した分類とはならなかった。

そこで、前稿⁽³⁾⁽⁴⁾では、分類結果を考察し易いように、調査対象写本を定家（青表紙）本系統とし、書写年代が近く、三条西実隆が関わっている可能性がある写本を中心として選択して、本文を分類した。本稿においても前稿と同様の調査方法を用いているが、写本の分類尺度を変更したことで、熊大本を調査対象写本として追加したことから、再調査することとした。

三 調査対象とした写本と本文データ

紅梅本の比較対象に用いた源氏物語の写本は、日大本、書陵部本、大正本、池田本、大島本、室町期補写の保坂本の全帖である。これらに加えて、奥書より、紅梅本の転写本かと考えられる熊大本の一部の写本を比較対象とした。

分析に用いた、稿者が作成した本文データは、写本の本行本文を対象に、仮名と漢字、改行位置を同一としている。一音で読む漢字は全て仮名と見做して仮名と漢字を区別している。漢字の異体字は通行化している。ミセケチされた文字については、傍記は採字せず、本行本文に書写された文字を採字した。

本調査で用いた本文データを本稿末の表一にまとめた。表一では、写本名と仮名と漢字の文字数、文字数に占める漢字の割合を漢字率としてまとめている。本文データの調査範囲はおおよそ五千文字程度を対象とした。五千字に満たない本文を持つ帖は全文を対象としている。

四 調査方法

本調査で用いた写本の本文データの生成方法と分類方法を述べる。生成方法では、調査対象としたそれぞれの写本の本行本文の漢字と仮名の使い分けや仮名遣い、音便を反映した本文データを生成し、それに対して、写本の先頭文字から一文字ずつずらしながら、一定文字数（ N 文字）の本文の断片（ N -gram）を生成する。分類方法では、同一の文字列を集計した頻度を用いて計算した写本間距離によって、表記の似た本文の

分類を、統計的方法を用いて行う。統計的分類方法に関する詳細は注にまとめた。

本方法では、仮名と漢字の使い分け、仮名遣い、送り仮名、音便といった同義ではあるが異なる表記を持つ本文は「異同」と見做し、生成された本文の特徴を表すデータに反映される。つまり、表記の異同によって異なる文字列が生成され、本文の相違として扱われ統計処理される。例えば、定家（青表紙）本系統の写本のうち、「本文が類似している」と指摘される二つの写本であっても、それらの写本が異なる表記を持つ本文の場合、写本間の距離は遠くなるように計算される。その結果、本調査で作成したデータを用いた写本間距離が近い場合は、本文に加えて、表記まで含めて近いことを示し、写本の本文間に何らかの関係があること、例えば、「転写の過程を共有する」、または、「世代が近い」といった写本関係が存在する可能性を示唆している、と言える。その一方で、写本系統の分類の際に重視される本文異同が、仮名と漢字の使い分けといった大量の表記の相違の中に埋もれてしまう可能性があり、『源氏物語大成』を用いた分類結果とは一致しない可能性もある。

五 短編を用いた写本間距離の尺度の設計

前稿^②で調査対象とした「空蟬」「花宴」「花散里」「閑屋」「篝火」「鈴虫」の全文と「柏木」の一部である約五千文字の本文を調査対象に、「本文が類似している」との指摘がある写本間の距離から写本間距離を測る尺度を設計し、その尺度に基づいて閾値となる距離を決めることとした。写本間距離を測る尺度を設計するために採用した写本として、本文が

類似しているとの指摘がある、次の写本を取り上げた⁽³⁾。

- (1) 親本と臨模本の関係がある尊経閣本と明融臨模本の「柏木」、
- (2) 字詰や行詰、漢字と仮名の使い分けが同一との指摘がある日大本と中院文庫本の「空蟬」「花散里」「関屋」「篝火」「鈴虫」の全文、「柏木」の一部、

(3) 共通の親本を持つとの指摘がある池田本と明融臨模本の「桐壺」「花宴」、

(4) 本文間が「似ている」との指摘がある写本には、本文の同一系統内で異同が少ないとの指摘がある河内本のうち、尾州家本と高松宮家本の「空蟬」「花宴」「花散里」「関屋」「篝火」「鈴虫」の全文、「柏木」の一部、

を取り上げ、それぞれの写本群の写本間距離を計算した。これらの写本の本文データを表二にまとめた。

これらの各写本群の写本間距離を計算し、箱ひげ図として図一に表す。箱ひげ図は、調査したデータの25%から75%が集まる範囲を示す「箱」と、最小値から最大値の範囲を示す「ひげ」からなり、それぞれ写本群の写本間距離の分布を可視化することができる。図中の黒点は、調査した写本組の写本間距離の値を示している。

この図を用いて、簡易的な写本間距離を測る尺度を設計する。本調査では、尺度の指標として、データが集まる範囲の中で、箱ひげ図の「箱」の上端の値である分布の75%を示す値を選択した。その結果、臨模の関係にある写本間距離は0.01、字詰や行詰が一致する写本間距離は0.04、共通の親本を持つ写本間距離は0.07、本文異同が少ない写本間距離は0.17となった。これらの写本間距離の指標は、今回の調査で暫定的に決

定した数値である。今後のさらなる写本の調査結果によって変更する可能性がある。

六 各帖の写本間距離の調査結果と考察

調査対象とした紅梅本を含む八写本間の写本間距離を求め、写本間距離の尺度を用いて、本文が類似する写本を探索する。ここでは各帖の調査結果を集約した表を作成し、それに基づいて考察を述べていく。

最初に、各帖ごとに統計手法を用いて分類し樹形図として表した。この結果を本稿末に図二として示した。次に、図二の結果を、写本間関係ごとに表に集約し、本文表記が類似している写本間関係を、表三としてまとめた。また、紅梅本と本文表記が類似している巻を、推定書写年代を含め書写年代が明らかな室町時代の写本と比較し、表四としてまとめた。最後に、紅梅本と熊大本の写本間関係を表五として別にまとめた。

六.一 各帖の写本間距離に基づく分類

本調査では、写本間距離に基づく分類結果は、樹形図として可視化される。写本間距離に近い写本は樹形図の中でグループを構成する。グループの写本間距離は、構成されたグループの樹形図の高さとして表されている。このグループの高さを、写本間距離の尺度と比較し、グループに所属する写本の写本間関係を分類する。図二では、本文表記が類似する尺度で点線を引き、写本間関係を示している。

図二からは、調査対象が限定された暫定的な尺度に基づく分類であるが、本調査結果からは、表記が類似する写本は多くは存在せず、存在し

たとしても、本文異同が少ない写本間距離にある可能性が高いと考えられる。この表記が類似する写本が少ないことから、本方法を用いた調査により、写本間距離が近い写本群を探索し、詳細な調査を必要とする写本を絞り込むことができ、その結果からは、それらの写本間に何らかの関係やその理由が存在する可能性がある、と言える。その関係や理由は奥書といった文献学や書誌学の根拠と共に考察する必要がある、本方法だけでは明らかにすることはできないが、調査すべき写本の選択に關しての示唆を得ることはできる。また、比較対象となる写本が増加した場合であっても、一連の分類手続きはコンピュータ上の統計処理として「自動化」されているため、調査対象写本を拡大した場合にも対応でき、調査や研究の効率化に寄与する可能性がある、と言える。

六・二 各帖の写本間距離に基づく分類の集約

図二の結果を、熊大本を除く、全帖を調査対象としている写本の写本間関係ごとに表三に集約した。表三では、尺度に基づいた写本間関係ごとに、グループを構成する写本を括弧で表している。括弧が入れ子となっているグループは三写本以上が同一グループに存在していることを表している。紅梅本と日大本、熊大本の関係は後述する。ここでは、それ以外の写本関係を述べる。

表三からは、大島本、書陵部本、大正大本の三写本がグループを構成することが、他の写本のグループと比較して多いことが明らかになった。具体的には、大島本、書陵部本、大正大本の三写本がグループを構成する三帖、大島本と書陵部本がグループを構成する五帖、大島本と大正大本がグループを構成する五帖、書陵部本と大正大本がグループを構成する

十二帖がある。特に、書陵部本と大正大本は書写年代が近いと考えられることから、それらの写本に至るまでの転写の過程を共有する可能性に加えて、同時代に流通していた写本の様相を考察する手掛かりとなる可能性がある。

紅梅本と写本間距離が近い写本は表四として別にまとめている。表四では、紅梅本の比較対象として、書写年代が明らかな写本を縦方向に、推定を含む書写年代順に並べ、紅梅本と比較した。紅梅本が欠帖または後補の巻は巻名にアスタリスクを付けている。比較対象写本が存在しない巻には斜線を引いている。紅梅本と写本間距離が近い写本は、前述の尺度の程度に応じて記号を用いて表している。

最初に日大本以外の写本について述べる。紅梅本は、書陵部本と二帖、保坂本と二帖とグループを構成している。これらの写本は日大本より書写年代が古いと考えられることから、紅梅本の本文の位置付けを考察する手掛かりとなる可能性がある。

次に、紅梅本と日大本について述べる。これらの写本は、計十七帖がグループを構成する。そのうち、「桐壺」から「夕顔」までは共通の親本を持つ写本間距離以下に存在する。これらの写本には、奥書より大永五年の書写年代を持つ写本を含む。これは、紅梅本の本文が日大本の多くが書写された享祿三、四年より以前に書写された写本との関係を考察する手掛かりとなる可能性がある。

また、表四の比較対象から外れた写本のうち、写本間距離が近い写本としては、表三から、池田本と日大本がグループを構成する「若紫」「末摘花」「明石」「絵合」「朝顔」「総角」の六帖が存在する。これは、日大本を書写する際に、池田本またはその転写本を用いた可能性が指摘できる。

六・三 紅梅本と熊大本の各帖の写本間距離に基づく分類の集約

最後に、表五として、紅梅本と熊大本の関係をまとめた。紅梅本と熊大本は、共通の親本を持つ距離に十二帖を含み、調査した全二十五帖のうち、紅梅本が欠帖または補写である三帖と「若紫」を除いた二十一帖が、本文異同が少ない写本間距離にある。このことから、紅梅本と熊大本の本文の密接な関係が指摘できる。このため、未調査の写本の確認も必要ではあるが、紅梅本が欠帖または補写である「蓬生」「若菜上」「総角」の本文は、熊大本を用いて検討することが可能であろう。

七 まとめと今後の課題

本稿では、表記に着目した写本間距離の調査を行った。表記を用いた場合、仮名と漢字の区別といった点まで同一でなければ類似していると判断できないため、調査対象写本として、同じ定家(青表紙)本系統内で、三条西実隆に関連した写本を選択し、その分類の細分化を試みた。表記が類似する写本に関しては、写本系統の分類や同系統内での分類の際に重視される本文異同に基づいた分類とは異なり、転写の過程に共通の写本が存在するといった、転写の過程を共有する可能性を指摘できる。そのため、本調査では、本文表記の類似性を測る写本間距離の尺度を設計し、距離に基づいた写本の分類を試みた。これにより、これまでは「本文が類似している」といった定性的な記述をされてきた写本間関係に対して、定量的な写本間距離に基づき、「臨模本と同程度に」「字詰や行詰が一致する程度に」「共通の親本を持つ程度に」「同系統の本文の中で本文異同が少ない程度に」類似している、といった記述が可能になった。

今回、調査対象とした紅梅本の写本は、表記の調査結果からは、日大本と写本間距離が近い写本が多いことが明らかになった。紅梅本の「夢浮橋」の奥書により、実隆筆の親本を少なくとも二度転写されていると考えられる紅梅本ではあるが、書写年代や書写者が異なる日大本と「同系統の本文の中で本文異同が少ない程度に」類似している本文を持つ写本が存在する。この現象を説明するために、文明年間に書写された実隆筆写本⁽¹⁾からの派生した写本として紅梅本と日大本を位置付ける仮説や、日大本を含む写本を取合せた親本を転写した写本として紅梅本を位置付ける仮説を提案できる。しかし、本調査では、比較対象とする写本が限定されているため、それらの仮説を考察することは困難である。

今後は、実隆が書写したとされる写本を含む吉川史料館蔵本や蓬左文庫蔵本といった源氏物語写本を調査対象とし、同様の方法を用いた調査を試み、紅梅本の位置付けを考えていきたい。

謝辞

上野英子先生をはじめとした本文研究会の参加者の諸先生のご教示に、末筆ながら厚く御礼申し上げます。また、本研究はJSPS科研費JP19K00349の支援により実施されました。

注

本文のSgramを生成する手法は、本文の先頭文字から五文字ずつ順に本文の断片文字列を生成する。そのため、一文字ずつずれた五文字の本文の断片が以下、調査対象範囲の最後まで順に生成される。文字列の長さに関

しては暫定的に五文字と決定した。今後の調査によっては、この文字数に変更する可能性がある。本文データからは、次の手順で処理するデータを生成する。

(1) 作成した本文データの最初の文字より一文字ずつずらしながら最後まで長さ五文字の文字列 (5gram) を生成する。この文字列は、同じ帖の写本ごとに機械的に生成される。

(2) 帖単位で写本に出現する同一の 5gram の頻度を集計し、これを本文の特徴を表すデータとする。このデータに対して統計手法を用いて分類する。

(3) 集計した 5gram の頻度に基づいて写本間の距離を計算する。頻度の差が大きいほど、また異なる種類の文字列が多いほど、写本間の距離は大きくなり、本文の表記が異なることを示す。本調査では、異なる巻を同一の尺度で比較するため、写本間距離の計算方法には、情報検索の分野で用いられることが多いコサイン (cosine) 距離を用いている。コサイン距離は、距離が 0 から 1 の間で表される。写本間距離が 0 の場合は、その本文が同一であることを表す。

(4) この写本間距離に対して、統計手法を用いて分類し可視化する。可視化する統計手法は、「教師情報」と呼ばれる既知の分類結果が事前に明らかでないデータに対して、データの特徴だけに基づいて分類する「教師なし分類手法」を用いる。本調査では、互いに近い写本間距離を持つ写本を可視化するために階層的クラスター分析を用いる。階層的クラスター分析では、写本間関係が木構造として表され、互いに写本間距離が近い写本はグループを構成する。本調査では写本のグループの構成方法として、写本間距離が最も遠い距離を群間距離として採

用する、最遠距離法を用いる。

出典

調査対象写本は、出版または画像公開された写本を対象としている。特に書名のない写本は源氏物語を表している。

・紅梅本 (紅梅文庫旧蔵本) 実践女子大学文芸資料研究所上野英子教授より画像を閲覧させていただいた

・書陵部本 (書陵部蔵三条西家本) 宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システム

<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/100062926000>

・大正大学本 大正大学図書館・研究所 源氏物語写本 (2021/09/30 現在リンク切れ) https://tais.ac.jp/library_labo/library/genji/

・日大本 (日本大学蔵三条西家本) 日本大学蔵源氏物語第一巻～第十一巻 三条西家証本 八木書店 1994,1995,1996

・池田本 源氏物語池田本一～十 新天理図書館善本叢書 天理図書館附属天理図書館編 八木書店 2016,2017,2018

・大島本 大島本源氏物語第一巻～第十巻 角川書店 1996

・保坂本 保坂本源氏物語第一巻～第四巻 おうふう 1995,1996

・熊大本 (熊本大学教育学部旧蔵本) 新日本古典籍総合データベース <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100137183/>

参考文献

(1) 上野英子「源氏物語三条西家本の世界―室町時代享受史の一樣相」

武蔵野書院 2019

- (2) 齊藤鉄也「仮名のNgramを用いた源氏物語写本の系統分類の試み」
人文科学とコンピュータシンポジウム論文集 Vol.2017 No.1 89-96 (Dec. 2017)
- (3) 齊藤鉄也「Ngramを用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』
の位置付け(1)」実践女子大学文芸資料研究所年報第39号 2020年3月)
- (4) 齊藤鉄也「Ngramを用いた表記から見た紅梅文庫旧蔵本『源氏物語』
の位置付け(2)」実践女子大学文芸資料研究所年報第40号 2021年3月)
- (5) 齊藤鉄也「表記のNgramを用いた蓬左文庫蔵三条西家本源氏物語の
親本の推定——紅梅文庫旧蔵本源氏物語と日本大学蔵三条西家本源氏物
語との比較を通して——」淑徳大学経営学部・教育学部研究年報 2020
(2021年3月)

表一 本調査で用いた本文データ

巻	紅梅本			書陵部本			大正大本		
	仮名数	漢字数	漢字率	仮名数	漢字数	漢字率	仮名数	漢字数	漢字率
01-桐壺	5688	537	8.6%	5828	477	7.6%	5695	520	8.4%
02-箒木	5814	373	6.0%	5876	356	5.7%	5764	413	6.7%
03-空蟬	4582	262	5.4%	4601	243	5.0%	4566	269	5.6%
04-夕顔	5341	497	8.5%	5746	304	5.0%	5624	361	6.0%
05-若紫	5456	414	7.1%	5414	452	7.7%	5297	511	8.8%
06-末摘花	5564	404	6.8%	5615	385	6.4%	5623	393	6.5%
07-紅葉賀	5835	578	9.0%	5617	667	10.6%	5683	642	10.2%
08-花宴	5828	356	5.8%	4046	417	9.3%	4261	314	6.9%
09-葵	5150	407	7.3%	5991	505	7.8%	5805	593	9.3%
10-賢木	5710	610	9.7%	5436	743	12.0%	5291	808	13.2%
11-花散里	1602	97	5.7%	1542	120	7.2%	1681	115	6.4%
12-須磨	3414	288	7.8%	5527	465	7.8%	5072	671	11.7%
13-明石	5939	375	5.9%	5531	564	9.3%	5473	577	9.5%
14-漣標	5698	563	9.0%	5826	540	8.5%	5702	573	9.1%
15-蓬生				5852	588	9.1%	5978	542	8.3%
16-関屋	1964	120	5.8%	1943	137	6.6%	1967	127	6.1%
17-絵合	5578	541	8.8%	5587	529	8.6%	5535	554	9.1%
18-松風	5488	389	6.6%	5413	416	7.1%	5442	409	7.0%
19-薄雲	5187	375	6.7%	5574	349	5.9%	5337	481	8.3%
20-朝顔	5431	355	6.1%	5201	453	8.0%	5506	325	5.6%
21-少女	5582	556	9.1%	5589	581	9.4%	5605	566	9.2%
22-玉鬘	5278	256	4.6%	5173	327	5.9%	4996	396	7.3%
23-初音	6077	364	5.7%	6241	290	4.4%	6113	339	5.3%
24-胡蝶	5729	436	7.1%	5571	510	8.4%	5822	370	6.0%
25-蚩	6394	270	4.1%	6172	376	5.7%	5792	498	7.9%
26-常夏	6018	407	6.3%	5999	412	6.4%	5637	600	9.6%
27-篝火	1343	117	8.0%	1360	112	7.6%	1370	107	7.2%
28-野分	6678	484	6.8%	6725	477	6.6%	6538	563	7.9%
29-行幸	11517	817	6.6%	10961	1038	8.7%	11568	772	6.3%
30-藤袴	5707	494	8.0%	5775	462	7.4%	5620	539	8.8%
31-真木柱	6330	528	7.7%	6144	606	9.0%	6111	632	9.4%
32-梅枝	5374	551	9.3%	5379	609	10.2%	5390	556	9.4%
33-藤裏葉	5369	490	8.4%	5530	412	6.9%	5246	618	10.5%
34-若菜上				5709	531	8.5%	5695	541	8.7%
35-若菜下	5457	585	9.7%	5423	621	10.3%	5513	580	9.5%
36-柏木	5238	382	6.8%	5063	454	8.2%	3259	388	10.6%
37-横笛	5424	443	7.6%	5498	413	7.0%	4767	706	12.9%
38-鈴虫	5803	549	8.6%	5690	601	9.6%	5811	557	8.7%
39-夕霧	5551	412	6.9%	5485	445	7.5%	5382	514	8.7%
40-御法	5846	425	6.8%	5677	508	8.2%	5674	509	8.2%
41-幻	6569	392	5.6%	6423	460	6.7%	6359	514	7.5%
42-匂兵部卿	5720	550	8.8%	5286	744	12.3%	5204	791	13.2%
43-紅梅	5309	460	8.0%	5047	580	10.3%	5177	514	9.0%
44-竹河	5488	536	8.9%	5394	593	9.9%	5018	543	9.8%
45-橋姫	15678	1088	6.5%	5068	323	6.0%	5172	279	5.1%
46-椎本	5375	545	9.2%	5439	525	8.8%	5472	500	8.4%
47-総角				5330	463	8.0%	5634	328	5.5%
48-早蕨	7338	583	7.4%	7070	717	9.2%	6619	922	12.2%
49-宿木	5570	528	8.7%	5672	523	8.4%	5720	475	7.7%
50-東屋	5662	431	7.1%	5695	422	6.9%	5587	474	7.8%
51-浮舟	5310	457	7.9%	5323	433	7.5%	5236	476	8.3%
52-蜻蛉	5473	405	6.9%	5498	390	6.6%	5161	547	9.6%
53-手習	5361	357	6.2%	5312	381	6.7%	5200	451	8.0%
54-夢浮橋	5486	400	6.8%	5492	388	6.6%	5371	464	8.0%

表一 本調査で用いた本文データ（続き）

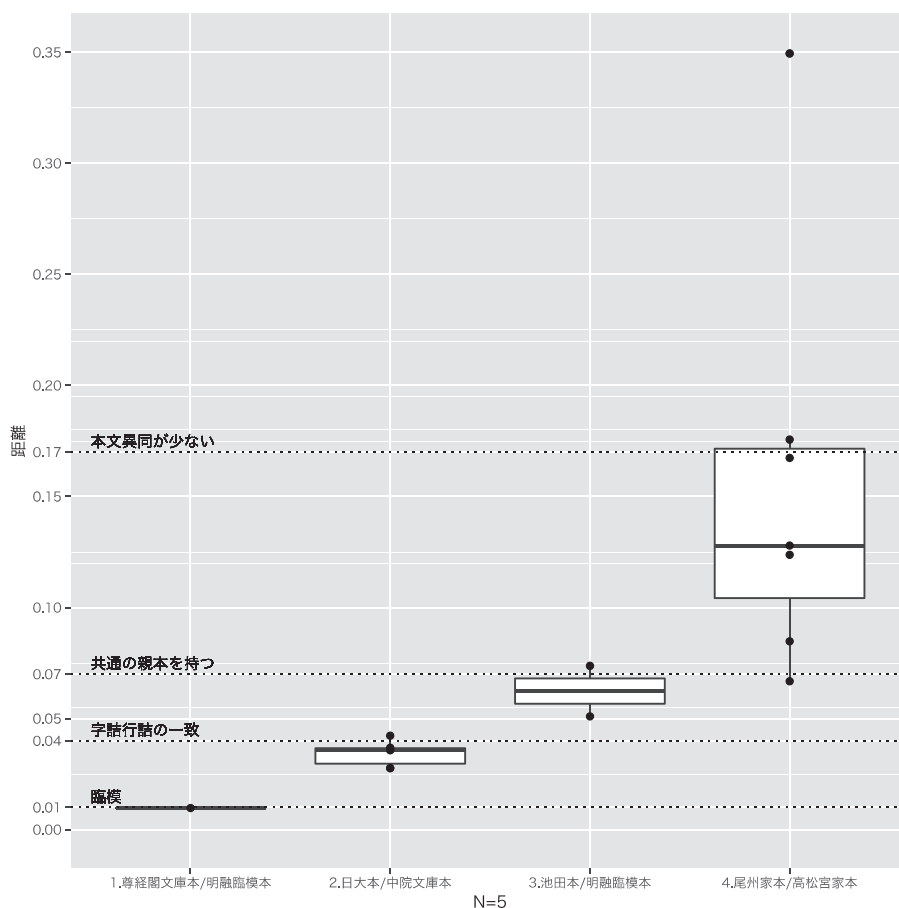
巻	保坂本			日大本			熊大本		
	仮名数	漢字数	漢字率	仮名数	漢字数	漢字率	仮名数	漢字数	漢字率
01-桐壺	5857	469	7.4%	5670	540	8.7%	4534	429	8.6%
02-箒木	5565	515	8.5%	5804	376	6.1%	5857	343	5.5%
03-空蟬	4464	322	6.7%	4582	257	5.3%	4556	272	5.6%
04-夕顔	5568	403	6.7%	5325	503	8.6%			
05-若紫	5370	468	8.0%	5480	420	7.1%	5412	446	7.6%
06-末摘花	5546	422	7.1%	5585	388	6.5%			
07-紅葉賀	5762	605	9.5%	5777	586	9.2%			
08-花宴	4272	314	6.8%	4319	304	6.6%	4125	376	8.4%
09-葵	5790	590	9.2%	6148	422	6.4%			
10-賢木	5563	682	10.9%	6282	332	5.0%			
11-花散里	1585	114	6.7%	1591	97	5.7%	1594	100	5.9%
12-須磨	5485	466	7.8%	5492	452	7.6%			
13-明石	5738	470	7.6%	5938	359	5.7%			
14-濡標	5661	578	9.3%	6333	289	4.4%			
15-蓬生	6012	518	7.9%	6240	366	5.5%	6070	483	7.4%
16-関屋	1917	136	6.6%	1989	110	5.2%	1970	117	5.6%
17-絵合	5449	606	10.0%	5756	444	7.2%			
18-松風				5600	320	5.4%			
19-薄雲				5740	286	4.7%			
20-朝顔				5353	360	6.3%			
21-少女				5988	373	5.9%			
22-玉鬘				18053	678	3.6%			
23-初音				6145	306	4.7%	5997	401	6.3%
24-胡蝶				5878	371	5.9%			
25-蜚				6423	235	3.5%	6270	329	5.0%
26-常夏				5981	407	6.4%			
27-篝火				1356	105	7.2%	1331	125	8.6%
28-野分				6682	458	6.4%			
29-行幸				11923	594	4.7%	11317	918	7.5%
30-藤袴				5726	459	7.4%	5684	500	8.1%
31-真木柱				6658	360	5.1%			
32-梅枝				5570	453	7.5%			
33-藤裏葉				5355	469	8.1%			
34-若菜上				5847	462	7.3%	5701	547	8.8%
35-若菜下				5585	510	8.4%	5424	599	9.9%
36-柏木				5323	347	6.1%	5195	398	7.1%
37-横笛				5630	349	5.8%	5358	473	8.1%
38-鈴虫				6054	418	6.5%	5748	577	9.1%
39-夕霧									
40-御法				6239	237	3.7%			
41-幻				6945	210	2.9%			
42-匂兵部卿				5810	498	7.9%	5679	576	9.2%
43-紅梅				5560	343	5.8%	5280	476	8.3%
44-竹河				5659	434	7.1%			
45-橋姫				5292	209	3.8%	4982	356	6.7%
46-椎本				5472	502	8.4%			
47-総角				5621	324	5.4%	5399	430	7.4%
48-早蕨				7712	404	5.0%	7263	621	7.9%
49-宿木				5858	403	6.4%			
50-東屋				5849	345	5.6%			
51-浮舟				29369	1804	5.8%	5282	471	8.2%
52-蜻蛉				5693	317	5.3%			
53-手習				5534	260	4.5%			
54-夢浮橋				5593	331	5.6%	5456	417	7.1%

表一 本調査で用いた本文データ（続き）

巻	池田本			大島本		
	仮名数	漢字数	漢字率	仮名数	漢字数	漢字率
01-桐壺	9955	1025	9.3%	5547	635	10.3%
02-籌木	5895	326	5.2%	5883	334	5.4%
03-空蟬	4591	251	5.2%	4677	217	4.4%
04-夕顔	5723	313	5.2%	5677	339	5.6%
05-若紫	5502	420	7.1%	5469	421	7.1%
06-末摘花	5554	388	6.5%	5610	401	6.7%
07-紅葉賀	5709	594	9.4%	5750	596	9.4%
08-花宴	4172	356	7.9%	4178	369	8.1%
09-葵	6104	436	6.7%	5935	522	8.1%
10-賢木	5287	526	9.0%	5679	614	9.8%
11-花散里				1568	110	6.6%
12-須磨	5504	468	7.8%	5462	450	7.6%
13-明石	5875	395	6.3%	5465	583	9.6%
14-漣標	5722	558	8.9%	5803	542	8.5%
15-蓬生	6157	396	6.0%	6244	414	6.2%
16-関屋	1989	96	4.6%	1956	133	6.4%
17-絵合	5763	419	6.8%	5579	535	8.8%
18-松風	5453	368	6.3%	5522	375	6.4%
19-薄雲	5477	397	6.8%	5438	437	7.4%
20-朝顔	5324	370	6.5%	5508	324	5.6%
21-少女	5534	560	9.2%	5615	527	8.6%
22-玉鬘	5469	166	2.9%	16546	1397	7.8%
23-初音	5976	382	6.0%	5506	646	10.5%
24-胡蝶	5808	403	6.5%	6570	400	5.7%
25-蜚	6045	384	6.0%	6128	388	6.0%
26-常夏	6063	348	5.4%	6694	410	5.8%
27-篝火	1289	114	8.1%	1360	109	7.4%
28-野分	6729	415	5.8%	6736	470	6.5%
29-行幸	10906	1039	8.7%	11542	788	6.4%
30-藤袴	5846	424	6.8%	5656	520	8.4%
31-真木柱	6410	471	6.8%	8867	842	8.7%
32-梅枝	5335	563	9.5%	5433	530	8.9%
33-藤裏葉	5701	333	5.5%	5416	489	8.3%
34-若菜上	5802	468	7.5%	5592	584	9.5%
35-若菜下	5498	553	9.1%	5606	541	8.8%
36-柏木				5262	349	6.2%
37-横笛	5834	249	4.1%	5429	445	7.6%
38-鈴虫	5902	485	7.6%	5702	590	9.4%
39-夕霧	5572	363	6.1%	5541	423	7.1%
40-御法	6042	332	5.2%	5663	507	8.2%
41-幻	6519	398	5.8%	6311	524	7.7%
42-匂兵部卿	5635	564	9.1%	5181	827	13.8%
43-紅梅	5190	484	8.5%	5005	587	10.5%
44-竹河	5614	436	7.2%	5470	553	9.2%
45-橋姫	15540	1086	6.5%	15629	1125	6.7%
46-椎本	5577	425	7.1%	5310	574	9.8%
47-総角	5697	286	4.8%	5489	396	6.7%
48-早蕨	7320	550	7.0%	7353	589	7.4%
49-宿木	5613	428	7.1%	5583	549	9.0%
50-東屋	5598	401	6.7%	5504	495	8.3%
51-浮舟	5600	295	5.0%			
52-蜻蛉	5485	370	6.3%	5465	402	6.9%
53-手習	5536	334	5.7%	5198	426	7.6%
54-夢浮橋	5506	356	6.1%	5515	393	6.7%

表二 尺度の設計に用いた写本

		仮名数	漢字数	漢字率		仮名数	漢字数	漢字率
臨模								
36-柏木	尊経閣本	16706	1149	6.4%	明融臨模本	16726	1149	6.4%
行詰が一致								
03-空蟬	日大本	4582	257	5.3%	中院文庫本	4584	257	5.3%
11-花散里	日大本	1591	97	5.7%	中院文庫本	1585	97	5.8%
16-関屋	日大本	1989	110	5.2%	中院文庫本	1987	112	5.3%
27-篝火	日大本	1356	105	7.2%	中院文庫本	1357	105	7.2%
36-柏木	日大本	5323	347	6.1%	中院文庫本	5322	342	6.0%
38-鈴虫	日大本	6054	418	6.5%	中院文庫本	6049	421	6.5%
親本が共通								
01-桐壺	池田本	9955	1025	9.3%	明融臨模本	9995	1024	9.3%
08-花宴	池田本	4172	356	7.9%	明融臨模本	4200	349	7.7%
異同が少ない								
03-空蟬	尾州家本	4691	195	4.0%	高松宮家本	4600	225	4.7%
08-花宴	尾州家本	4730	275	5.5%	高松宮家本	4395	426	8.8%
11-花散里	尾州家本	1759	66	3.6%	高松宮家本	1752	68	3.7%
16-関屋	尾州家本	2068	70	3.3%	高松宮家本	2070	88	4.1%
27-篝火	尾州家本	1300	134	9.3%	高松宮家本	1326	121	8.4%
36-柏木	尾州家本	5436	267	4.7%	高松宮家本	5502	243	4.2%
38-鈴虫	尾州家本	6157	411	6.3%	高松宮家本	5996	461	7.1%



図一 各写本群の写本間距離の箱ひげ図

表三 本文表記が類似している写本間関係表

写本間関係	卷	写本群
臨模		
字詰行詰が一致	01	(紅梅本,日大本)
共通の親本を持つ	02	(紅梅本,日大本)
	03	(紅梅本,日大本)
	04	(紅梅本,日大本)
	08	(保坂本,大正大本)
本文異同が少ない	01	(書陵部本,保坂本)
	02	((紅梅本,日大本),書陵部本)
	05	(池田本,日大本)
	06	((池田本,日大本),書陵部本)(大島本,大正大本)
	07	((大正大本,日大本),書陵部本),(紅梅本,保坂本))
	10	(紅梅本,保坂本)
	13	(池田本,日大本)
	14	(紅梅本,保坂本)(書陵部本,大正大本)
	16	(大島本,大正大本)
	17	(池田本,日大本)((大島本,大正大本),書陵部本)
	18	(紅梅本,大島本)(書陵部本,大正大本)
	20	(池田本,日大本)(大島本,大正大本)
	21	(書陵部本,大正大本)
	24	(紅梅本,日大本)
	26	(紅梅本,日大本)(大島本,書陵部本)
	27	((紅梅本,書陵部本),日大本)(大島本,大正大本)
	28	(紅梅本,日大本)(大島本,書陵部本)
	29	(大島本,大正大本)
	31	(書陵部本,大正大本)
	32	(紅梅本,日大本)
	33	(紅梅本,日大本)
	34	(大島本,書陵部本)
	35	(紅梅本,日大本)((書陵部本,大正大本),大島本)
	36	(紅梅本,日大本)
	39	(書陵部本,大正大本)
	40	(大島本,書陵部本)
	42	(紅梅本,日大本)
	44	((大島本,書陵部本),大正大本)
	45	(書陵部本,大正大本)
	46	(書陵部本,大正大本)(紅梅本,日大本)
	47	(池田本,日大本)(大島本,大正大本)
	50	(紅梅本,日大本)
	51	(紅梅本,日大本)
	52	(大島本,書陵部本)
	53	(書陵部本,大正大本)

表四 紅梅本と書写年代が指摘される写本の写本間関係表

写本名 推定年代	大正大本 1493	書陵部本 1489-1506	保坂本 1504?-1521?	日大本 1525,1530,1531
01-桐壺				◎
02-箒木		●		○
03-空蟬				○
04-夕顔				○
05-若紫				
06-末摘花				
07-紅葉賀	●	●	●	●
08-花宴				
09-葵				
10-賢木			●	
11-花散里				
12-須磨				
13-明石				
14-滯標			●	
15-蓬生*				
16-関屋				
17-絵合				
18-松風				
19-薄雲				
20-朝顔				
21-少女				
22-玉鬘				
23-初音				
24-胡蝶				●
25-蛭				
26-常夏				●
27-篝火		●		●
28-野分				●
29-行幸				
30-藤袴				
31-真木柱				
32-梅枝				●
33-藤裏葉				●
34-若菜上*				
35-若菜下				●
36-柏木				●
37-横笛				
38-鈴虫				
39-夕霧				
40-御法				
41-幻				
42-匂兵部卿				●
43-紅梅				
44-竹河				
45-橋姫				
46-椎本				●
47-総角*				
48-早蕨				
49-宿木				
50-東屋				●
51-浮舟				●
52-蜻蛉				
53-手習				
54-夢浮橋				

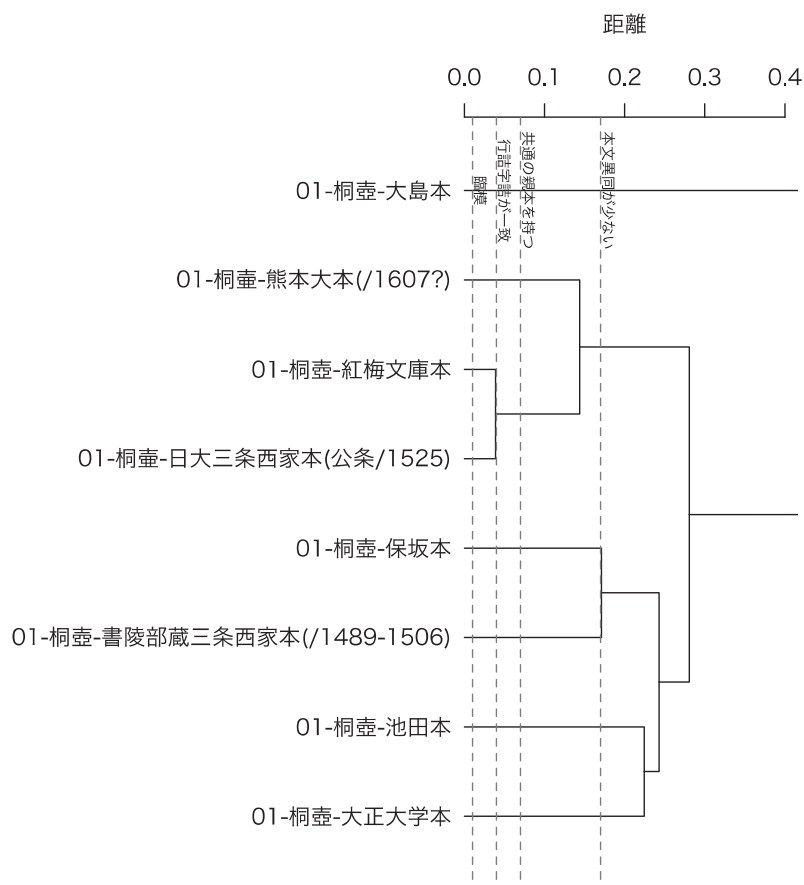
◎字詰行詰が一致、○共通の親本を持つ、●本文異同が少ない

表五 本文表記が類似している紅梅本と熊大本の写本間関係表

写本間関係	卷	写本群
臨模		
字詰行詰が一致		
共通の親本を持つ	08 11 16 23 27 35 36 37 38 42 43 51	(熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本)
本文異同が少ない	01 02 03 05 15 25 27 29 30 34 35 36 42 45 48 51 54	((紅梅本,日大本),熊大本) ((紅梅本,日大本),熊大本) ((紅梅本,日大本),熊大本) (熊大本,紅梅本) (保坂本,熊大本) (熊大本,紅梅本) ((熊大本,紅梅本),日大本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,日大本) ((熊大本,紅梅本),日大本) ((熊大本,紅梅本),日大本) ((熊大本,紅梅本),日大本) (熊大本,紅梅本) (熊大本,紅梅本) ((熊大本,紅梅本),日大本) (熊大本,紅梅本)

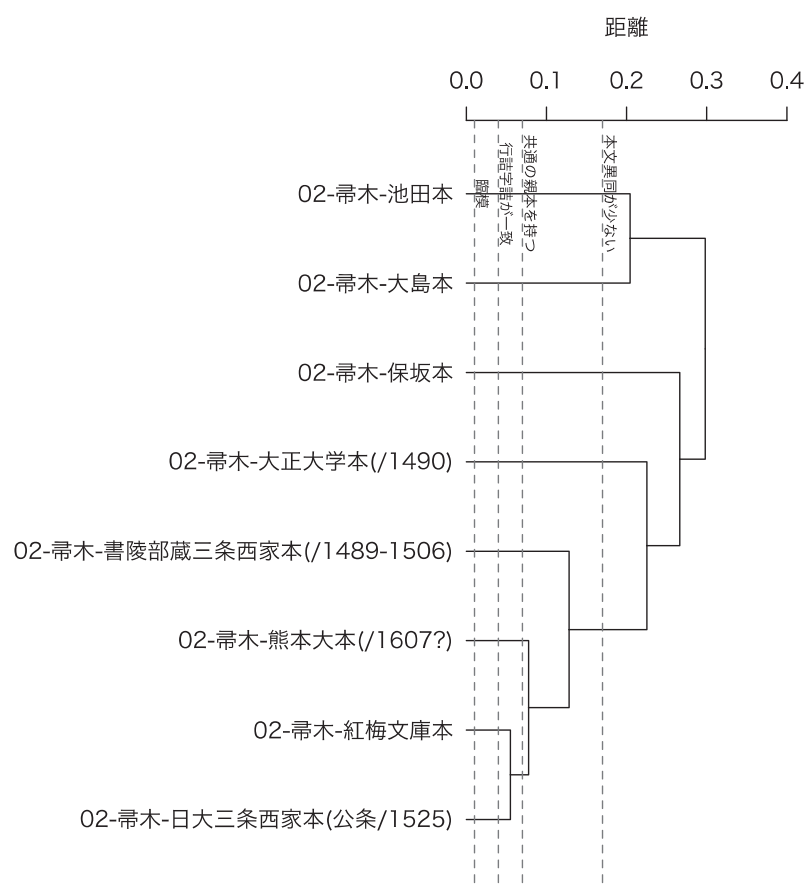
図二 各帖ごとの写本間距離の樹形図

第一帖「桐壺」



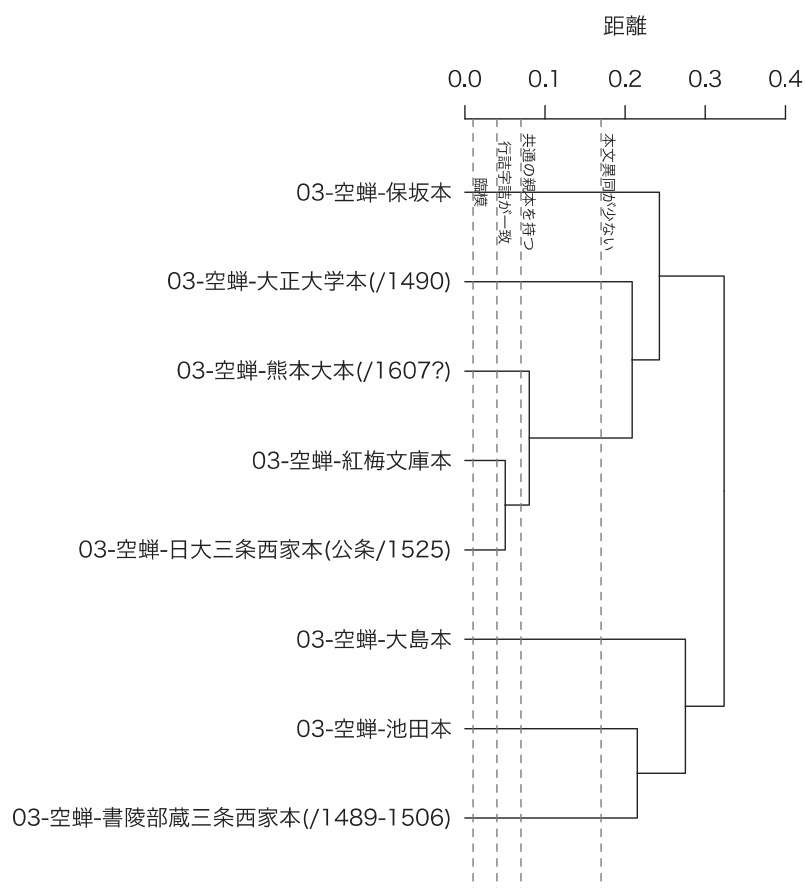
・紅梅本と日大本は字詰や行詰が一致する距離にある。熊大本はそれらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第二帖「帚木」



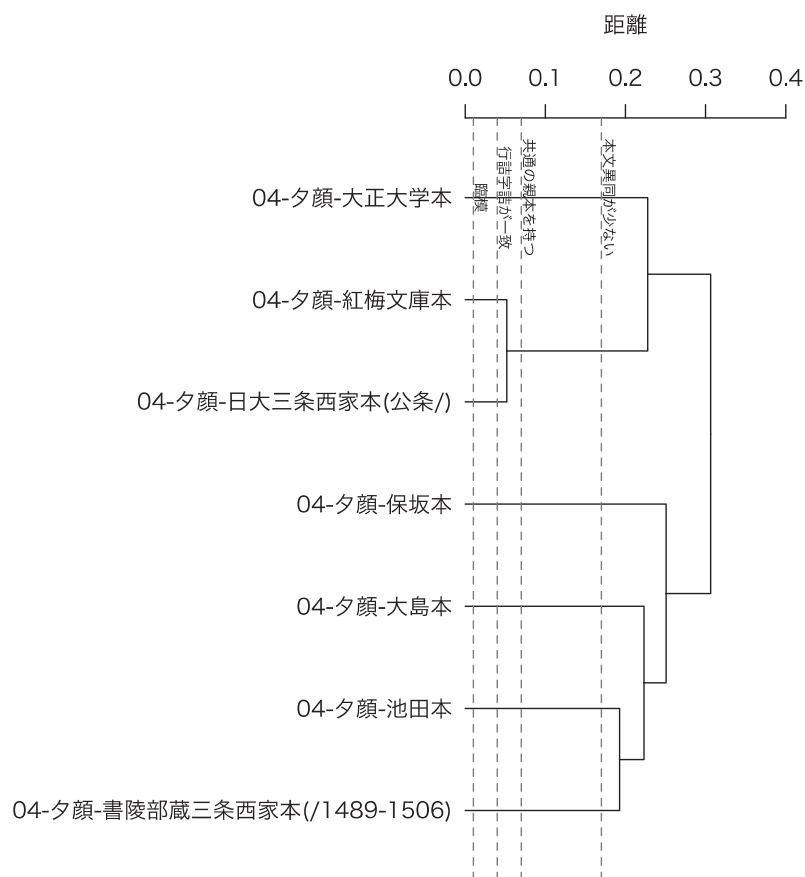
・紅梅本と日大本は共通の親本を持つ距離にある。熊大本と書陵部本はそれらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第三帖「空蟬」



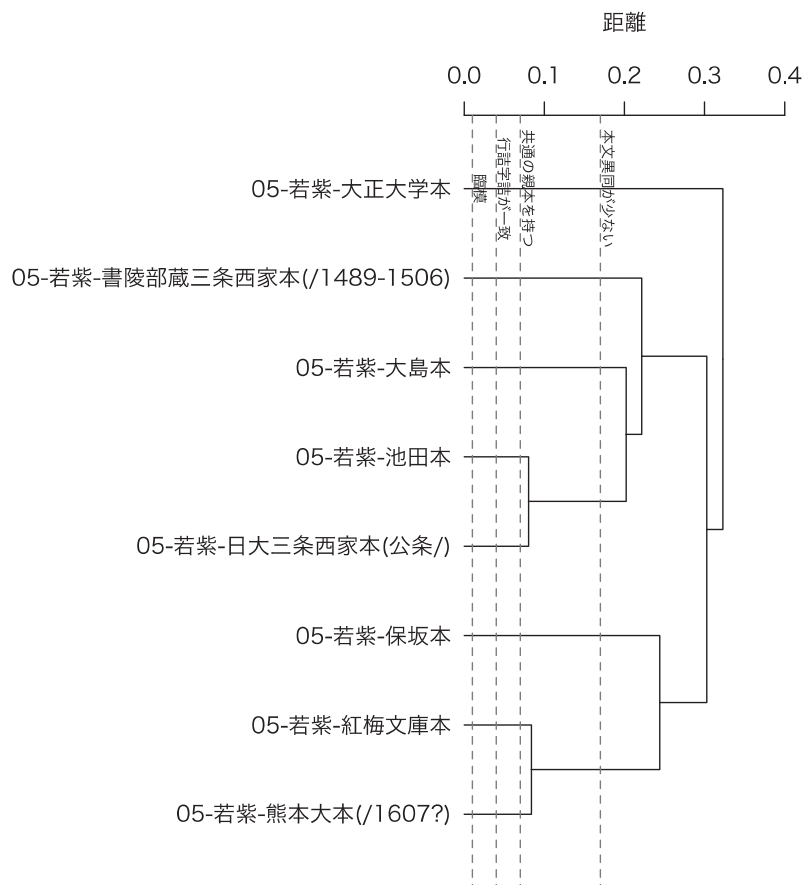
● 紅梅本と日大本は共通の親本を持つ距離にある。熊本本はそれらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第四帖「夕顔」



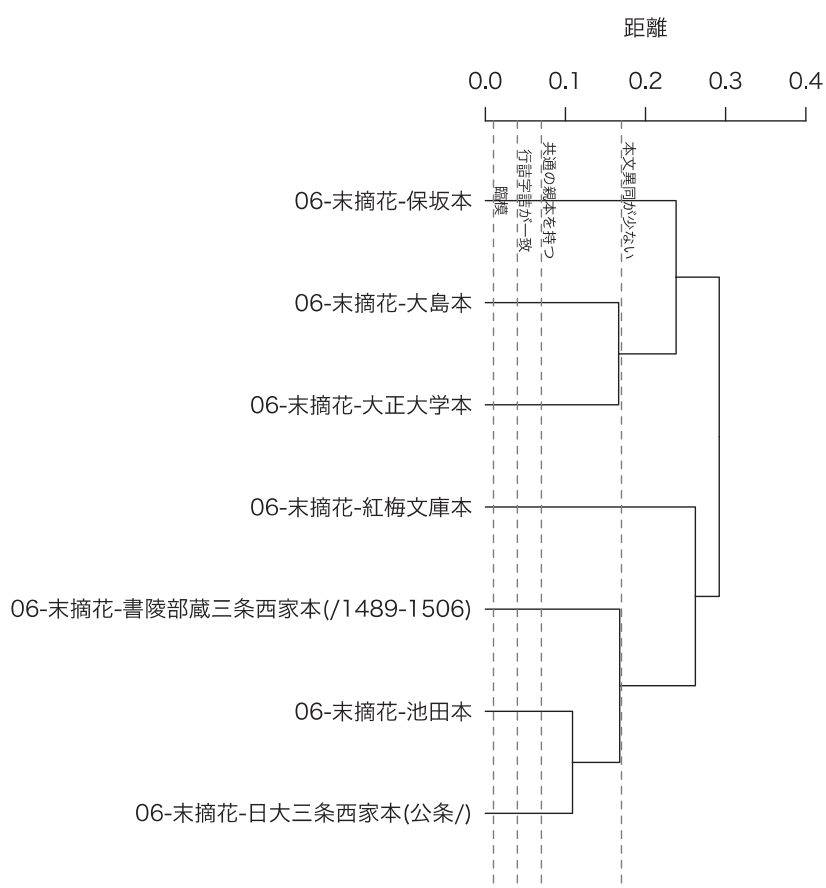
● 紅梅本と日大本は共通の親本を持つ距離にある。

第五帖「若紫」



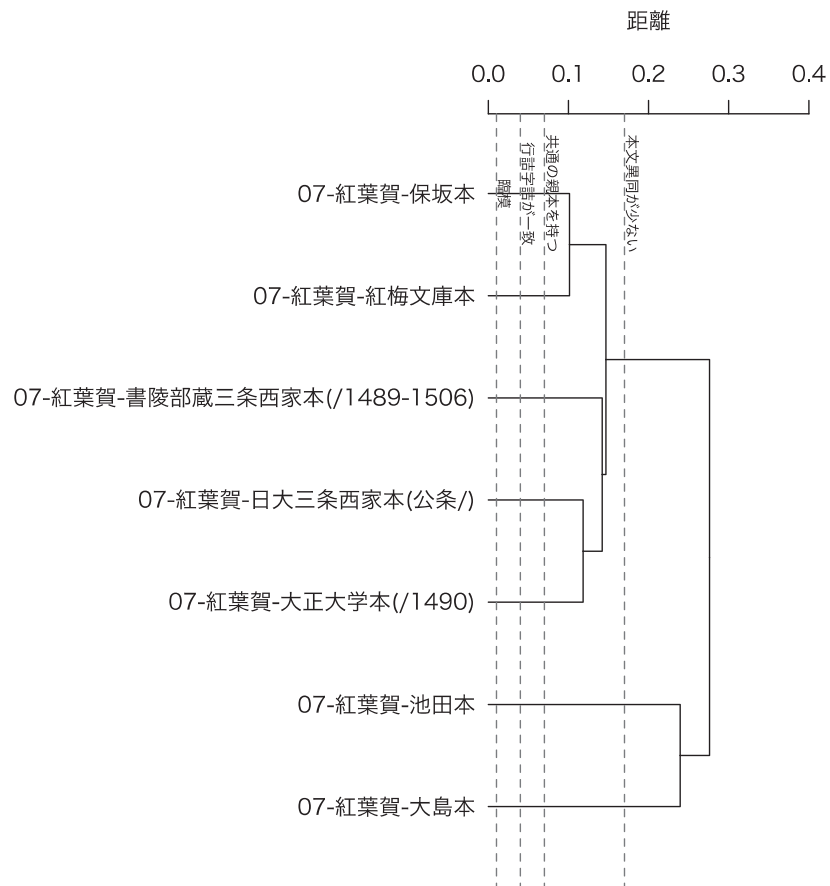
- 池田本と日大本は本文異同が少ない距離にある。
- 紅梅本と熊大本は本文異同が少ない距離にある。

第六帖「末摘花」



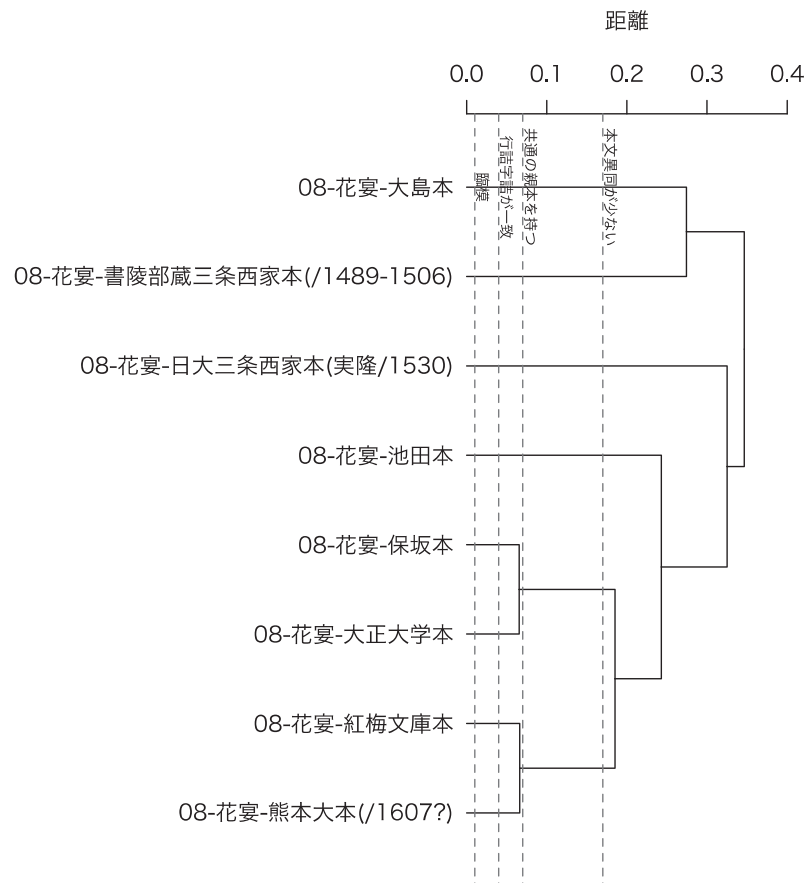
- 大島本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。
- 池田本と日大本、書陵部本は本文異同が少ない距離にある。

第七帖「紅葉賀」



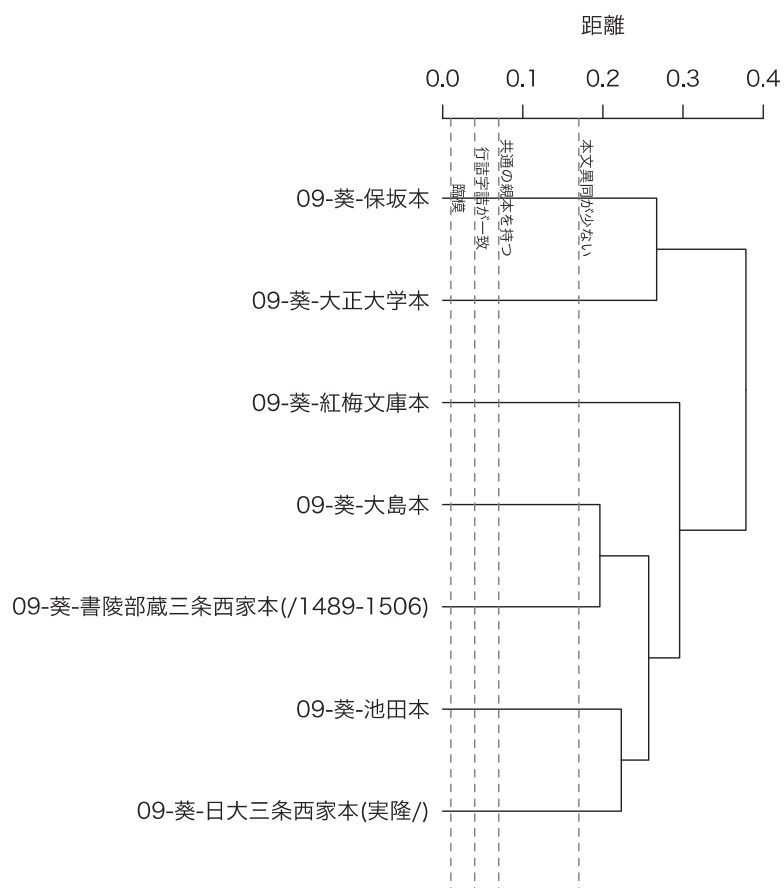
● 日大本と大正大本、書陵部本、保坂本は本文異同が少ない距離にある。

第八帖「花宴」



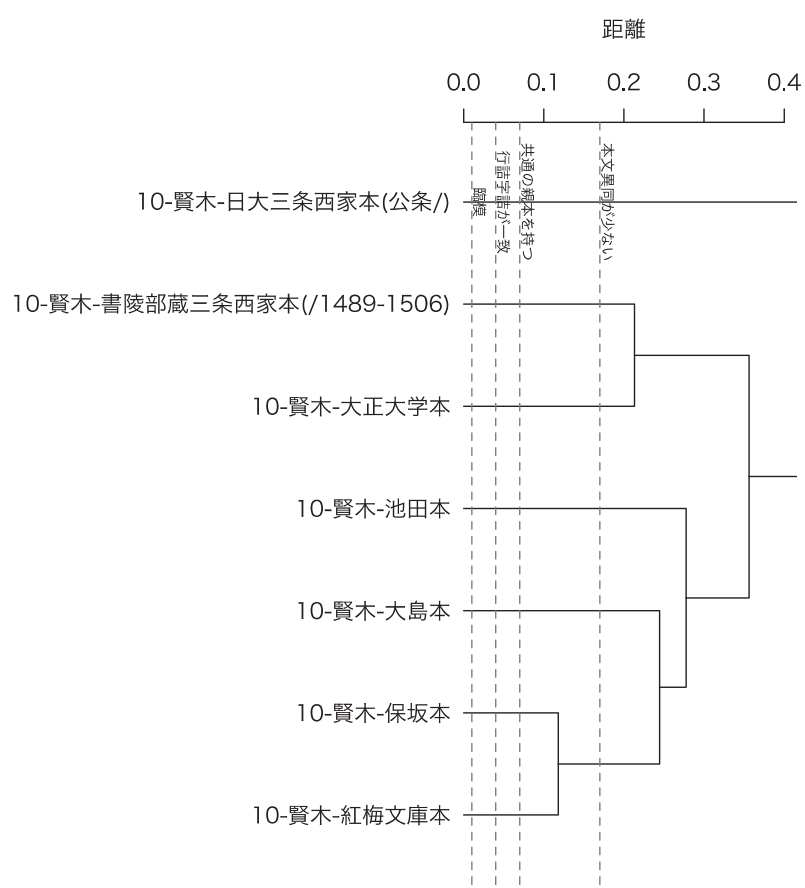
● 保坂本と大正大本は共通の親本を持つ距離にある。
● 紅梅本と熊大本は共通の親本を持つ距離にある。

第九帖「葵」



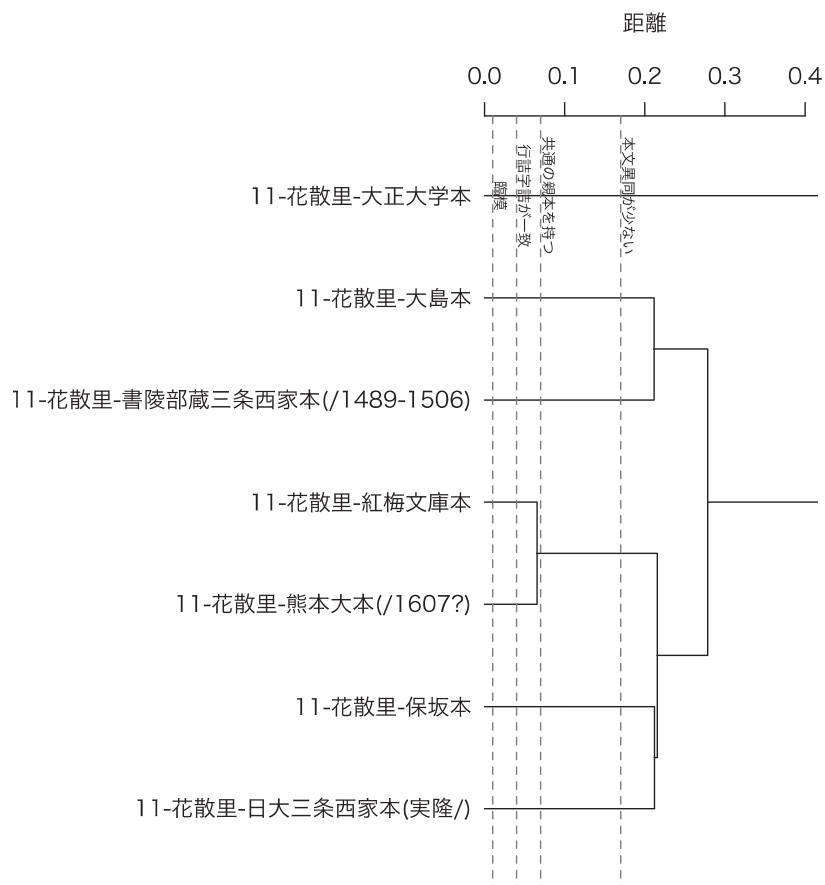
- 本文が類似する写本は存在しない。

第十帖「賢木」



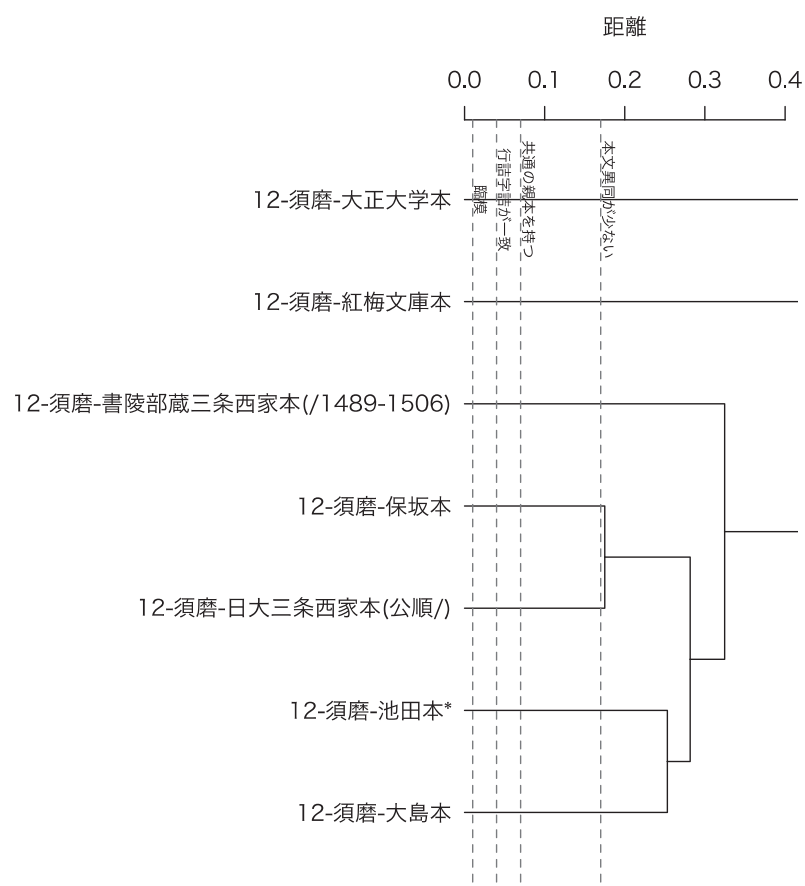
- 保坂本と紅梅本は本文異同が少ない距離にある。

第十一帖「花散里」



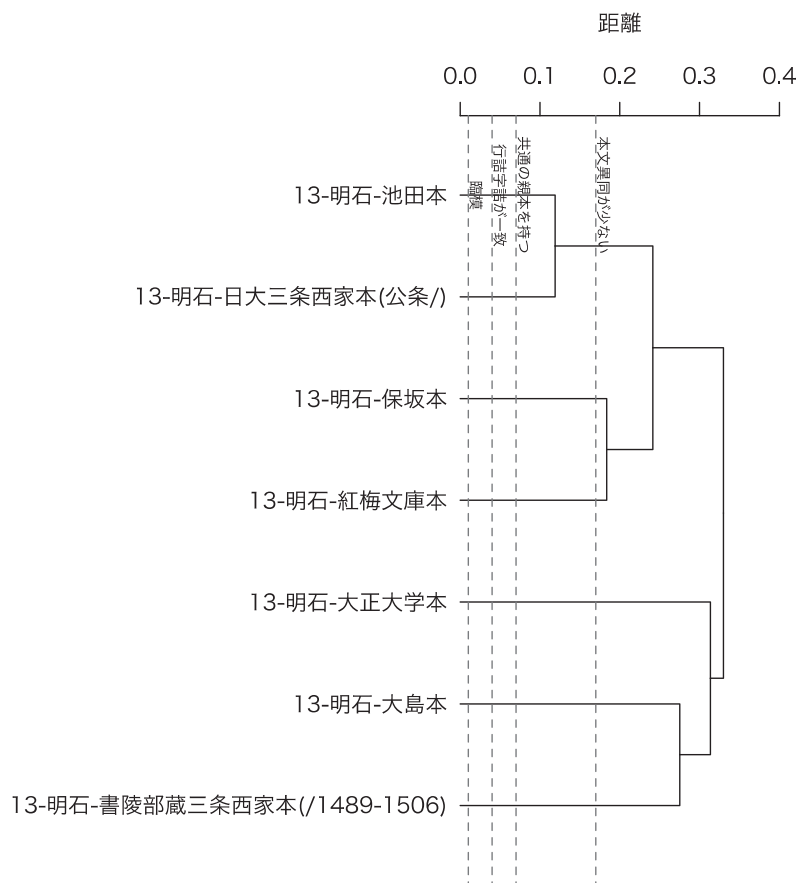
・紅梅本と熊本本は共通の親本を持つ距離にある。

第十二帖「須磨」



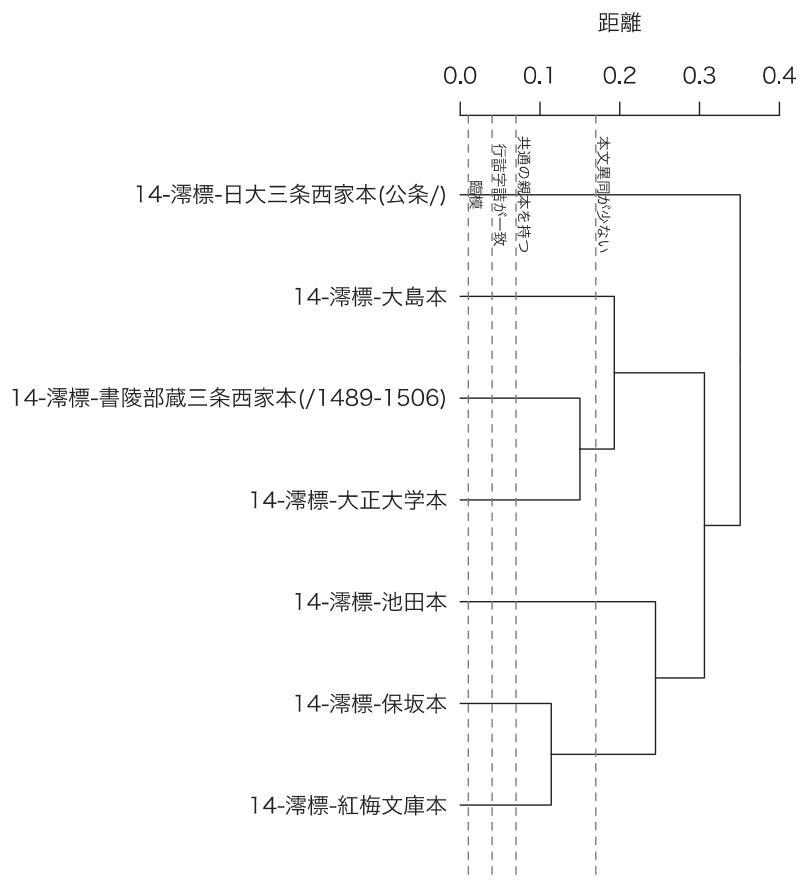
・池田本には調査対象範囲の本文に脱落がある。

第十三帖「明石」



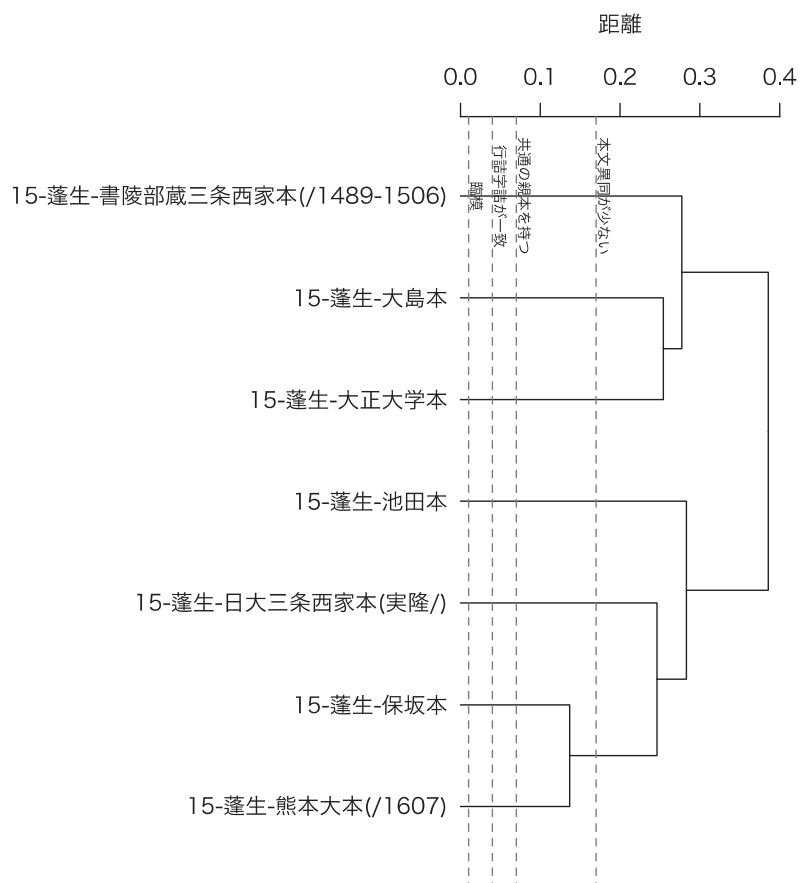
● 池田本と日大本は本文異同が少ない距離にある。

第十四帖「湊標」



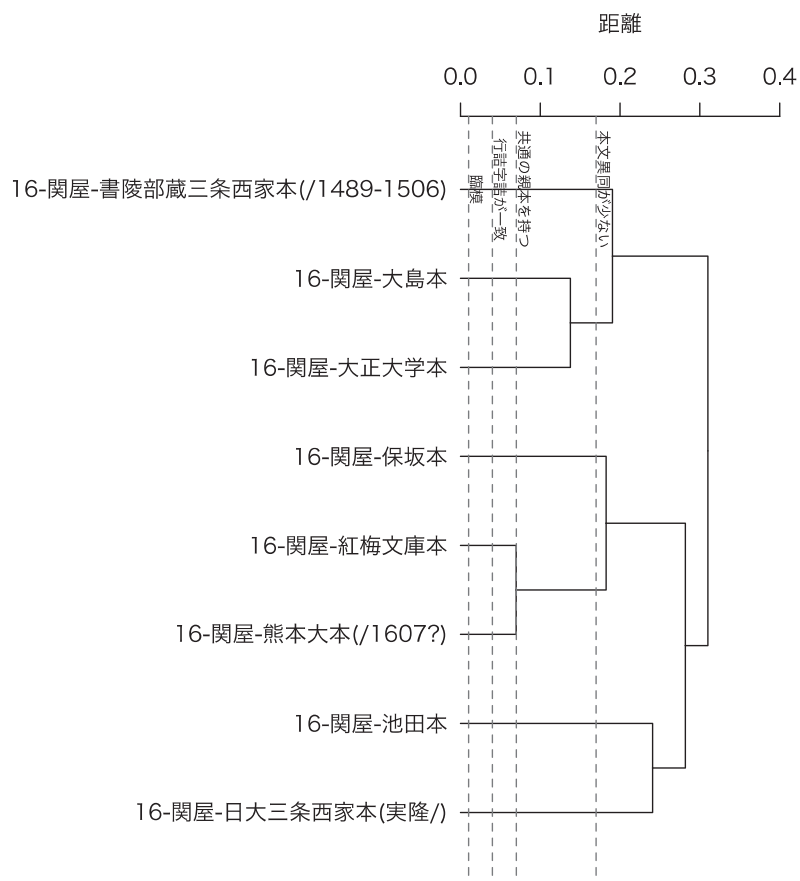
● 書陵部本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。
● 保坂本と紅梅本は本文異同が少ない距離にある。

第十五帖「蓬生」



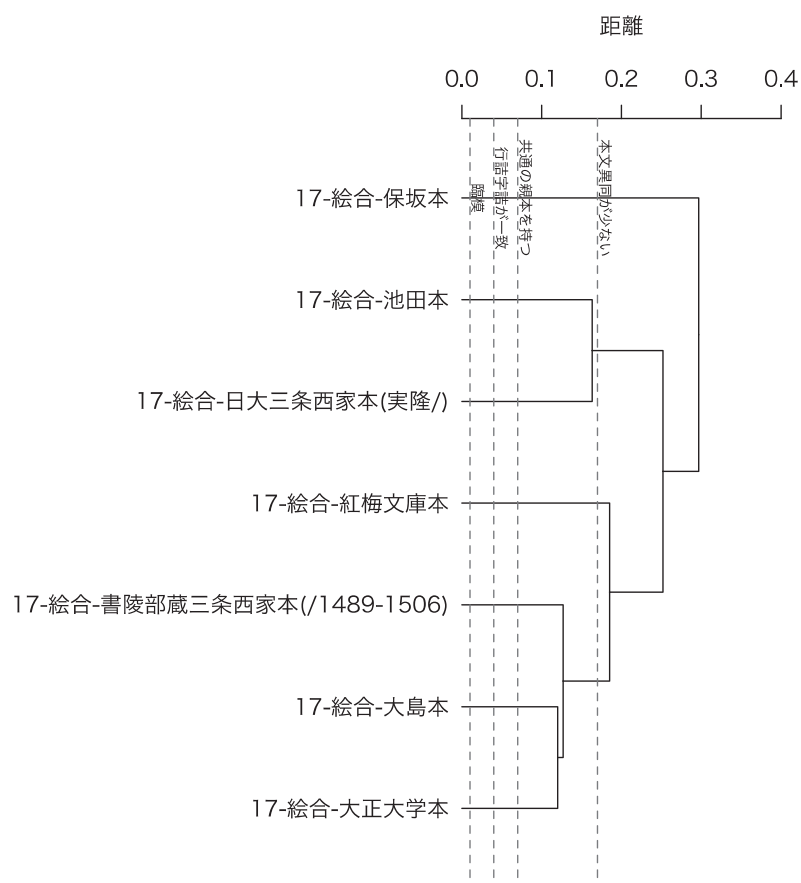
● 保坂本と熊大本は本文異同が少ない距離にある。

第十六帖「関屋」



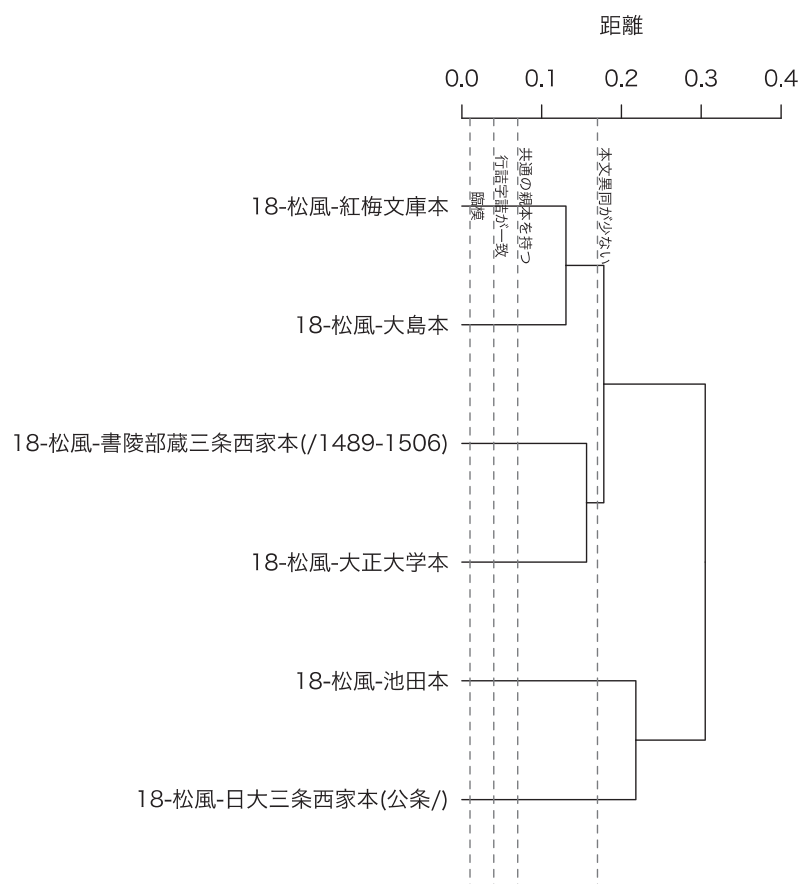
● 大島本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。
● 紅梅本と熊大本は共通の親本を持つ距離にある。

第十七帖「絵合」



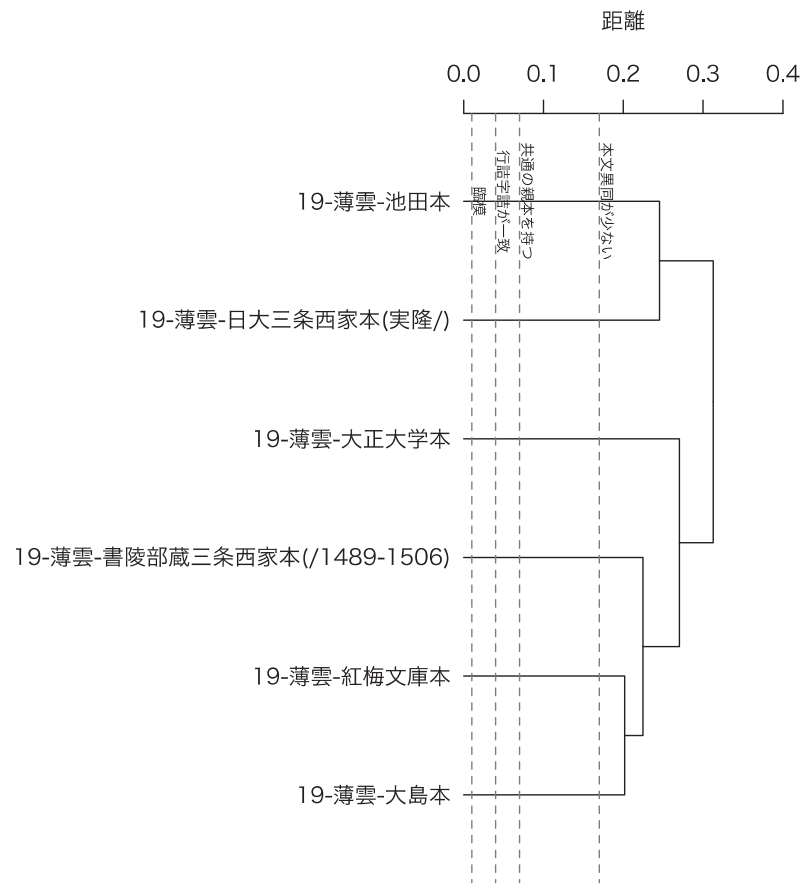
- 池田本と日大本は本文異同が少ない距離にある。
- 大島本と大正大学本、書陵部本は本文異同が少ない距離にある。

第十八帖「松風」



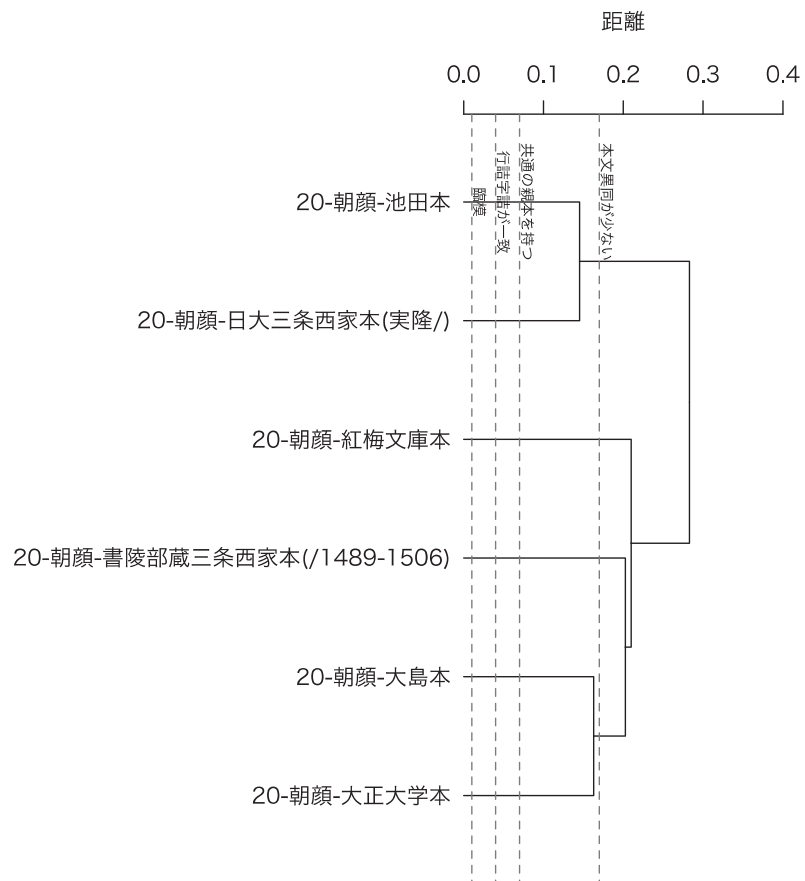
- 紅梅本と大島本は本文異同が少ない距離にある。
- 書陵部本と大正大学本は本文異同が少ない距離にある。

第十九帖「薄雲」



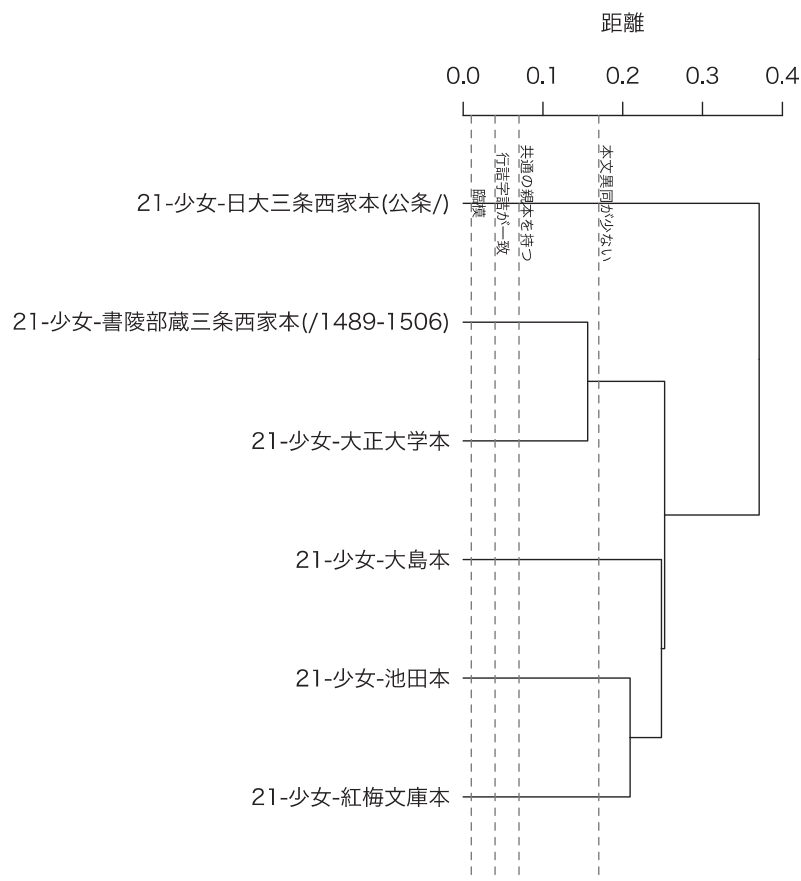
• 本文が類似する写本は存在しない。

第二十帖「朝顔」



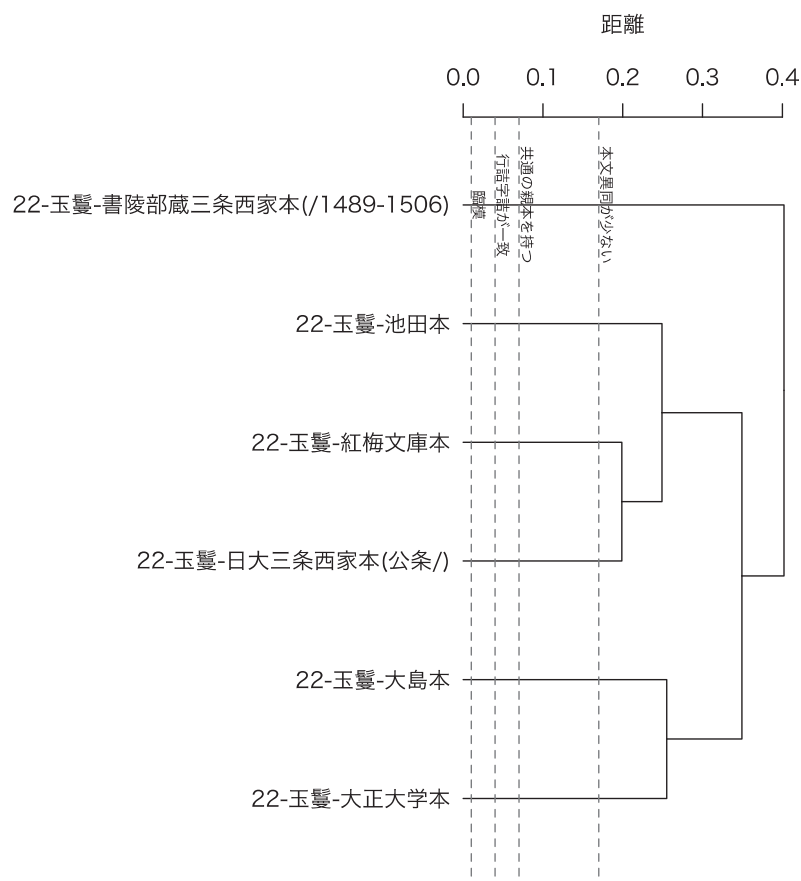
• 池田本と日大本は本文異同が少ない距離にある。
 • 大島本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。

第二十一帖「少女」



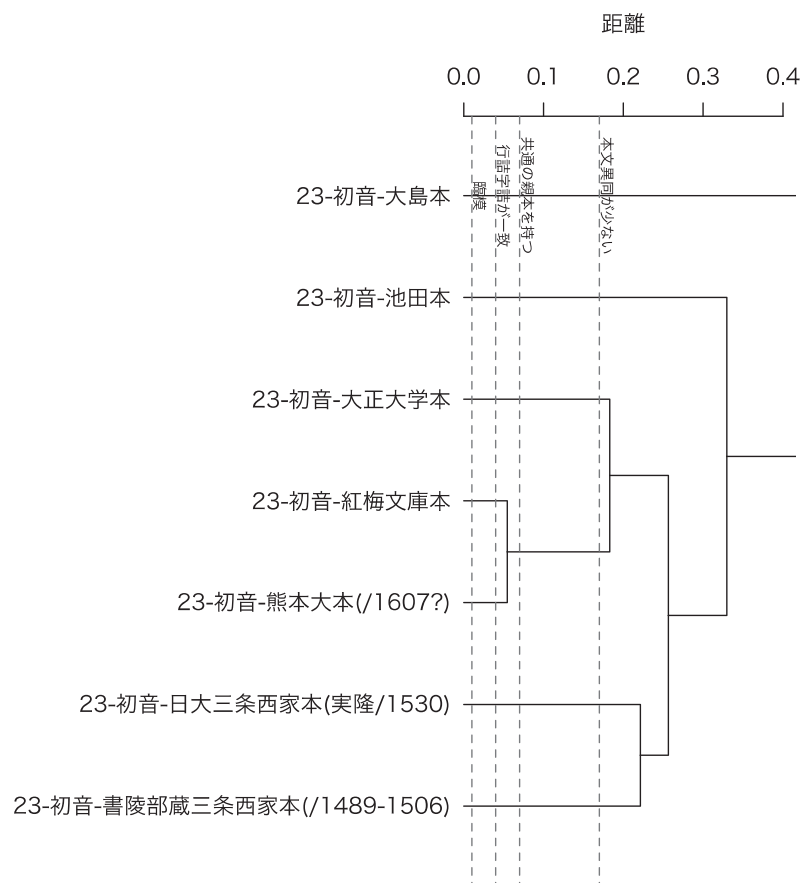
• 書陵部本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。

第二十二帖「玉鬘」



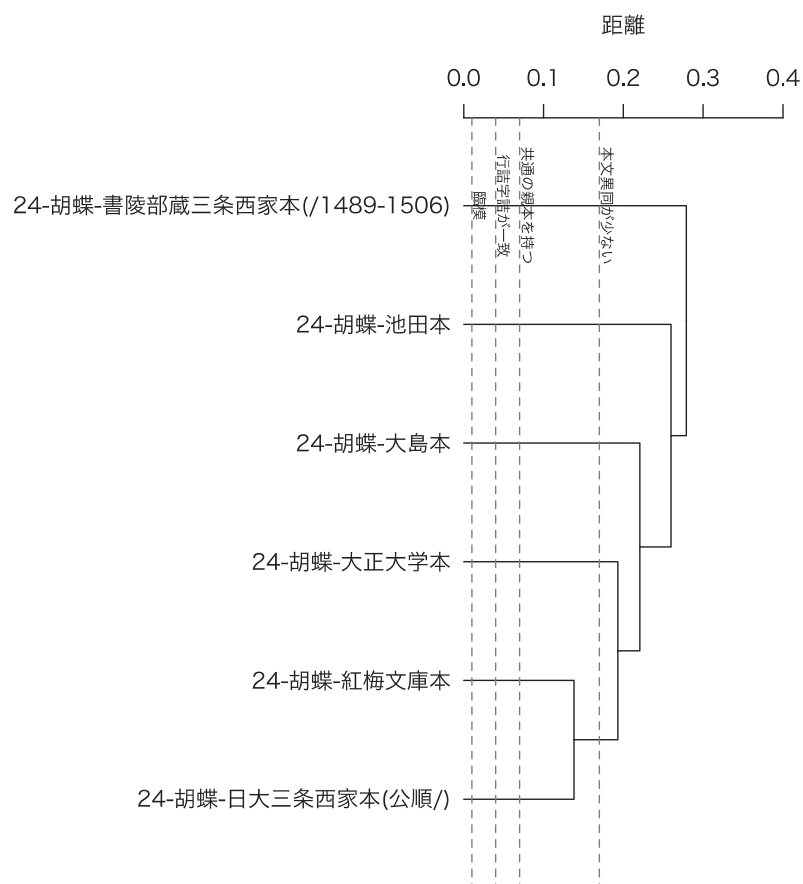
• 本文が類似する写本は存在しない。

第二十三帖「初音」



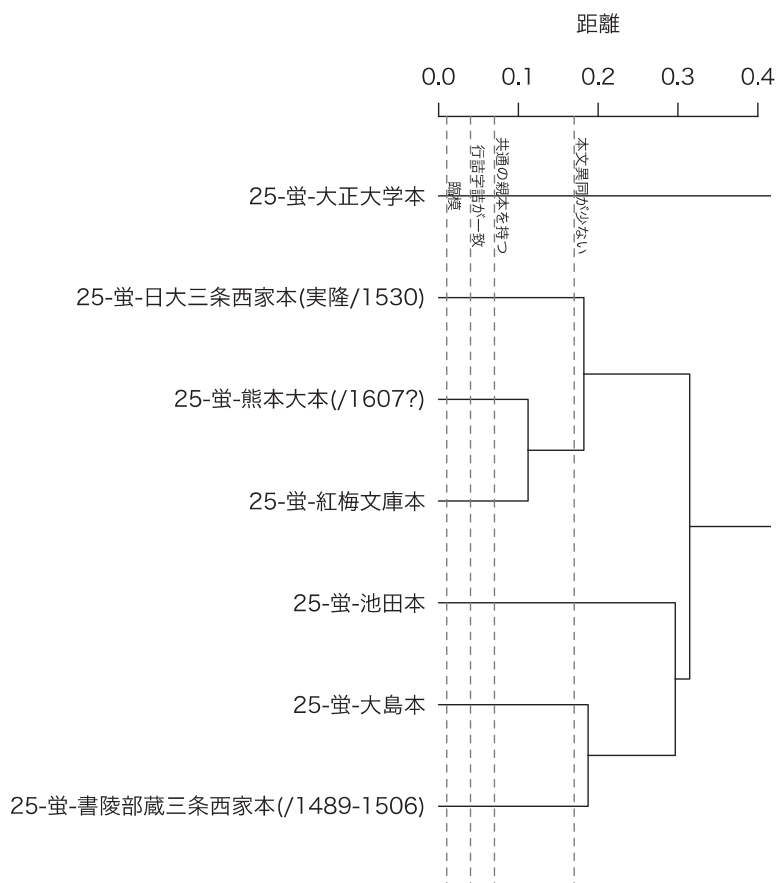
・紅梅本と熊大本は共通の親本を持つ距離にある。

第二十四帖「胡蝶」



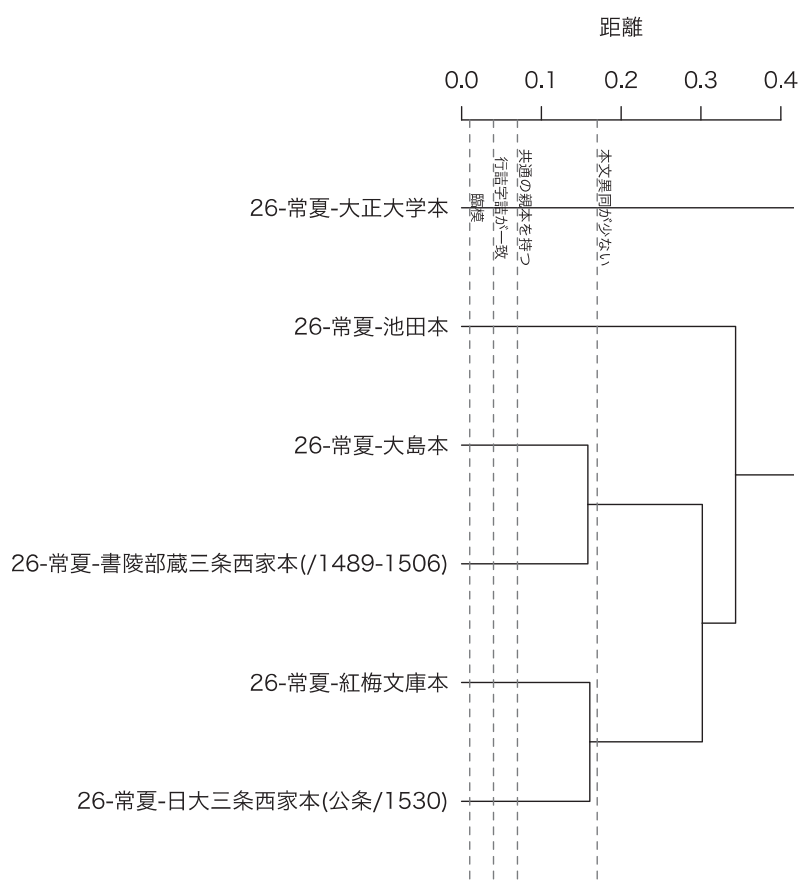
・紅梅本と日大本は本文異同が少ない距離にある。

第二十五帖「蛭」



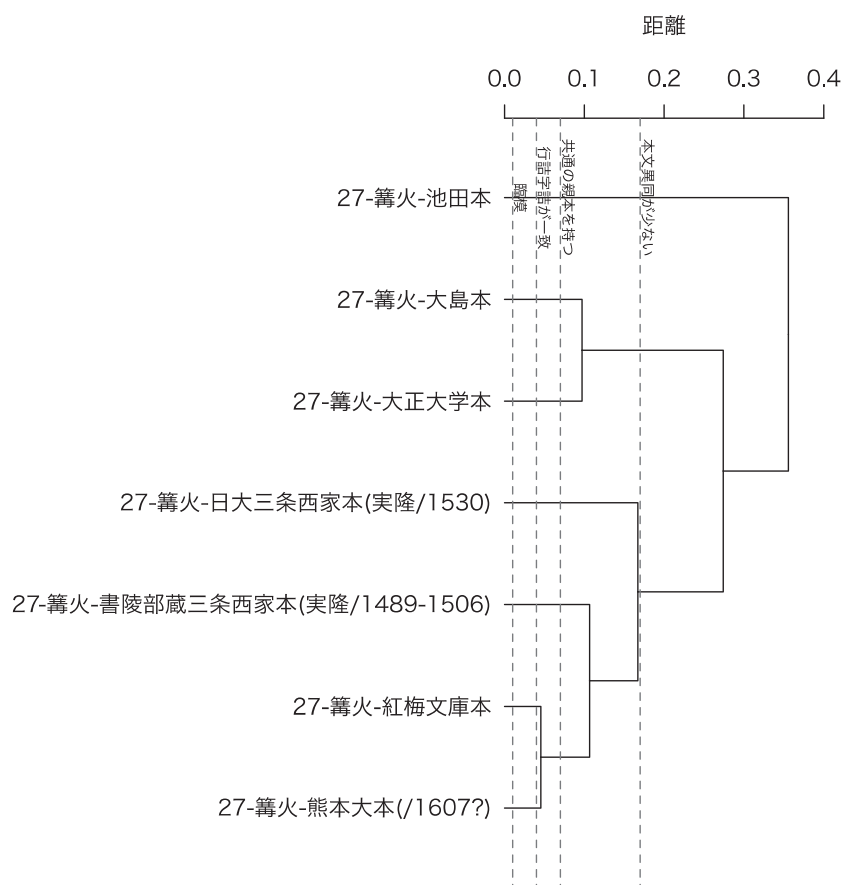
- 熊大本と紅梅本は本文異同が少ない距離にある。

第二十六帖「常夏」



- 大島本と書陵部本は本文異同が少ない距離にある。
- 紅梅本と日大本は本文異同が少ない距離にある。

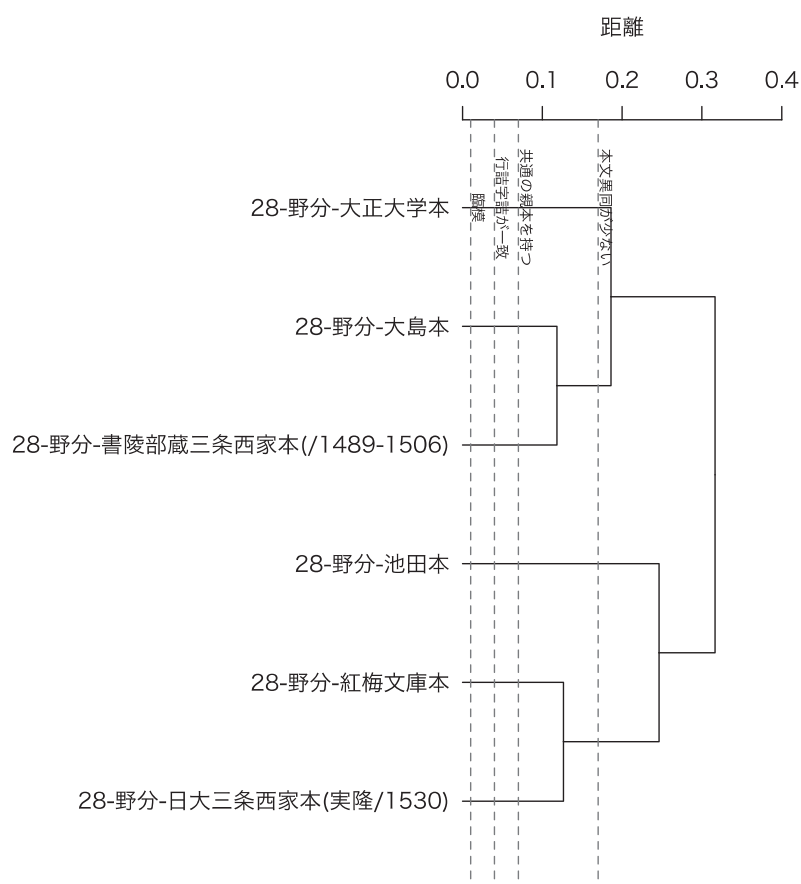
第二十七帖「篝火」



・ 大島本と大正大学本は本文異同が少ない距離にある。

・ 紅梅本と熊本本は共通の親本を持つ距離にある。書陵部本はそれらの写本と本文異同が少ない距離にある。

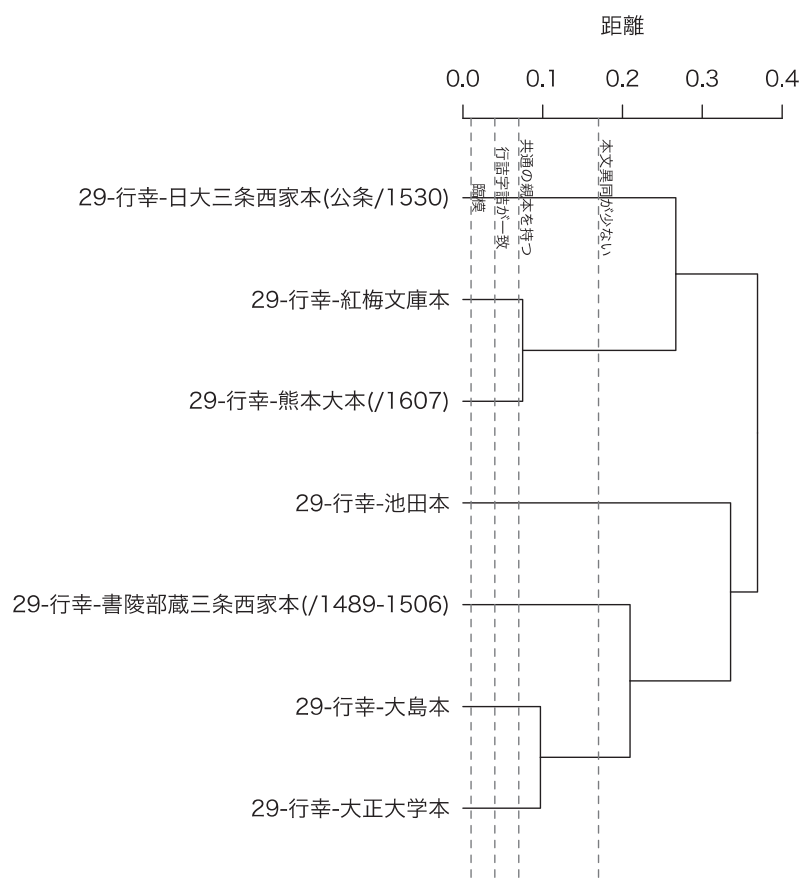
第二十八帖「野分」



・ 大島本と書陵部本は本文異同が少ない距離にある。

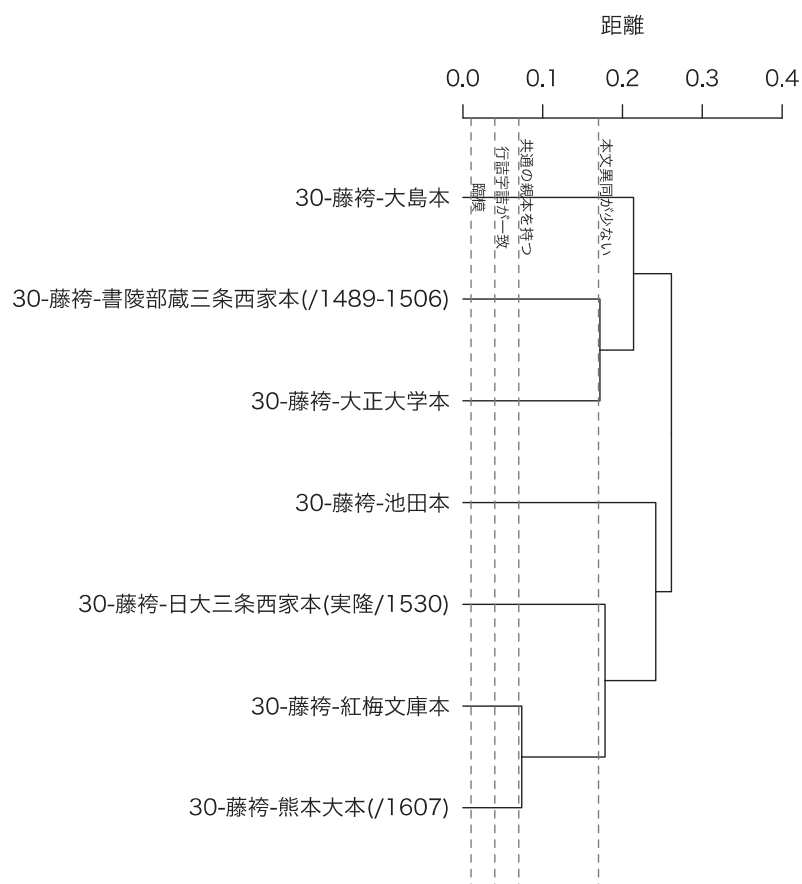
・ 紅梅本と日大本は本文異同が少ない距離にある。

第二十九帖「行幸」



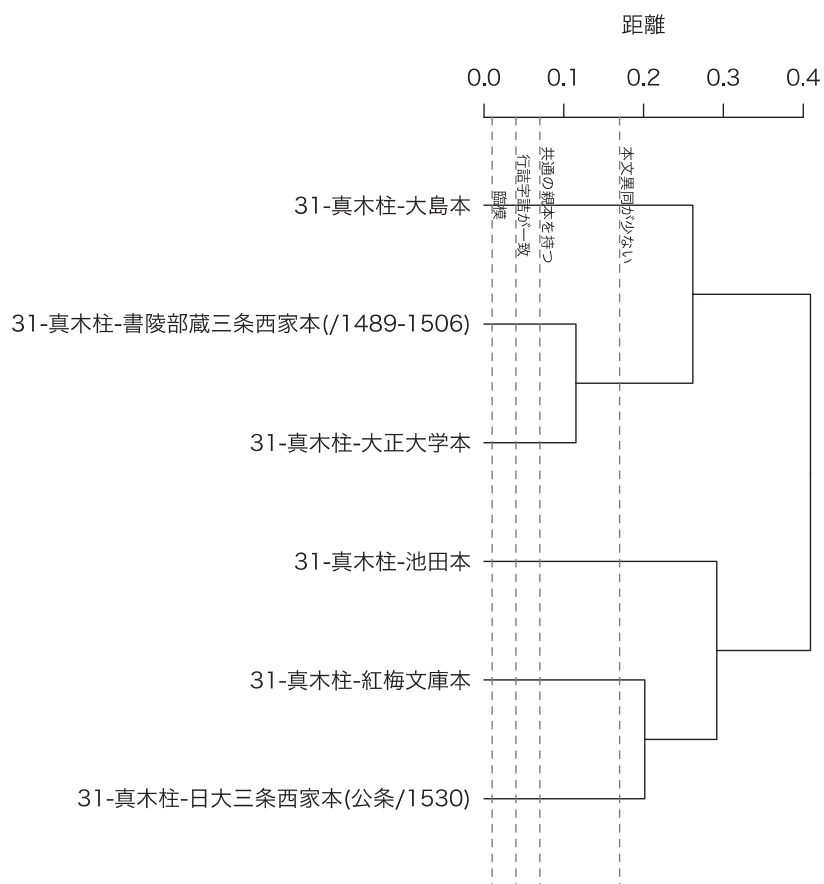
- ・ 紅梅本と熊大本は本文異同が少ない距離にある。
- ・ 大島本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。

第三十帖「藤袴」



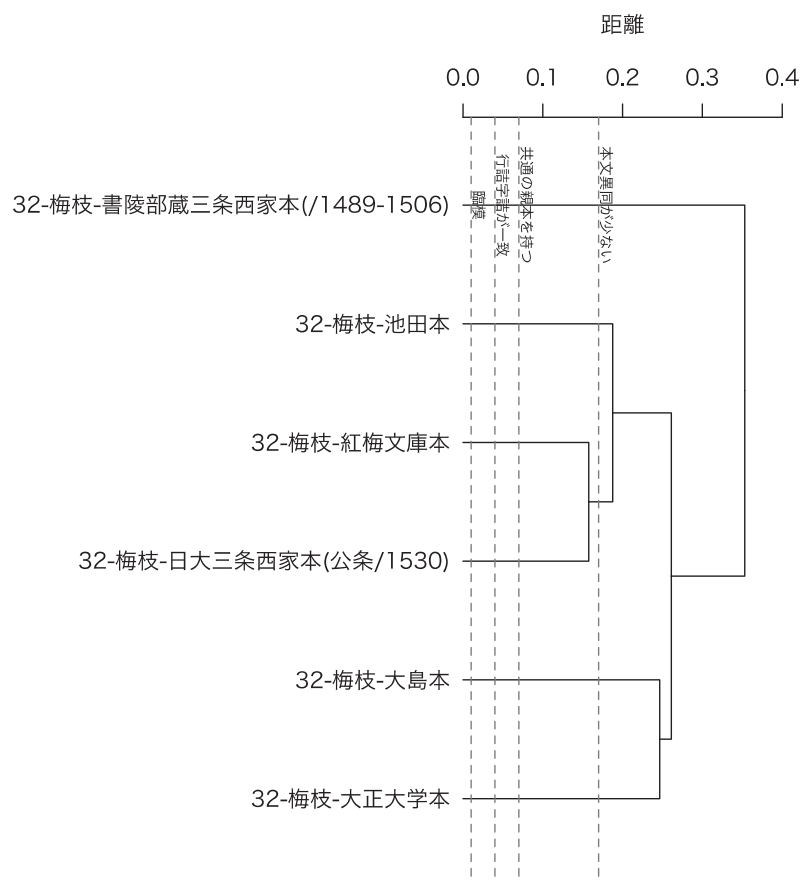
- ・ 紅梅本と熊大本は本文異同が少ない距離にある。

第三十一帖「真木柱」



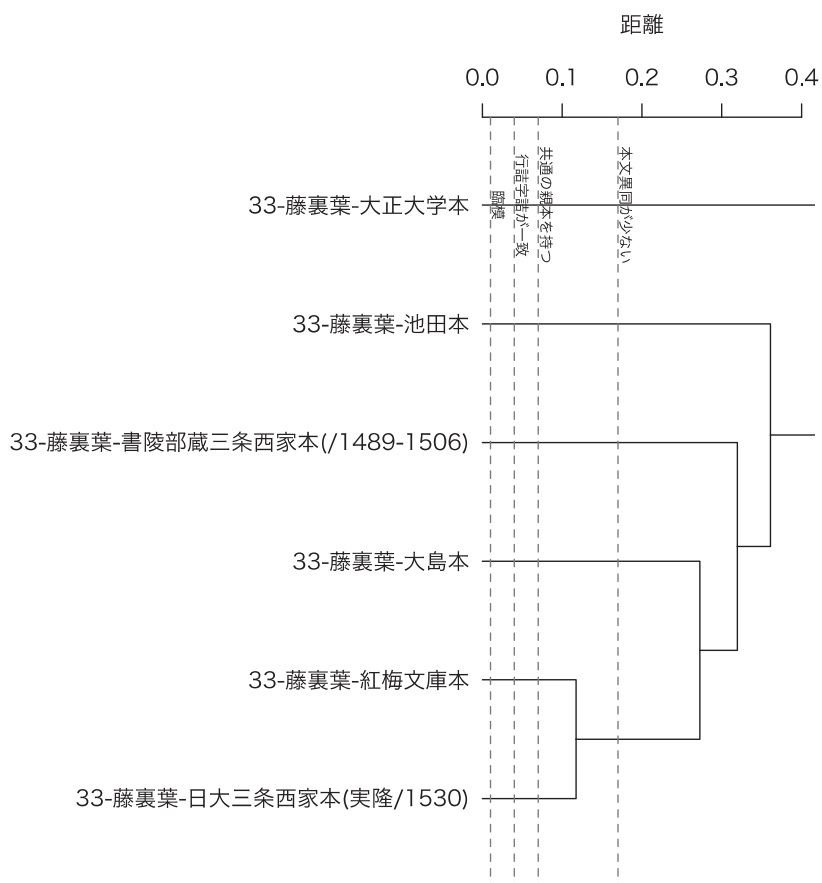
• 書陵部本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。

第三十二帖「梅枝」



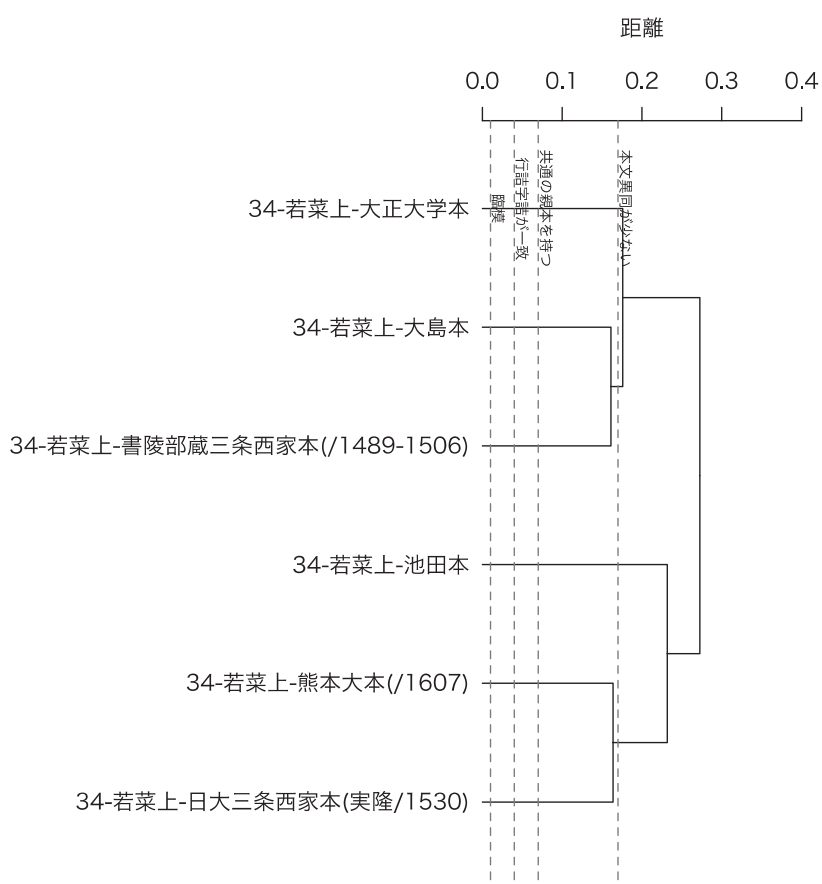
• 紅梅本と日大本は本文異同が少ない距離にある。

第三十三帖「藤裏葉」



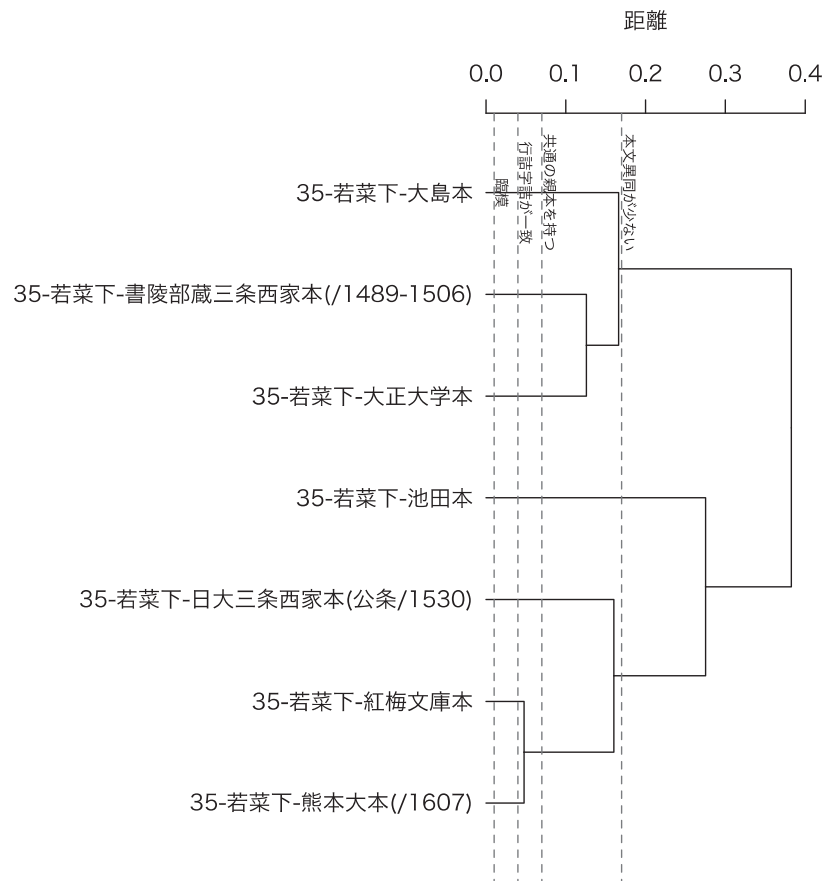
● 紅梅本と日大本は本文異同が少ない距離にある。

第三十四帖「若菜上」



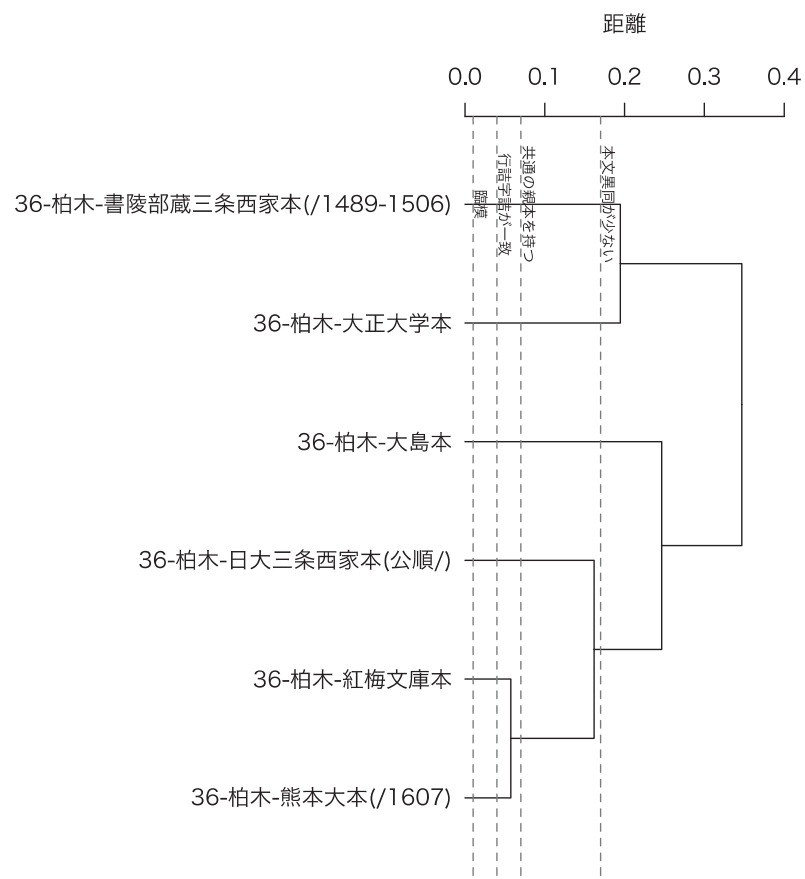
● 大島本と書陵部本は本文異同が少ない距離にある。
● 熊大本は中院文庫本と日大本と本文異同が少ない距離にある。

第三十五帖「若菜下」



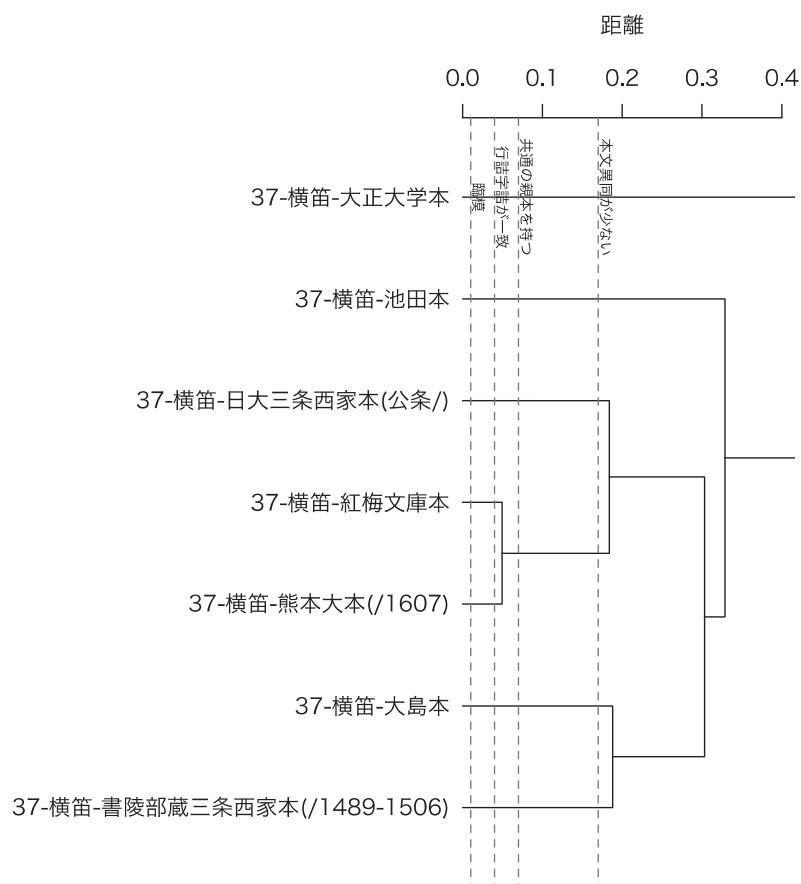
● 書陵部本と大正大本、大島本は本文異同が少ない距離にある。
● 紅梅本と熊大本は共通の親本を持つ距離にある。中院文庫本と日大本は、それらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第三十六帖「柏木」



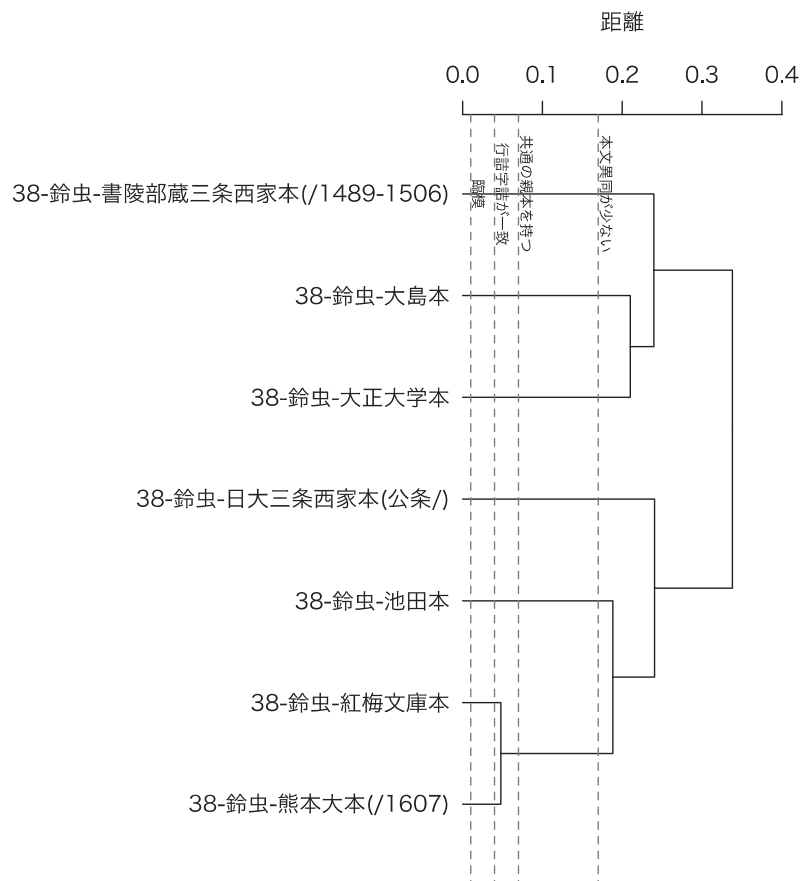
● 紅梅本と熊大本は共通の親本を持つ距離にある。中院文庫本と日大本は、それらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第三十七帖「横笛」



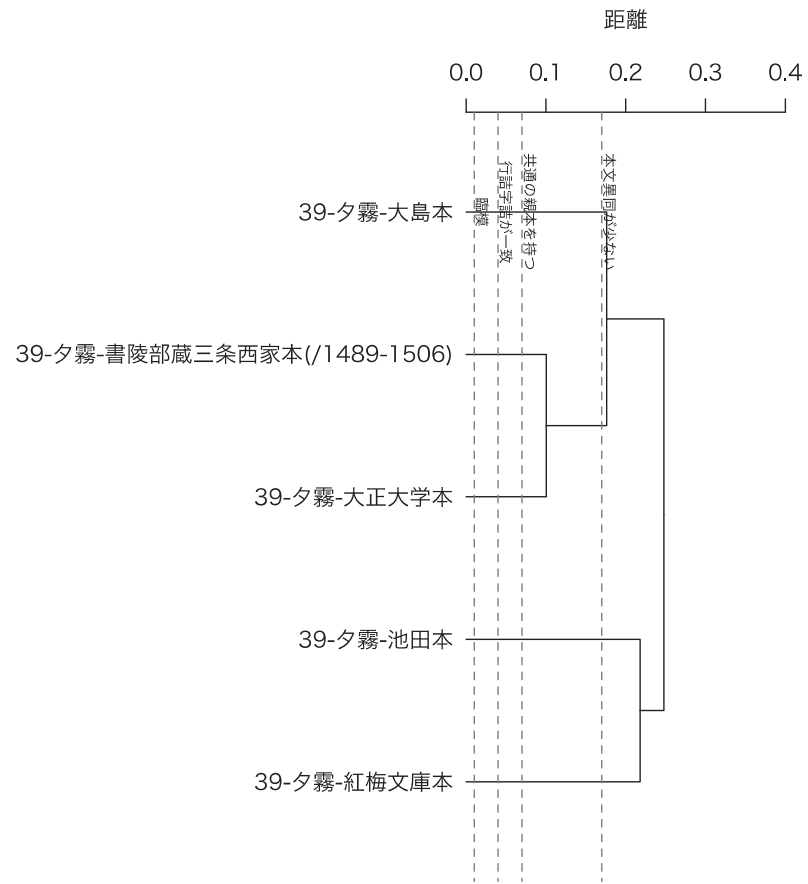
- 紅梅本と熊大本は共通の親本を持つ距離にある。

第三十八帖「鈴虫」



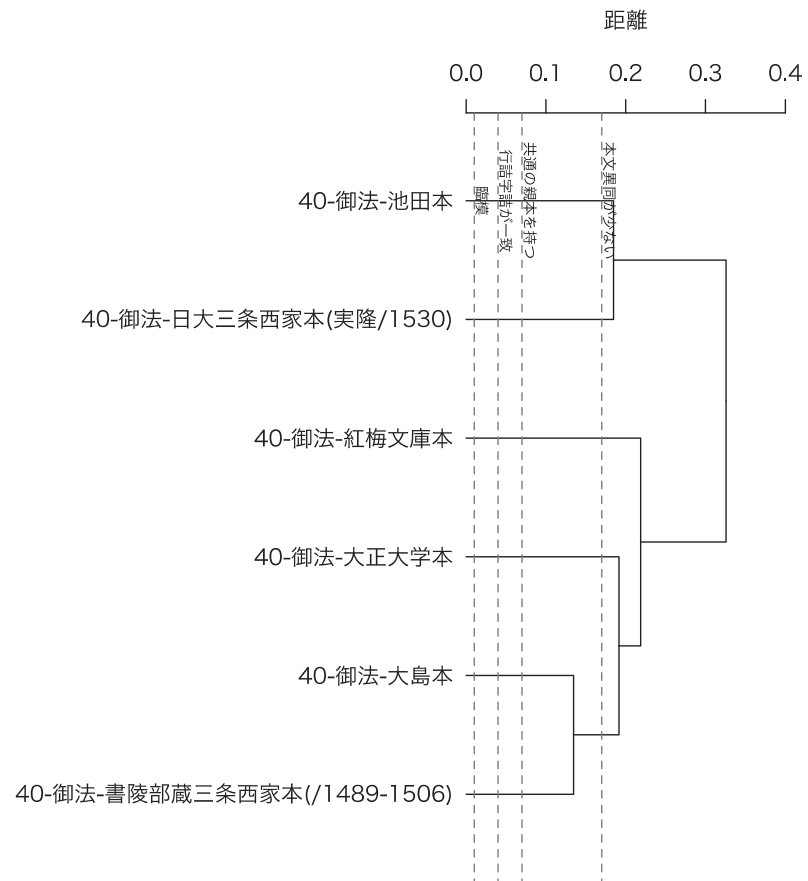
- 紅梅本と熊大本は共通の親本を持つ距離にある。

第三十九帖「夕霧」



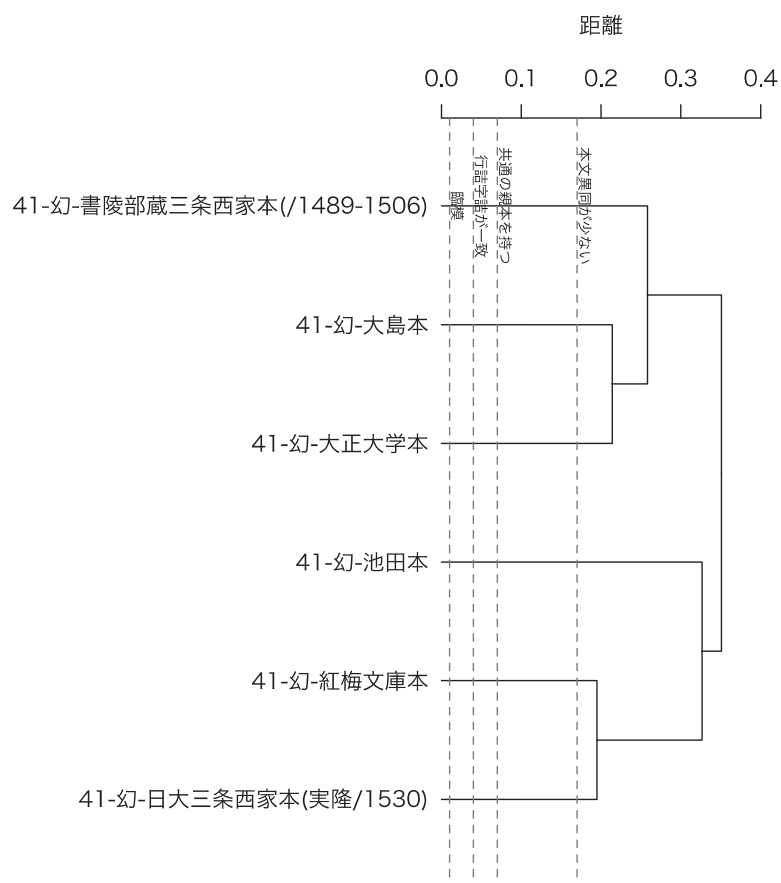
- 書陵部本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。

第四十帖「御法」



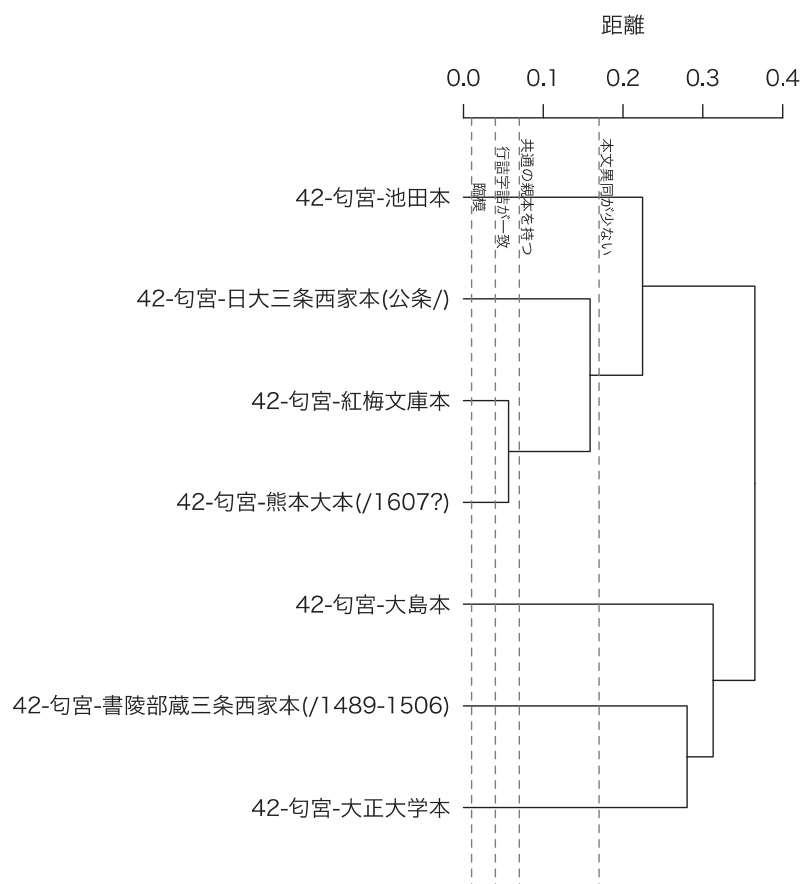
- 大島本と書陵部本は本文異同が少ない距離にある。

第四十一帖「幻」



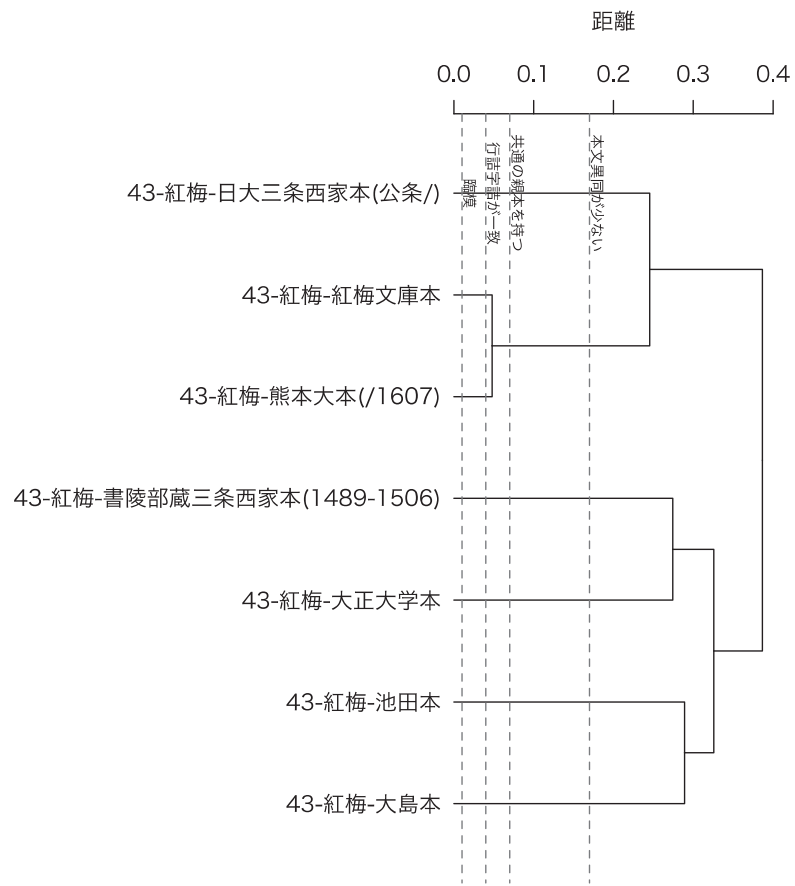
• 本文が類似する写本は存在しない。

第四十二帖「匂宮」



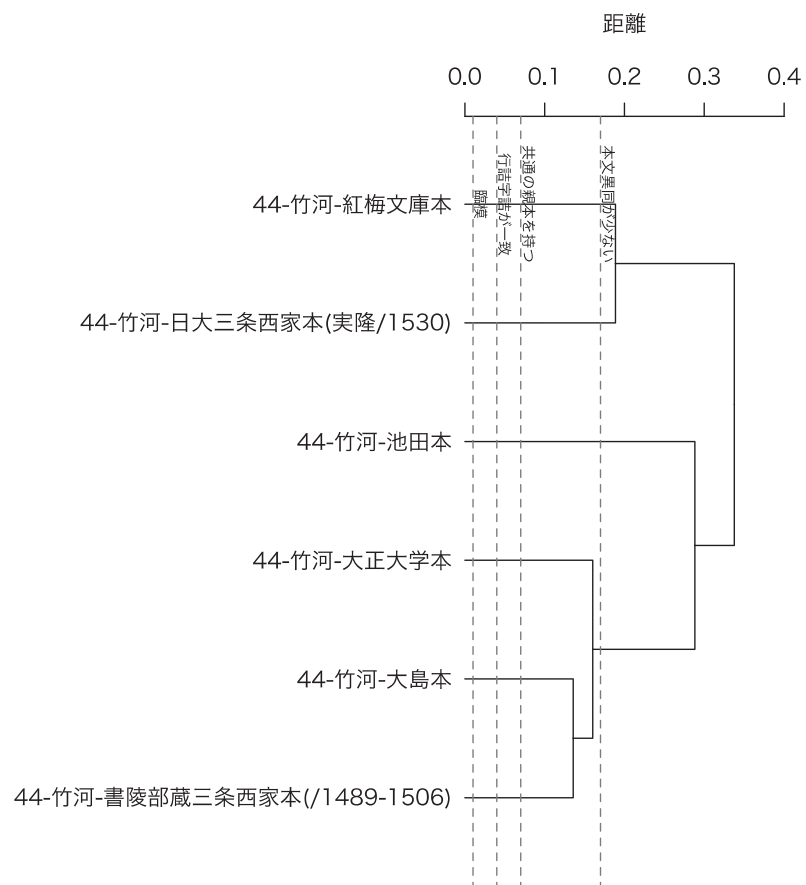
• 紅梅本と熊本大本は共通の親本を持つ距離にある。中院文庫本と日大本は、それらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第四十三帖「紅梅」



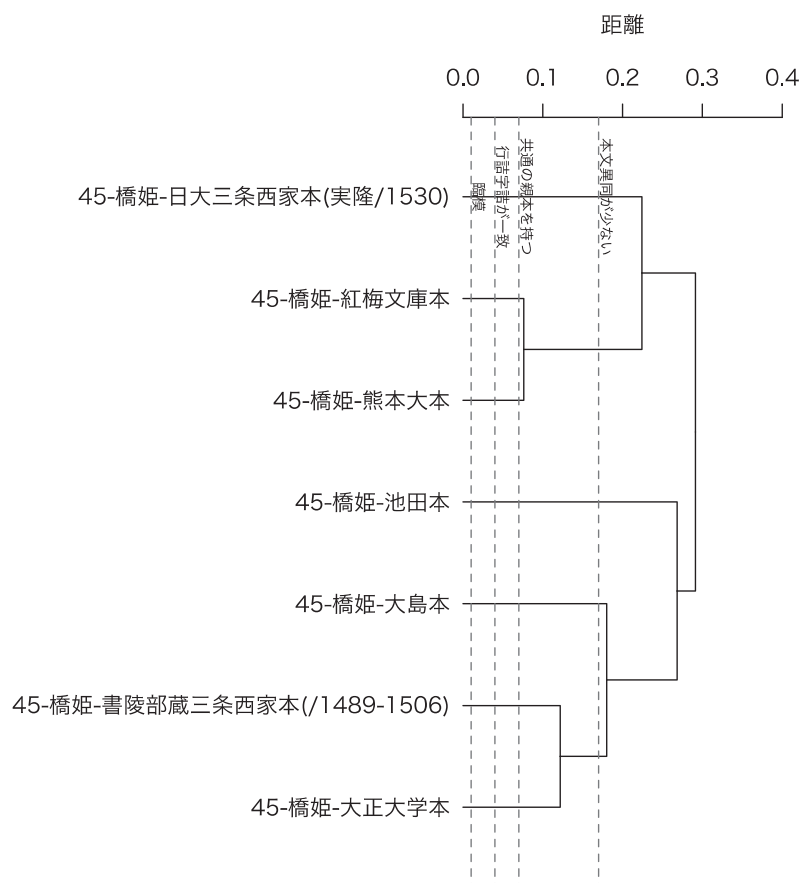
● 紅梅本と熊本本は共通の親本を持つ距離にある。中院文庫本と日大本は、それらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第四十四帖「竹河」



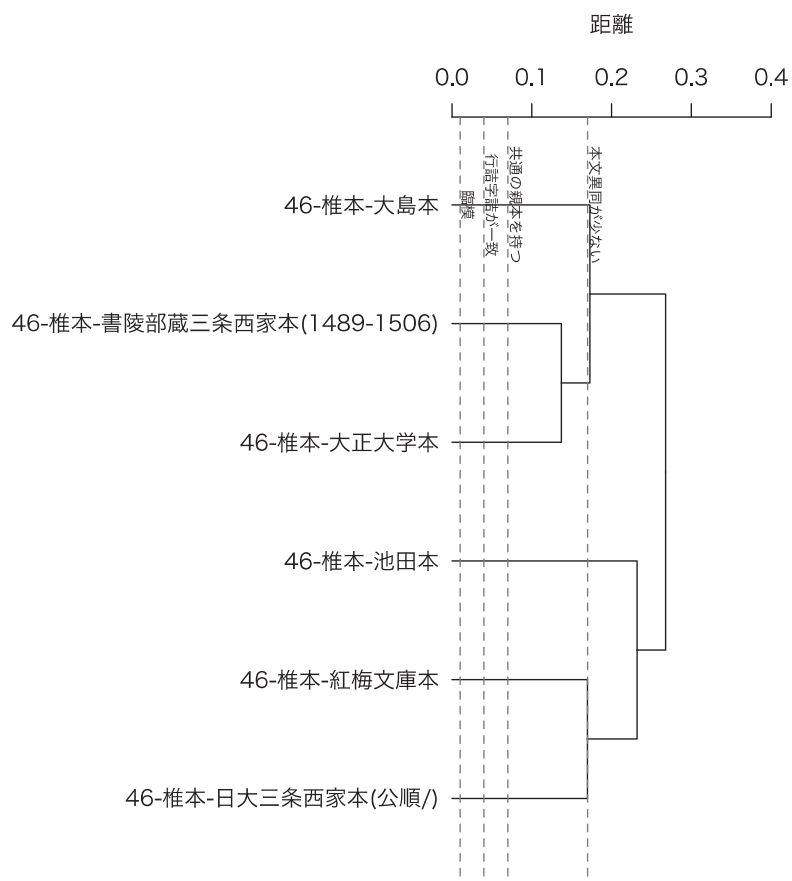
● 大島本と書陵部本は共通の親本を持つ距離にある。大正大本は、それらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第四十五帖「橋姫」



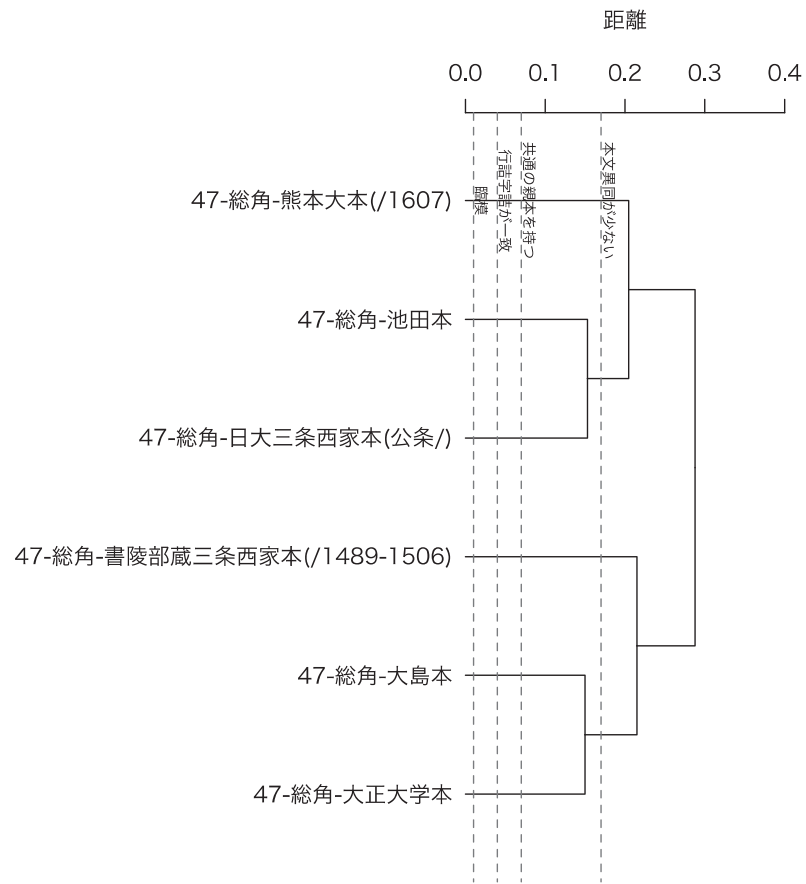
- 紅梅本と熊本本は本文異同が少ない距離にある。
- 書陵部本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。

第四十六帖「椎本」



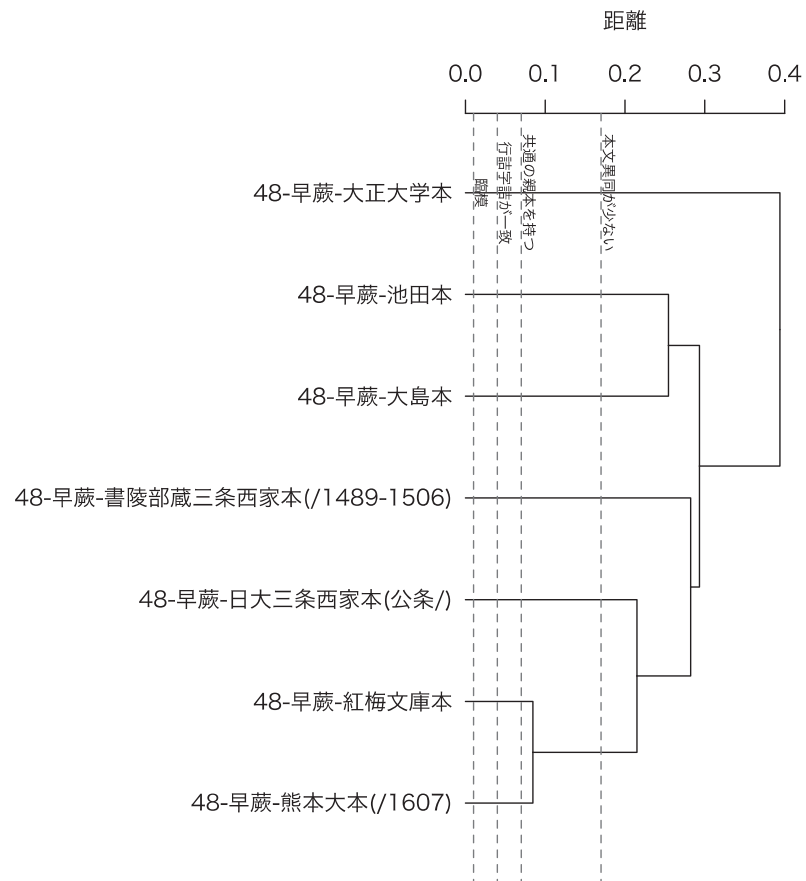
- 書陵部本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。
- 紅梅本と日大本は本文異同が少ない距離にある。

第四十七帖「総角」



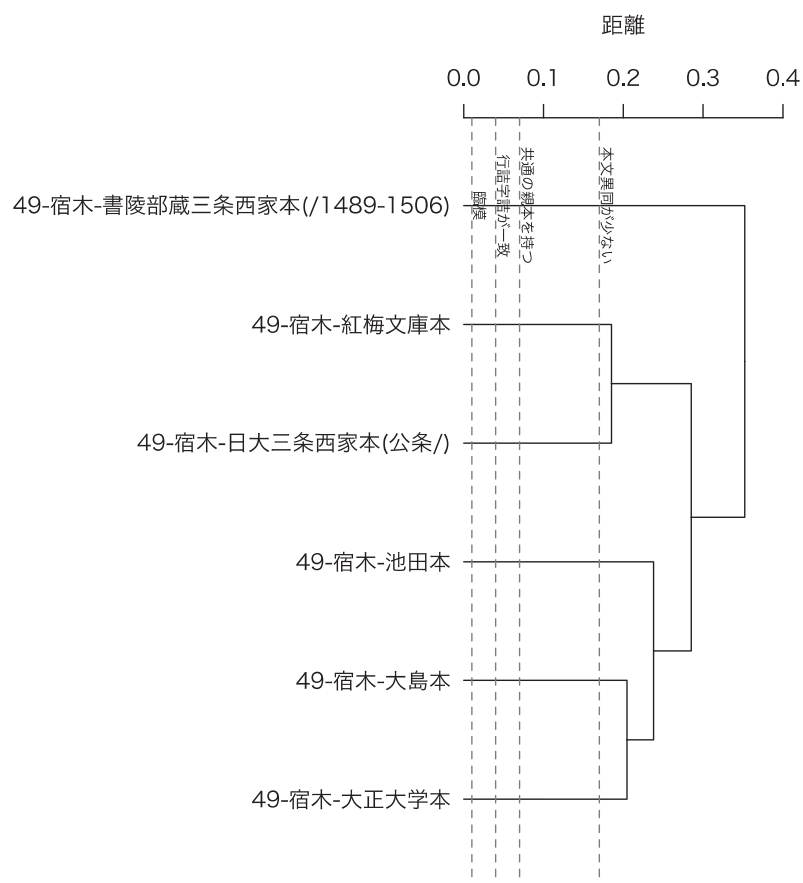
- 池田本と日大本は本文異同が少ない距離にある。
- 大島本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。

第四十八帖「早蕨」



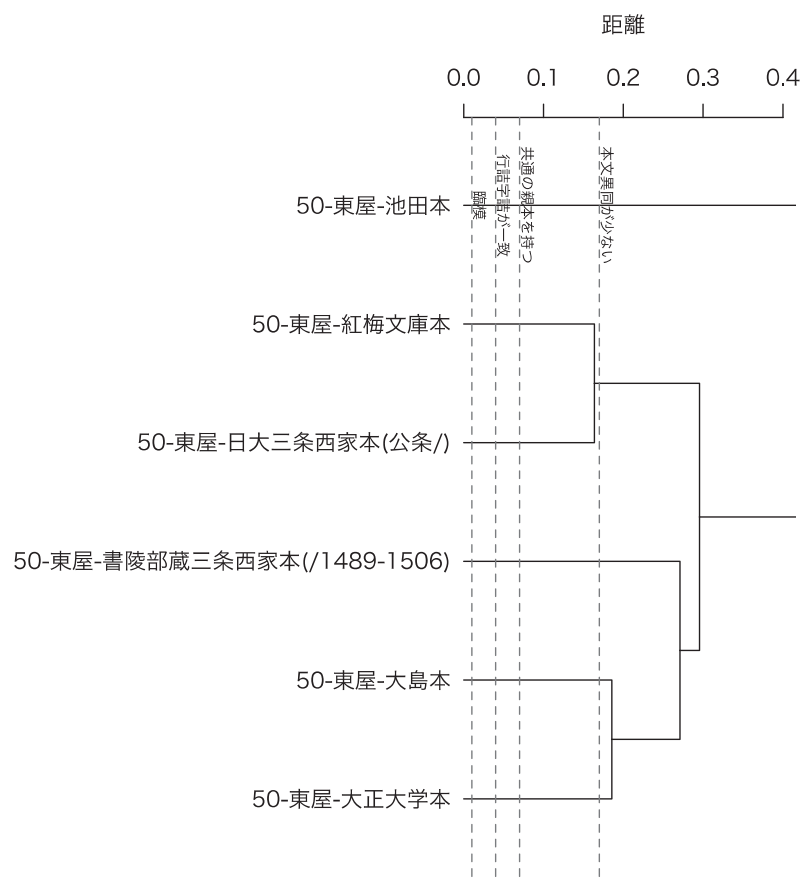
- 紅梅本と熊大本は本文異同が少ない距離にある。

第四十九帖「宿木」



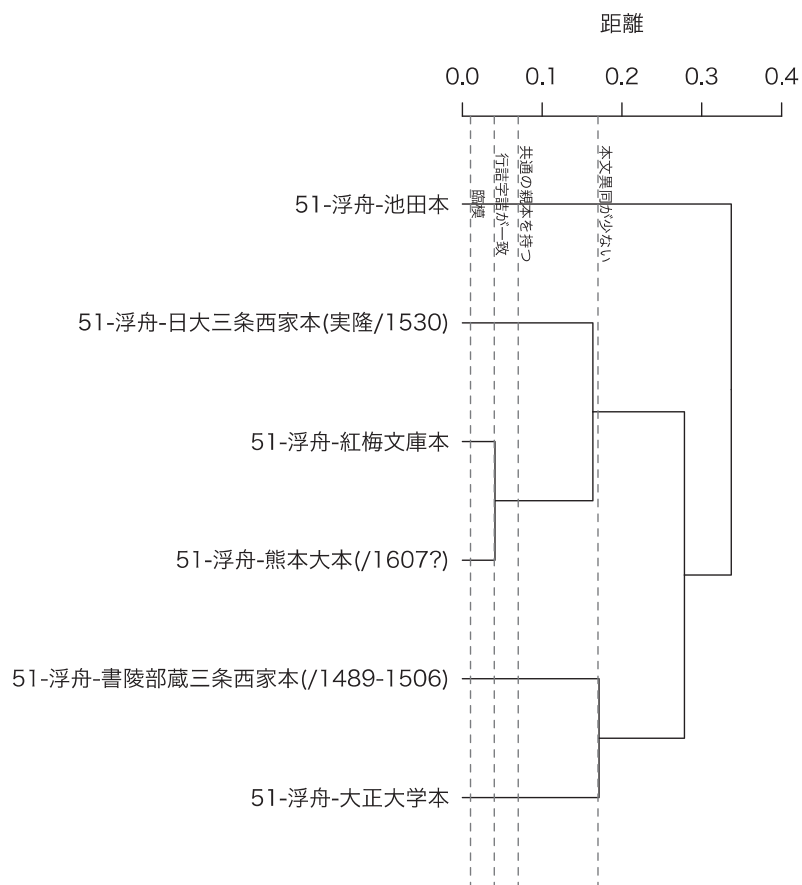
• 本文が類似する写本は存在しない。

第五十帖「東屋」



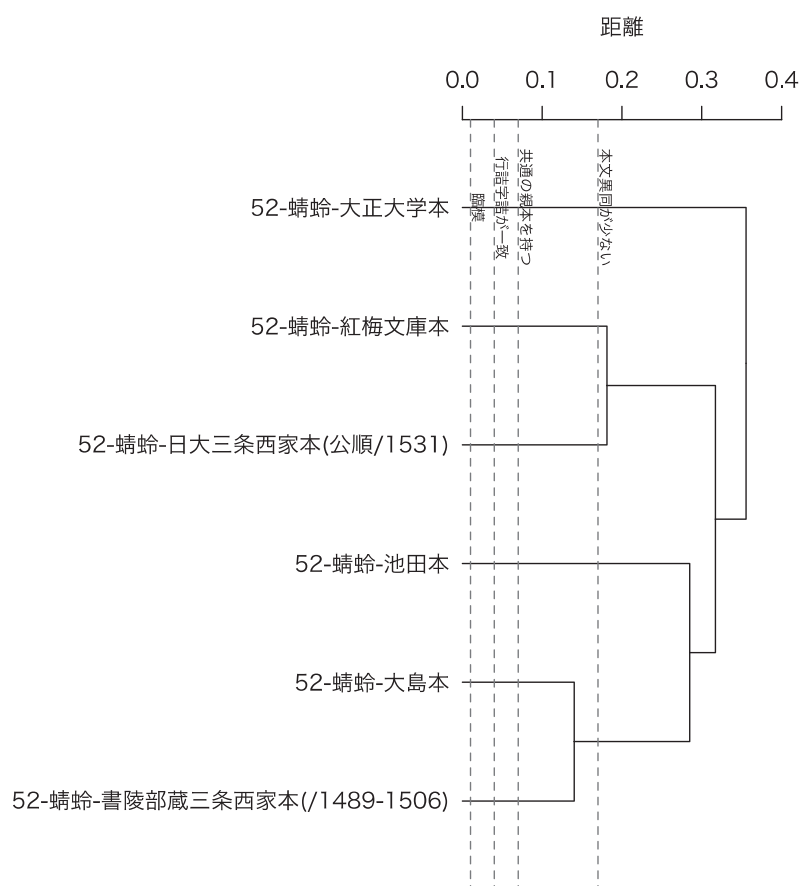
• 紅梅本と日大本は本文異同が少ない距離にある。

第五十一帖「浮舟」



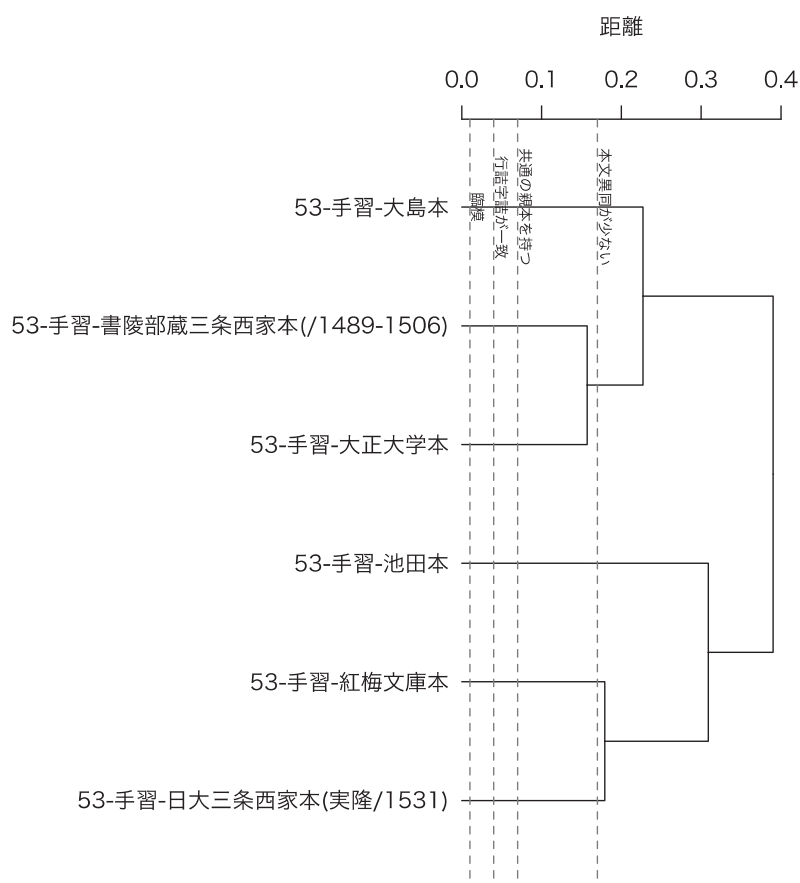
・紅梅本と熊大本は共通の親本を持つ距離にある。中院文庫本と日大本は、それらの写本と本文異同が少ない距離にある。

第五十二帖「蜻蛉」



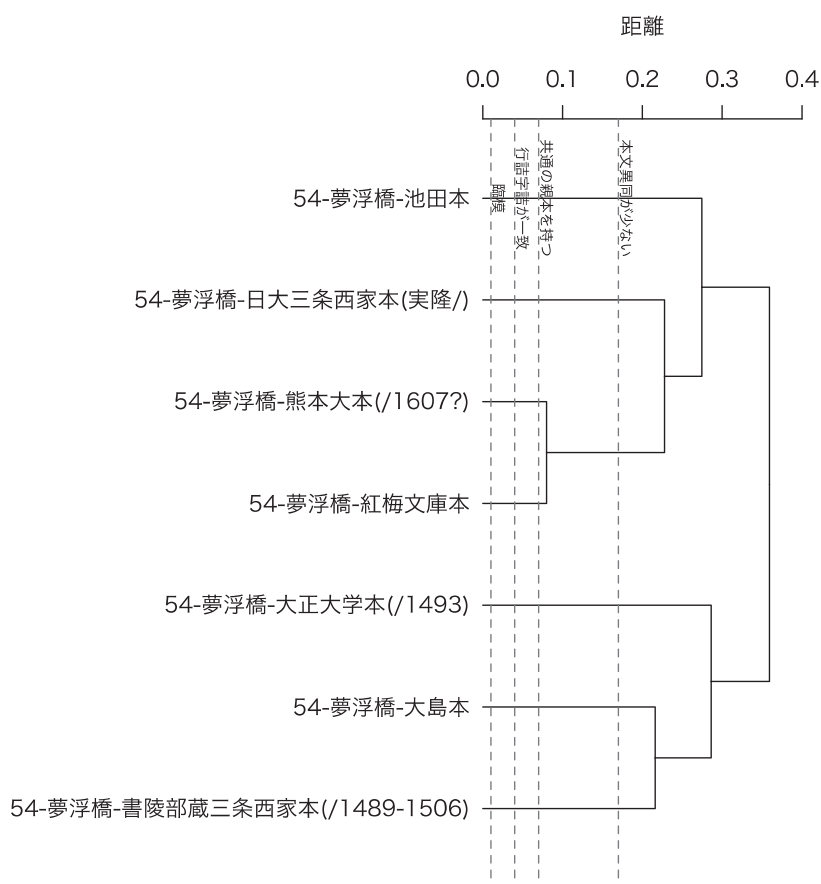
・大島本と書陵部本は本文異同が少ない距離にある。

第五十三帖「手習」



● 書陵部本と大正大本は本文異同が少ない距離にある。

第五十四帖「夢浮橋」



● 熊大本と紅梅本は本文異同が少ない距離にある。